

俺、ツインテールになります。12
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。12

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。12
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


テイルレッド
イースナ
津辺愛香
観束総二
トゥアール
神堂慧理那


ここまで奮戦ご苦労――ツインテイルズ。
それでは、もう一度初めからやり直すがいい。

目次

俺、ツインテールになります。12

水沢夢 ［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

結翼唯乃（いわばねゆの）

フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

観束未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

11巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

ついに最後のアルティメギル四頂軍・神の一剣が侵攻を開始。その恐ろしさを知るイースナは仲間を守るためにあえて再び悪の戦士へ戻る決意をするが、慧理那との戦いを通じて吹っ切れる。二人は見事、友情の力でグリフォギルディを撃破した。

アルティメギル組織図

？ アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



離反 **首領直属戦士 ダークグラスパー**

四頂軍や各侵攻軍の統率者。後に離反し、テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



最高科学者：マーメイドギルディ
交渉人：グリフォギルディ
など

ひとたび出撃すれば、狙った世界を破滅させると恐れられているアルティメギル最強部隊。所属戦士は恐るべき戦闘力と変態性を兼ね備えている。

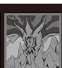
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊** 隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊** 隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊** 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　異世界の異変。

　緑が萌え、穏やかな風がそよぐ平和な地平。
　城の最上階にあるボクの部屋からテラスへ出ると、そんな穏やかな光景が一望できる。
　目を閉じ、しばしの間、心地ここちよい風を身に受けていると──
「ねえねえ、リルナちゃ～ん」
　背中に可か愛わいい声がかけられ、ボクは全速力で振り向いた。
　部屋の中から、愛いとしの姉様が呼んでいる。一秒以内のレスポンスが基本さ。
「どうしたの？　姉様」
「えへへ、次はどんなふうにお兄ちゃんに迫ろっか～？」
　テラスから部屋に戻ると、姉様がそんなことを言いながら、椅い子すに座って脚をぷらぷらと揺らしていた。
　姉様超可愛い……。
　ボクは世界を統すべる王家の双子姫の一人、リルナ。そして、全宇宙で一番可愛いこちらの女神が、ロエル姉様さ。

　かつてこの世界は、異世界を航わたる悪の組織・アルティメギルによる侵略を受けていた。
　そいつらは、人の心──属性力エレメーラを糧かてとして生きる、精神生命体たる怪人の集団だ。
　属性力エレメーラは、そんな恐ろしい魔物を生み出してしまう一方、人間自身にとっても大きな力ともなる。

ボクは属性力エレメーラの加護で、姉様と合体。この世界の守護者、ツインテールの戦士ロロリーとなって、怪人たちと戦い続けた。

だけど、アルティメギルの戦力はあまりにも底知れなく……姉様とボクは、次第にその強さに屈してしまったんだ。

そんなこの世界を救ってくれたのは、異世界からやってきた別のツインテール戦士。

観み束つか総そう二じという男が変身する少女、テイルレッドをリーダーとするツインテイルズだった。

ツインテイルズはものすごく強かったけど……ボクたちはそれ以上に、真の心の強さを彼らから学んだ。特に、熱血馬ば鹿かの総二からね。

総二は……ボクと、姉様と、この世界にとっての恩人なんだ。

だからって、ボクは総二の全部を認めたわけじゃない。

あいつは姉様に色目を使うし、やたらと周りの女にモテるし、そのくせ女じゃなくそのツインテールにしか興味がないしさ……。

ボクは━右の頬ほおの横で揺れる髪束の毛先を、そっと指で摘つまんだ。

まるでそれを見て何かを察したように、姉様が笑顔で言ってきた。

「やっぱり、私たち二人ともツインテールにして、お兄ちゃんにぎゅってすればいいんだよ。左右からツインテールに挟まれたら、奥手なお兄ちゃんだって狼おおかみさんになるよ！」

「そこまでサービスしてあげる必要ないって。絶対に図に乗るよ、総そう二じのやつ！」

「ダメだよリルナちゃん。最近お兄ちゃんの周りの牝めすども……じゃない、女の人たちがすっごい積極的になってるみたいだもん……ロエルたちも勝負をかけないと！　お兄ちゃん、私たちみたいに小ちっちゃい女の子でも、ツインテールなら興奮してくれるはずだもーん！」

……総二のことはいけ好かないけど、こういう認識をされてるのはちょっと不ふ憫びんだな……。
ボクたち双子姫は、合体する前はサイドポニーにしている。ボクが右、姉様が左。リボンの色はボクが白で姉様が黒。外見が全く同じだから、工夫をしてるんだ。
結びが逆のサイドポニーの二人が合体して、一つのツインテールを持った戦士になるってわけさ。
けど総二は、結び方を変えて姉様に変装したボクのことを見抜いたんだよなあ……。
ホント、おかしな奴やつだよ。
胸のもやもやを悟られないように、努めて冷静に……ボクは姉様を諭す。
「あのね、姉様。ボクは別に、総二に迫りたくなんてないよ。夢通信であいつに会いに行くのだって……他の女と結婚しようとしていないか、監視に行っているだけだし」
そう、ボクたちの王家には、あるしきたりがある。
父親以外で初めて姫の髪に触れた男を、生涯の伴はん侶りょとせよ、と。

そして総二が──姉様とボクの〝初めて〟を奪った男だ。
だからボクと姉様は、いつか総二と結婚しなくちゃいけない。とんだ災難だよ。

「夢世界なら現実より責任が薄れるから、手を出しやすいもん！　周りの擦すれた女に疲れたお兄ちゃんに、ロエルたち姉妹の純粋さは効果絶大だよっ！」
擦れてるけど、綺き麗れいな女の子ばっかりなんだよぉ、総二の周

り……。
　義務とはいえ……ボクと姉様が結婚してやるって言ってるのに、何が不満なんだよ、あいつっ！　さっさとＯＫしろよ!!
「ふんだ。総二みたいなツインテール変態には、周りの変態女どもぐらいで丁ちよう度どいいんだよ。あいつに姉様は勿もつ体たいなさ過ぎるよ」
「もー、リルナちゃんそんなこと言って……」
　姉様は嬉うれしそうに、笑顔でしなを作った。
　姉様超可か愛わいい……。
「お兄ちゃんに会えないと、寂しくて泣いちゃうくせに～！」
「な、泣いてないよお!!」
　そうさ、泣くもんか。あいつは、女の涙のために無茶をする奴やつだしね……。
「世界を隔てたって、人は繋つながることができるんだもん。寂しくなんてないよ」
　ボクは、自分に言い聞かせるようにそう言った。
「ほぇ～、リルナちゃん、総そう二じお兄ちゃんともう繋がっちゃうの？　焦じらさなくていい？」
「そ、そういう意味じゃないよお!!」
「えへへ～、リルナちゃん、エッチなんだぁ。ちゃ～んと意味わかってるっ」
　頰ほおを両手で押さえて、いやんいやんと顔を振る姉様。
　姉様クッソ可愛い……。
　けど、ここはきちんと否定しておかないと。気品が求められる王家の姫が、侍女たちの目を盗んでエッチなことの勉強をしてるなんて、絶対に知られちゃいけないからね。絶対にね。
「――！　リ、リルナちゃん……空に……!!」

　姉様が、唐突に立ち上がってテラスへと走っていく。ボクは慌あわてて後を追った。
「どうしたの、姉様!?」
「い、今……空にエレメリアンが浮いてた……!!」
　怖々と空を指差し、姉様はボクに抱きついてきた。
　侵略部隊が撤退したとはいえ、侵略を受けた恐怖は未いまだに消えない。
　姉様は今でも、こうして城のテラスから外を見渡すと、空に大地にエレメリアンが跋ばつ扈こしている幻覚を見てしまうのだろう。ボクたちの戦いの日々は、それだけ苛か烈れつなものだった。
「大丈夫だよ姉様。戦いは終わった。もうこの世界に、エレメリアンは現れないんだから」
　役得だし、どさくさ紛まぎれに思いっきり抱きしめておこう。
　総二も……ボクが怖がったり、寂しがったりすると、いつもこうやって抱きしめてくれるんだよね……。
　って、どうして何かにつけて総二あいつのことばっかり思い浮かぶんだよお!!

　瞬間。
　城を激しい突風が襲おそい、僕と姉様はたたらを踏みながら互いを支え合った。
「な……あれ、は──!!」
　ボクが目を開いた時──空は、泥のように濁った雲に覆おおわれていた。
　なお吹き荒すさぶ冷たい風が、ボクたち二人の小さい身体からだを容赦なく凍いてつかせる。
「……み、見間違いじゃないよ、リルナちゃん……！　やっぱり、い

る……!!」
　震ふるえる指の先に、確かにそれはいた。
　突とつ如じよ空を覆おおった暗雲の只ただ中なかで、不気味な黒い人影が揺らめいている。
　そしてボクたち二人は、そのシルエットに見覚えがあった。
「リルナちゃん、あれ……」
「あの天を衝つくような翼……まさか、フェニックスギルディなのか!?」
　フェニックスギルディは━組織に反逆したらしい、風ふう来らい坊ぼうのエレメリアンだ。
　総そう二じの夢通信はなしだと、フェニックスギルディは今も総二たちの世界で健在。この世界にふらっと戻ってきてもおかしくはない……！
　だけどあいつは、強引で俺様主義な最悪の脳筋だったけど、エレメリアンの中でもことさら仁義や筋を通すことを重んじていたはずだ。そんな奴やつが、アルティメギルが撤退宣言をしたこの世界に再び目をつけたりなんてするだろうか……!?
　しかし、悪夢は醒さめるどころかさらにその凶悪さを増していった。
　天には翼の邪影。
　そして大地には……植物が芽吹くかのように、次々と黒い影が形を持ち始めていた。
「……う、嘘うそだろ……!!」
　姉妹二人抱き合い、ただそのおぞましい光景を見つめることしかできない。
　鬱うつ屈くつとした黒いオーラで輪郭が形成されていく影は、数十、数百……とめどなく大地を埋め尽くしていき━最後に形成された黒い塊は、雲を突き抜けるほどの大樹となった。

　まるで……神の世界の樹のような。
「あっ……！」
　ボクは、思わず声を上げてしまった。
　空に浮遊する、翼を持ったエレメリアンの影が、手を挙げた瞬間だった。
　大地を覆う無数の影が、天に逆落つ流星の如く次々と飛び立ち、暗雲の中へと消えていく。
　呆ぼう然ぜんと見つめる姉様とボクを余よ所そに、それは最後の一体となるまで続き──そして、最後には全てが消えていた。
　大地の黒影も。空の黒翼も。天の黒雲も──。
　文字通り台風一過した後の空と大地は、さっきまでの出来事が嘘のように穏やかさを取り戻していた。
　テラスにへたり込んだボクと姉様は、どちらからともなく伸ばした手と手を繫つなぎ合った。
「ゆ、夢……じゃ、ないよね……」
「確かに見たよ……あれはみんな、総二たちがこの世界で倒したエレメリアンだった……！」
　あいつらは、あの影たちは、この世界に再び現れ、他の世界へと向かったんだ……！
「一体、何が起ころうとしているんだ……？」
　ボクのか細い声は、穏やかな風に運ばれ、空に消えていった──。

第一章　ツインテールを掴つかもう！

「ノーパンだ」

　相対する白ローブの巨体が放った言葉に──俺たちツインテイルズは絶句した。
「………………え？」
　数度の瞬まばたきを経て、俺はようやく一言だけ絞り出す。
「我わが愛は──ノーパンだ!!」
　聞き間違いであって欲しいという願いは、食い下がるように烈はげしく重ねられた言葉で脆もろくも崩れ去った。
　その勢いのままに、まとっていたローブを掴んで天高く投げ捨てるエレメリアン。
「とくと見よ、その愛が育はぐくんだ頑強なる肉体!!」
　明らかになった全ぜん貌ぼう。
　鋭い棘とげが襟えり巻まきのように首から頭を囲い、肩から胸までを枝し垂だれ桜のような鱗うろこの鎧よろいが覆おおう。
　背の翼は丸まってスカートのように腰元を護まもっており、その下には巨木のように逞たくましい二本の脚が地面に根を下ろしていた。
　重戦車を思わせるマッシブさと、騎士のような精せい悍かんさを兼ね備えたその姿。
　神話に勇名猛たける剛龍、ワイバーンを彷ほう彿ふつとさせる。
「俺の名は神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、ワイバギルディ！　非穿属性ノーパンツを魂たましいと輝かせし者よ!!」

そのワイバーンの化身が、神話級に頭の痛いことを口走った……。

アルティメギル四し頂ちよう軍ぐん最強最後の軍団、神の一剣ゴー・デイア・ソード──。

その先せん鋒ぽう・グリフォギルディとヒドラギルディを二週間前に撃破したのを皮切りに、俺たちはさらに今日までで二体の神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士を倒した。神の一剣ゴー・デイア・ソードとの戦いは、今のところ順調だと言えるだろう。

しかし、溯さかのぼること僅わずかに十数分前──本日の放課後。

ツインテール部部室でのんびりとしていた俺たちは、エレメリアン出現を受け出撃。仕事終わりのイースナとも合流して現場に到着し、こうして通算五体目の神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンと対たい峙じしたわけだが──そのワイバギルディの特殊性は、これまででも最高クラスだった。

ここは、日本一の高さを誇る長大なエスカレーターを擁する遊園地。落下型アトラクションへの入場のため設置されたエスカレーターなのだが、華美にライトアップされており、それ自体もアトラクションとして機能しているようだ。

ワイバギルディはそのエスカレーターの昇り口前に陣取ったまま、全く動こうとしない。

強大な神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士との戦いは、戦闘規模も大きくなることが常だ。速やかな避難誘導が急務だが……ここで活躍するのは、メガ・ネ──世間で呼ばれるところのテイルシルバー。

昔は退避してくれない民衆に焦じれたブルーが威い嚇かくして散らすことが多かったが、メガ・ネがお願いすると、そのおかん力に絆ほだされた人々はスムーズに避難をしてくれる。

暴力だけが全てではないと、おかんが証明したのだ。

　ブルーは、かつて民衆を威嚇していたランスの切っ先をワイバギルディに突きつける。
「……血祭りに上げる前にちゃんと聞いておくわ。ノーパンって、パンツを穿はかないことのノーパンで合ってる？」
「他に何がある！　よもや、朝食べるパンが無い、つまりノーパンだ、などとユーモアを振りまくつもりか貴様!!」
「ここまでの数言ですでにユーモアが飽和してんのよあんたは!!」
　ワイバギルディはブルーの胸を凝視すると、その野太い声で豪笑した。
「テイルブルー、さしずめ貴様はノーパンならぬノーパイといったところか！　ふははははは、我われながら上う手まいことを言ってしまったわ!!」
「上手いわね、ご褒ほう美びよ」
「ぐわあああああああああああああ目に突き刺さる指!?」
　さしずめの返礼とばかり、目に爪つめを刺していくブルー。ワイバギルディの岩グーのようにごつい顔面に、死のチョキが襲おそいかかる。究極の脳筋とは、チョキでグーを撃破することなのだ。
　奇襲は回避されたようだが、ブルー……いくら怪人相手とはいえ、容赦なく目つぶしをしにいくとは。……まあ、トゥアールにもしたことがあったから今さらか……。
「チィッ……！　何という蛮族！　ここはアルティメギル史上類を見ないほどに侵攻に苦慮している世界と聞いてはいたが、このようなおぞましき戦闘生物のはびこる魔界であったか!!」
　昂こう揚ようを笑みに顕あらわすワイバギルディ。最強部隊の戦士が、自身の戦いの場に相応ふさわしき舞台に今ついに降り立ったとでも言わんばかりに。
　ブルーは、襲い来る頭痛を耐えるように額を指で押さえる。

「あーやだやだ……何よノーパンって、来るとこまで来たわね……。神の一剣ゴー・デイア・ソードって、要は他のエレメリアンより高ランクの変態ってだけじゃない！」
　身も蓋ふたも無いが、俺もそう思う。
　俺やブルーが手をこまねく中、敵前に颯さつ爽そうと身を躍らせたのは━ブラックだった。
「ふはははははは、わらわはもう神の一剣ゴー・デイア・ソードなど怖くない！　ましてやノーパンなど恐るるに足らぬわ！」
　彼女の眼鏡めがねにはもう、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士への怯おびえは微み塵じんも見えない。イエローとの友情を通して最強軍への恐怖心を乗り越えたブラックは、一段と頼もしい戦士になったのだ。
「せやなぁ。ブラックちゃん、家ではすーぐぱんつ脱いで、その辺に放り投げるし……」
　イースナの保護者であるメガ・ネが、しみじみと語る。
　横目でワイバギルディを窺うかがうブラック。欠伸あくびでもしかねないほど無反応だ。
「む、貴様……わらわが家ではノーパンになる時もあるという個人情報をうっかり聞いておいて、まさかのノーリアクション。非穿属性ノーパンツとは名ばかりか!!」
　ワイバギルディは、その太い腕で忌いま忌いましげに空を薙なぎ払った。
「くだらん……くだらんくだらん！　家でパンツを脱ぐだと!?　ただの怠たい惰だではないか!!」
　予想外の正論。保護者のメガ・ネは責任を感じたのか、しゅんとしてしまう。君は何も悪くないんだ……！
「では、あなたはどんなものが正しいのーぱんだと仰おつしやいます

の!?」
　凛りりしく眉まゆを吊つり上げ、イエローがワイバギルディへと問い質ただす。
「イエロー、あんまり聞かない方がいいぞ……」
　俺の浅い知識で語るのもどうかと思うが、正しいノーパンというものはないと思う。
「ご主人様のためにも、ちゃんとのーぱんのことは勉強しておくべきだと思いますの！」
「何で俺のため!?」
　赤らめた頬ほおと緩んだ唇くちびるが答えだとばかりに俺を見つめてくるイエロー。
　ワイバギルディはエスカレーターを一いち瞥べつし、疑問を投げかけた。
「そもそも俺が何な故ぜ、このエスカレーターの下に立っていたかわかるか！」
「ノーパンの属性だから、ノーパンの人が現れるのを待ってたんでしょ!?」
　心底嫌そうに吐き捨てるブルー。
「あんた、妙なゲームとかのやり過ぎじゃないの!?　ノーパンの人なんて日常でそうそういるはずないでしょ！　死ぬまでそうして待ってるつもり!?」
「せいぜいパンチラが関の山じゃろう。もっとも、普通の女子ならエスカレーターではしっかりとスカートをガードするがな」
「ええ、下着を衆目に晒さらさないようにするのは女性の嗜たしなみですわ」
　女子の攻勢を聞きながら、俺は「お、おう」、と相づちを打つことしかできない。

　っていうか、イエロー……。いや、正論だろうけど、着衣の嗜みを彼女が説くのは……。
「愚ぐ昧まいな。パンチラなどという児じ戯ぎ、毛ほどもときめかぬわ!!」
　そんなものに興味はない、と、ワイバギルディは一層怒りを露あらわにする。
「風雅のわからぬ奴やつらよ。貴様たちは、非穿属性ノーパンツの何たるかを根本的に間違えている」
　そして、背後の長大なエスカレーターを再度眺め入った。まるで奴の目だけには、エスカレーターで昇っていく人の姿が今この時も映っているかのように。
「別に俺は、本当にノーパンの者がこのエスカレーターを昇ると期待したわけではない。長いエスカレーター、それはアングルにより生まれる無限の可能性を育はぐくむ聖域なのだ」
　日も沈みきらないうちからノーパン哲学を講釈し始めたワイバギルディ。そう言われれば、俺も主張せざるをえない。
「アングルで無限の可能性が生まれるのは、ツインテールも同じだ!!」
「フッ……。するとツインテールとノーパンは対等、五分と五分というわけだな」
　いや、誰だれもそんなことは言ってない……。
「とくと聞け、ノーパンの真実を！」
　ワイバギルディは唐突に体育座りをし、ここだ、ここに注目しろ、と自分の臀でん部ぶを指差す。
「しゃがんだ時に垣かい間ま見えるごく僅わずかな尻の丸み！　すでに見えていてもおかしくないはずの下着がそこにない！　その時誰もが胸ときめかせるのだ、『あれ、あの人はノーパンなのではないか？』と!!」

「……？　…………？？」
　説明されても、モデルを務めているワイバギルディが奴やつの想定するモデルケースから凄すさまじく乖かい離りしているために、いまいち想像ができない。
　俺たち四人は、肩を並べて疑問符を浮かべる。
「下着があろうとなかろうとノーパンはノーパンなのだ！　いやむしろ、虚こそが実を超えた希け有うな例とも言える!!」
　こいつの言わんとしていることを理解しているのか、基地からトゥアールが通信してきた。
『よーするにそいつは、「はいてない」が好きなんですよ。言葉どおりの事象ではない、概念としての無下着ですね』
　鼻で笑うようなトゥアールの説明だが、これでもまだピンと来ない。
「ふうむ、俺の身体からだを見本にしても、上う手まく伝わらぬか。仕方がない」
　ようやくわかってくれたか……と思ったのも束つかの間ま。ワイバギルディは豪快にダッシュして俺の斜め後方に回り込み、レッドのテイルギアの中でもっとも巨大な装甲部である腰に視線を向けてきた。
「わあっ！」
　思わず声を上げてしまう。
「このアングルだ！　腰の装甲でちょうど下着部分が隠れ、幼い健康的な太ふと股ももから尻へのラインだけがギリギリ見えるこの奇跡のアングル！　テイルレッド、君は今、ノーパンなのだ!!」
「また尻かよいい加減にしてくれよ!!」
　グリフォギルディ戦で散々尻を見られたばかりなのに、大してインターバルも挟まずにこれだ。いくら俺が男だからって、こう何度も尻に注目されるのは恥ずかしい……!!
　……なんて思ったらブルーにどやされるか、「いま女になっているこ

とを自覚しろ」って。
「好き勝手やってんじゃないわよ変態！」
　ブルーが物理的にどやしたのは、ワイバギルディの方だった。
　もはや蹴けるというより斬きるといわんばかりの鋭い蹴しゆう撃げきを、ワイバギルディの顔面へと放つ。
「蹴りならば俺も自信があるぞ！」
　カウンター気味に放たれたワイバギルディの回し蹴りが、ブルーの脚を直撃する。
「ッ……ぐ……！」
　脚部の装甲を砕かれ、ブルーはたまらずつんのめる。
　テイルギアを破損させるだけの戦闘力……。変質者だが、生来の戦闘力の高さは折り紙付き。やはり神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンは、全員が幹部級の力を備えている……!!
「見よ、ノーパンを見るための基本姿勢を！」
　ワイバギルディは中腰になると、その体勢のまま綺き麗れいに静止した。
「く、空気椅い子す……!!」
　体育会系思考のブルーは、敵ながら認めたようだ。その空気椅子の見事さを。
「はいていないという不確かさ！　それを求めるには、精神と肉体の錬磨が不可欠！　この体勢で鍛えられた我わが剛脚から放たれる蹴りに敵はないのだ!!」
　ワイバギルディはＬ字にした両手の親指と人差し指でフレームを作る。
「ふふふ、どんな格好がよいかな……？　俺は今この瞬間、レッドのノーパンを一番引き立たせる服装を描く、新進気鋭のイラストレーターなのだ……!!」



そしてその枠内の俺を、思うがままに着せ替えているようだった。
「全てのイラストレーターやアニメーターは、女子がいかにノーパンに見えるよう描くかに己の全力の九割を傾けるという……。他のあらゆる作業を残り僅わずか一割でまかなうほどにな」
数世紀ほど新進気鋭な主張で、世の創作者たちを事故に巻き込むワイバギルディ。
「それほどまでにノーパンの探究とは奥深いのだ！　下着に包まれていない柔肌を見たいだけの下劣な属性ではない!!」
握った両りよう拳こぶしを構え、ワイバギルディは轟ごう然ぜんと闘気を迸ほとばしらせる。
「むしろ……本物のノーパンよりも、ノーパンなのではないかという確信の一歩手前こそが醍だい醐ご味みと言える!!」
奴やつの発散する闘気が、電撃のように大気を震ふるわせる。
「目に見えるものばかりにときめいているうちは三流ぞ、戦士たちよ!!」
ワイバギルディは、獲物を狙う猛もう禽きん類のように鋭い視線を俺に投げかけてきた。
「――もっとも……お前は目に見えぬツインテールも愛めでるのであろうな。究極のツインテール、テイルレッドよ」
神の一剣ゴー・デイア・ソードは、究極のツインテールである俺を狙っている。しかも、過剰な期待をかけて。
「買い被かぶるなよ、俺は目に見えて触れるツインテールが一番いい」
「無いものを愛でる─それは心の力である属性力エレメーラだからこその本懐であろう」
「……！」
堂々とした発言に俺は息を呑のみ、心の内で応おう諾だくしてしまった。

もちろん俺だって、目に見えないツインテールを愛するのも否定しないし、しっかりと理解してもいるけどな。それこそが、俺の力の根源でもあるのだから。
「……いい目だ。やはり貴様には理解できるようだな。究極のツインテール属性の奪取……俄が然ぜんやる気が出てきたぞ」
俺目掛けて歩みを進めるワイバギルディ。俺はフォースリヴォンに触れて炎の剣・ブレイザーブレイドを引き抜く。臨戦態勢になった俺に、それでもなおブルーは注意を呼びかけた。
「もっと危機感持って、レッド！　こいつの能力が強制的にノーパンにするとかだったらどうすんの!?　あたしたち、素肌に一枚しか着てないのよ!?」
ブルーは両りよう掌しようを重ねて、腰のあたりを重点的に守るように構えた。
ワイバギルディは猛然と反論する。
「うぬぼれるなテイルブルー！　そんな無粋な能力など持っておらぬ！　何より、貴様の秘所など頼まれても見たくはないわ!!」
「秘所とか言うなあああああああああああああああああああああああああああああ!!」
いつものブルーなら敵が重度の変態だと認識した時点で速やかに撃破しようとするが、今日はやけに慎重に見えたのは……その能力の有無を警戒していたからだったのか。
「心配するな、危機感は持つさ。ブルーたちを絶対ノーパンにさせたりはしない！」
「べ、別にノーパンがダメってわけじゃなくてね、見られる人次第っていうか……」
何な故ぜか急にどぎまぎするブルー。イエローはブルーの肩にそっと手を置き、無言で微笑ほほえみかけた。駄目ですわ、なってませんわ、

と、その優雅な眼まな差ざしが語っている。
　加えて、トゥアールが通信で妙な激励をブルーへと送ってきた。
『愛あい香かさん！　恐れず戦い、ぶっ倒してください！　属性玉エレメーラオーブの効果はエレメリアン本人と乖かい離りしていることが多いです……つまり、そいつ自身が持っていない強制ノーパン能力が、逆に属性玉エレメーラオーブの発動効果である可能性は十分にあります！　それを総そう二じ様に使うんです!!』
「そんな邪よこしまな理由で戦わせるんじゃないわよ！　…………もちろんこいつは倒すし、手に入れたこいつの属性玉エレメーラオーブもちゃんと使って効果を確かめるけどね……」
　…………え……っと、俺に使う、っていうトゥアールの提案を否定してない気が……。
　たわけたことを、と冷笑するブラック。
「強制ノーパンにする必要などない、堂々と頼んでパンツをもらえばよいのだ！　のう？」
　ブラックに同意を求められ、イエローもしっかりと頷うなずく。
「ええ、何より〝脱ぐ〟という所作は自由の象徴。強制されてはいけないのですわ！」
　規律を守る生徒会長が、おおらかの極地を公言する。
　……………………あれ、俺がおかしいのか？
「とにかく……俺は女性の秘部が見たいわけではない。浅薄な理解力の蛮族どもにこれ以上語って聞かせるも徒労、レッド以外は早々に片付けてくれるわ!!」
「─貴様を、わらわがな」
　敵の熱弁の間に跳躍したブラックが、上空からダークネスグレイブで斬きりかかる。死角をついた鮮やかな一撃だった。
「───フン」

しかしワイバギルディは、頭頂に目がついているかのような完かん璧ぺきな見切りで、グレイブの一いつ閃せんを手てつ甲こうで受け止めた。驚きよう愕がくするブラック。

「何じゃと!?」

「死角こそノーパンの正中線！　常に死角を追究する俺に、死角からの攻撃など無意味よ!!」

グレイブの刃やいばを滑らせ受け止められた腕を力任せに跳ね上げ、その隙すきに離脱するブラック。

あらゆるアングルを追究する戦士・ワイバギルディ。意識外からの攻撃の察知もお手のものということか……！

そして広い視点アングルで戦場を俯ふ瞰かんした俺は、恐るべき事実に気づいた。

「あいつ、最初にいたあの場所からほとんど動いてないぞ……!!」

「そのとおり。俺はここでエスカレーターを見守り続ける。てこでも動かぬぞ」

厄介な宣言をするワイバギルディ。

こいつの実力なら、妄もう言げんではなくそれを実行できるだろう。

四人並んで戦闘態勢を取る俺たちから、ワイバギルディは無防備にも視線を切った。つられて奴やつの視線の先、エスカレーターの上方に目を向けると、何と人が下りて来るではないか。

「なっ……まだ避難していない人が……!?」

この強力なエレメリアンとの戦いに一般人が巻き込まれることを危き惧ぐした俺だが、程なくその闖ちん入にゅう者の正体は明らかとなった。

「私は世界をわたる復ふく讐しゅう者、仮面ツインテール!!」

仰ぎようゝぎようしく白衣をはためかせ、仮面ツインテールはエスカレーターの最後の数段を飛ばして飛び降りた。
エレメリアンに物申す、と決めた時、彼女はどうしても戦場にやって来てしまうのだ。
そして得意の説法で、ワイバギルディの信条に待ったをかける。
「フッ……精神性を重視する？　本物を見るより、下着があるかないか不確かな想像の方が素晴らしい？　ではあなたは、本当のノーパンを目撃したことがあるのですか？　比較すべき〝実物〟を!!」
「いやっ……それはその……！　ないけど……」
「……（ニヤリ）」
仮面の下の微笑を感じ取ったのだろう、ワイバギルディは己が名誉をかけて異を唱となえた。
「お、俺は神の一剣ゴー・デイア・ソードだし……！　精鋭だから出撃自体が少ないし……！　本当のノーパンを見たことがなくても、仕方ないし……!!」
しかしその抗議も、風船が萎しぼむように勢いを失っていく。自信がないのだろうか。
反対に、仮面ツインテールの言葉は熱を帯びていく。
「エレメリアンである以上、人間に不可触なのは仕方がないことです……が！　比較すべき実物を見たこともないのに語られる虚像への愛は、ノーリアリティ！　説得力皆無です!!」
「うぐっ……！」
白衣をマントのように翻ひるがえし、勢いよく指を突きつける仮面ツインテール。
「真のノーパンを見たこともなく語られるあなたのノーパンへの信念など━童貞がエロ漫画を描くような虚むなしい背伸びに過ぎないのです!!」

落雷の直撃を受けたかのように、ワイバギルディは全身を戦慄わななかせた。
「あ…………あ…………」
捲まくし立てるような説法は俺には意味不明だったが、ワイバギルディにはことのほか衝撃だったようだ。とうとう、崩れ落ちるように地面に膝ひざをついてしまった。
「……では皆さん。後はお任せします！」
言いたいことは言い終えた、とばかりにシュタッと右手を挙げて去っていく仮面ツインテール。
嗚あ呼あ──仮面ツインテール。君はどこからやって来て、どこへ帰っていくのか。

さすがに居たたまれず、俺は膝ひざ立ちで項うな垂だれているワイバギルディに近付いた。
「……俺は、別にお前が何の属性であろうと心から軽蔑したりはしない。ただ、人間に迷惑をかけるな。エスカレーターの下でずっと凝視している奴やつがいたら、安心して使えないだろう」
「レッド……！」
呆あきれて声をかけてくるブルーを、やんわりと視線で制止する。
「人間の下着を下ろしてノーパンにする……なんていう強硬手段に出ないで妄想を熱く語っているだけなら、まだ可か愛わいいもんじゃないか。少なくとも汚い作戦を仕掛けてきたグリフォギルディよりは、よほど救いがある」
誰だれに何と言われようと、何度徒労に終わろうと、可能性があるなら俺は説得を試みる。
ワイバギルディは頭を上げ、澄んだ瞳ひとみを俺に向けてきた。俺はそこに、一いち縷るの望みを見る。

　しかし——。
「ありがとうテイルレッド！　では君が、俺に本物のノーパンを見せ——」
　少年のような無邪気な声こわ音ねは、突風のように吹き荒すさんだ属性力エレメーラの奔流に遮さえぎられた。
「エターナルパッド……」
「アブソリュートリング……」
「メガ・ネ、インフィニットコンバインじゃ……」

　淡々と進化装備エヴォルブアームズを取り出すブルーとイエロー、そしてメガ・ネに合体を促うながすブラック。
　巨大な属性力エレメーラは、彼女たちが立ち昇らせているものだった。
　さしもの神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士も、一様に双そう眸ぼうを光らせるブルーたちを前にたじろいでしまう。
「えっ……えっ……ちょ、ちょっと待て、何だ貴様ら、その殺気は……！　俺はまだ何も!!」
　マジシャンがカードを捌さばくような素早さで、自身の胸元にエターナルパッドをスロットインするブルー。全身を包む眩まばゆい光の中で、装甲のシルエットが変化していく。
　攻撃的に研ぎ澄まされていく装甲に負けじと、光の中で瞳がさらに攻撃性を帯びた。
「こんな小さい女の子にノーパンを強要しようとしている時点で、あんたは抹殺確定なのよ。あたしたち全員の全力で擂すり潰してやるわ」
　俺は右に左にかぶりを振り、高まっていく仲間たちの殺気を目まの当たりにする。
　軽蔑を加積させるように、重武装を重ねていくイエロー。

　母なる慈愛の白銀装甲を身にまといながらも、怒気で眼鏡めがねのレンズを発光させるブラック。
　最強変身チエインエヴオルブした三人は俺の横を走り抜け、一斉にワイバギルディへと突とつ貫かんする。
　必死に両手を突き出し、静止を呼びかけるワイバギルディ。
「悪いのは貴様らの仲間の仮面女であろうが！　あそこまで挑発されて真のノーパンを見なければ、戦士としての沽こ券けんに関わるわ!!」
　いや、見た方が確実に沽券に関わる不祥事だと思うが……。
「あそこじゃと!?　卑ひ猥わいな野獣めが！　レッドのあそこはわらわが守る!!」
　………………仲間の頼もしさで貧血を起こしそうだ。
　一人通常形態で立ち尽くす俺を余よ所そに、ブラックたちの猛攻が幕を開ける。
「はああっ！」
　ダークネスグレイブメビウスを振るうブラック。切っ先が風圧で地面を抉えぐるほどの強烈な切り上げで、ワイバギルディの剛強な胸板から火花が散る。
「この……変態!!」
　吹き飛ばされたワイバギルディの着地点にはブルーが先回りし、ウェイブランスエクシードを猛然と突き上げる。痛烈な一刺を受け、ワイバギルディは再び空にかち上げられた。
「そこですわっ！」
　宙空のワイバギルディに、イエローがその背に誇る巨大な二門の陽電子砲の閃せん光こうを見舞う。
「ごああ……！」
　堪たまらず声を上げるワイバギルディ。
　一際高く宙を舞ったワイバギルディの落下点には、ブラックがその瞬

速を活いかして即座に先んじる。そこから先は技が変わるだけで、先ほどの連撃の焼き直しだ。
　そうして三人は、見事な連係プレーでワイバギルディを追いつめていった。
　サッカーで華麗なパスワークを駆使し、ボールを前線へと運ぶ様を連想させる。
　イエローはツインテールを撥ば条ねにして空高く飛び上がり、そのツインテールをさらに空中にアンカーロックとして固定。
　アブソリュートチェインの全武装を、ブルーに今一度跳ね上げられたワイバギルディへと照準した。
「絶対脱衣形態アブソリュートブラストモード────!!」
　遊園地の空を凶悪なまでに染め上げていく爆ばく閃せん。
　アングルへの追究で高めたワイバギルディの見切りの力も、見切る暇も与えぬほどの全方位無尽蔵爆撃の前では何ほどの意味も持ち得なかった。
　何とか回避しようとするも、次々と被弾していくワイバギルディ。
「……ぐ、あ……!!」
　錐きりもみしながら墜落しかける中で視界に飛び込んできたのは──全武装一斉発射のあと、その超武装甲を満まん遍べんなく脱衣パージしたイエローの勇姿だった。ぎょっとして空中で踏み堪こらえるワイバギルディ。
「いやお前、もうそれほぼノーパンであろう！　その出いで立ちでよくも俺の属性を見下したな変質者めが!!」
　ワイバギルディは、義ぎ憤ふんに駆られるかのようにイエローを糾きゆう弾だんする。
「わたくしのありのままを見せるのはご主人様だけ……乙女の一線はしっかりと秘しています！　断じてのーぱんではありませんわ！　ほぼ

を絶無ノーと妥協したあなたは今、信念を曲げたのです!!」
　しっかりと秘してるかなあ……。
「なっ……こ、この変質者……目が雄おゝおしい……！　そして信念が気け高だかい……！　自らの脱衣に微み塵じんの気後れも感じておらぬとは!!」
　俺の疑問を余よ所そに、イエローの気迫に気け圧おされるワイバギルディ。
「今ですわ、ブラック!!」
　イエローが信頼の籠こもった合図を送った眼下──つまり俺の目前では、ブラックが完全解放ブレイクレリーズしアーチェリーモードとなったダークネスグレイブメビウスの矢を、天へと番つがえていた。
「──それほど妄想力があれば、天そ空らにもノーパンを思い描けたはず。所しよ詮せん、貴様ら神の一剣ゴー・デイア・ソードは実力を笠に着た引きこもり！　幾多の実戦を映してきたわらわの眼鏡めがねの敵ではない!!」
　その瞳ひとみに宿した輝きは、一度神の一剣ゴー・デイア・ソードの脅威に絶望し、それを乗り越えたからこその強さ。
「インフィニットオオオオオオオオッ！　バニッシャーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　ブラックの放った矢が、ワイバギルディを貫く。
　その胸に∞の聖せい痕こんを刻まれながら、ワイバギルディは眼下のブラックへ笑いかけた。
「くっ……はははは、いいアングルだぞ、ブラック……。ここからでは、貴様の下着は見えぬ……ノーパンだ！　見上げるだけではない、こうして見下ろす空こそ、最高のノーパンスポットだったか!!」
　皮肉にも、最期に新たなるアングルを開拓し。
　天そ空ら恐れし剛龍、ワイバギルディは壮大に爆散した──。

　ブルーはしばらく空の爆炎を眺めていたが、
「あーもう！　また属性玉エレメーラオーブが出なかった……!!」
　晴れていく煙の中に何も無いとわかると、軽い落胆で肩を落とす。
　相手が神の一剣ゴー・デイア・ソードになってからというもの、一度として属性玉エレメーラオーブが出現しない。やはり奴やつらは、他のエレメリアンとは根本的に違うのだろうか。
　やたらアングルにこだわるところとか、うなじ好きのクラブギルディみたいな一般兵と何も変わらないように思えるんだけどな……。
「□□□□□□？」
　思ったそばからうなじに視線を感じ、俺はおもむろに後ろを振り返った。
　……誰もいない……気のせいか。視線に敏感になってるのかな。
　今日は俺、ほぼ見ているだけだったな──と軽く自省していると、着地したイエローが子犬のように走り寄ってきた。
　しかし……アブソリュートチェインの絶対脱衣形態アブソリユートブラストモードで武装を脱衣パージしたイエローはほんと……丸裸に近くて、直視できない。早く最強変身チエインエヴオルブを解いてくれないだろうか……。
「ご、ご主人様……無事で何よりですわ、はあはあ」
　その状態でさらに身体からだを密着させてくるイエロー。
「近い近い！」
「仕方のないことなのですわ……」
　ブルーが慌あわてて俺とイエローを引き離そうと試みる。
「くっつきすぎよイエロー!!」
　しかし、メガ・ネと分離したブラックが牽けん制せいするようにイエローの前に割って入った。

「ふん、イエローに手出しはさせんぞ貧乳！」
　そのままイエローを引っ張ると、スマホを取り出して目の前で構えた。
「勝利の仲良し自撮りじゃ～」
「うふふっ」
　ブラックに合わせてようやく通常形態に戻ったイエローが、控え目にピースをする。
「……やれやれ、すっかり仲良しね……」
　その微笑ほほえましさにすっかり毒気を抜かれたのか、ブルーは苦笑して二人から離れた。
『……総そう二じ様、イースナなんて放っておいて基地に帰って来てください！　お疲れでしょう、お風呂わかしてマット用意してバスタオル巻いて待ってますから!!』
　トゥアールの言葉の中に、どこか苛いら立だちがあるような……。
　俺は、イエローとはしゃいでいるブラックに視線を送る。
　今まで自分に懐なついていた妹分のイースナが、ここ最近は慧え理り那なにべったりになって、寂しいんだろうか……？
　イエローと自撮りしているブラックを見て、メガ・ネが感極まったように手を組んだ。
「イースナちゃんが積極的にお友達と写メしとる……ウチ、夢でも見とるんやろか……」
「うう、メガ・ネ……」
　俺もつられてほろりとしてしまう。イースナのあんな光景が見られて、心がすっげー温かいよ……。

　撤収準備を始める中、俺は空を見上げながら呟つぶやいた。
「……色んな属性を見てきたけど……〝無いこと〟を好む属性もあるん

だな……」
　俺の感傷を察したのか、ブルーが肩を叩たたいてくる。
「何でもかんでも理解してやる必要はないのよ。属性力エレメーラなんてのは個人の嗜し好こうなんだから、中にはどうやったって理解できないものも出てくるわよ」
『そうですよ総そう二じ様。無いのが好きなら、貧乳属性スモールバストとかも似たようなもんですし』
　帰ったらあんたをノーライフにするわ、とトゥアールに宣戦布告するブルーを余よ所そに、俺は思いを巡らせる。
　非穿属性ノーパンツと貧乳属性スモールバストは、無いものを好むにしてもまたベクトルが違うように思える。
　本来あるべき物が、完かん璧ぺきに無いという状態をこそ好む、非穿属性ノーパンツ──。
　ツインテールならどうだ。
　ワイバギルディは、目に見えないツインテールも愛せるだろう、と問いかけてきたが……ノーパンならぬノーツインテールとは、そんな貴とうとい心の在り方とは別のものだと思う。
　ツインテールではない状こ態と……どころか、ツインテールがないことを好む、なんていう属性があるとしたら。
　それはポニーテール属性や三つ編み属性トライブライドなど、他の髪型とは違う。
　もっと恐ろしい、根源的な〝無〟なのではないだろうか。
　俺は自分のツインテールに触れ、その確かな感触を確かめる。

　そして、ある決意を胸に懐いだくのだった。

◇

「──頑張れば、ツインテール触れるんじゃないか？」

午前六時。唐突に目を覚ました俺は、微睡まどろみも先置いてそんな思考を浮かべた。
ツインテールを触りたいと思うこと自体は毎日だけど、もう少し踏み込んだ願望だ。
早い話、努力次第で〝俺の〟ツインテールに触れることもできるのではないか──と。
夢で見た何かに触発されたわけでもなく、起きて一番最初にそんな大いなる可能性を夢想したのだ。
知ってのとおり、男の俺でも、テイルレッドに変身している時は最高のツインテールをたなびかせ、自分の手で自分のツインテールを触れることが思いのままだ。
が、ここで一つの疑問が残る。
自分の手で触る、とは言うが……果たして俺は本当に、俺自身の手で俺のツインテールを触っているのだろうか、と。
もちろん変身しようが、その時に目にしたもの、覚えたもの、触ったもの、全ての記憶は引き継がれる。それは、俺の心が全てを覚えているからだと思う。
しかし、だ。
変身すると、俺は幼い子供になる。そのテイルレッドの小さな手で触る俺のツインテールと、観み束つか総そう二じたる俺の手で俺のツインテールを触るのとでは、感触が違うのではないだろうか。
それは突き詰めると、やはり俺自身が俺のツインテールを触っているということにはならないと思うのだ。
俺は、男の状態、この俺の手で、テイルレッドのツインテールを触っ

てみたい。
　無理だ、仕方のないことだ、と完結させず、もっと頑張れば……。
　そんなふとした疑念が起きがけに膨ふくれ上がり、いても立ってもいられなくなった。
　無への探求──これこそ、昨日ワイバギルディとの戦いの終局で懐いだいた決意だ。
「……よし」
　意を決してベッドから起き上がり、自室を見渡す。
　窓のカーテン、部屋のドア、机の横の犬小屋、クローゼット。
　それぞれ愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナがやって来る──か、もしくはすでに中にいることの多いこれらの出現ポイントを確認するのが、朝目覚めてすぐの習慣だ。
　俺にとって早朝でも、彼女たちはこの時間から全員揃そろっているのも珍しくない。
　特に愛香は、朝から俺が変なことを考えていないかとか奇行に走っていないかなどと、大おお袈げ裟さな心配をして監視しに来ることが多いので、全く油断ができない。
　幸い、今朝の俺は特に変なことは考えていないが……。
　とにかく、誰だれの姿もないのだ。気兼ねなく特訓ができる。
　俺は右手首にテイルブレスを可視化させ、手慣れた動作で胸の前で構えた。
「テイルオン」
　変身機構起動略語スタートアツプワードを小さく紡つむぐと、俺の身体からだが赤い粒子に包まれていく。
　テイルレッドに変身完了すると、俺は触り慣れた自分のツインテールを息を吸うような気軽さで撫なでた。
「……ッ……？」

今……ツインテールを触った瞬間、全身がゾクッとしたような。寒気とか虫の知らせとかではなく、何か純粋に、蠱こ惑わく的な感覚が全身を走ったというか。……気のせいだよな。

万歳の状態から肘ひじで屈伸を繰り返し、熟こなれた頃に両りよう掌しようを肩の高さで構えた。

「──ツインテール！」

気合い一いつ閃せん、ツインテール目掛けて両手を突き出しながら……同時に、変身解除!!

しかし俺の手は……虚むなしく空を切った。

その後何度も、変身→変身解除と同時にツインテールを掴つかむ、を繰り返す。

「……駄目か。遅すぎる……」

一応これは、俺なりに根拠を見み出いだしてやっている特訓なんだ。

変身することでツインテールになる俺は、その状態でツインテールを一定時間解ほどいたままでいると、強制的に変身解除されてしまう。

だがそれは裏を返せば、変身の起点であるツインテールは、変身を解除する時に一番最後まで残っているという証しよう左さでもある。

変身を解除するその瞬間──テイルギアの装着は〇・〇一秒という一瞬で完了するらしいが──その刹せつ那なは、俺がテイルレッドと観み束つか総そう二じの肉体の中間にあるに違いない。

その瞬間をものにすれば、観束総二おれの腕でレッドのツインテールを掴つかむのは可能なはず。

もっとも、限りなく不可能に漸ぜん近きんした可能だ。

自ら時間を圧縮し、その凝縮された時の狭はざ間までツインテールという存在を手にする。

文字通り、雲を掴むような話だな……。

「ふう……」

テイルレッドに変身し直し、あらためて目標であるツインテールを鏡に映す。
　よし、これから毎朝、この特訓を続けていこう。努力が積もればツインテールとなるさ。
　遠く、しかし心地ここちのよい展望に身を引き締め、振り返ると──

「そーじ……」

　目を見開き、口を小さく開けた愛あい香かが、部屋の中心に立っていた。
「おああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　イースナのお株を奪うようなホラー映画じみた恐怖登場に、思わず声を上げる俺。今朝の愛香はすでに制服に着替えているが、それが余計に凛りんとした恐怖を際立たせる。
　愛香は弾かれたように俺に飛び寄ってきた。
　レッドの小さな両肩を鷲わし掴づかみにし、自分自身の肩は小刻みにぷるぷると震ふるわせ──
「……そーじ……そーじそーじ」
　見開いた目で、俺を糾きゅう弾だんするように凝視してきた。
「ど、どうした……？」
「そーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじ」
「のののののおおおおお……」
　そのまま激しく俺の肩を揺さぶる愛香。体幹が固定された俺の身体からだにあって、赤いツインテールだけが華麗に揺れ散った。
「ッそーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
じーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」

「うおぉあはいぃ⁉」
　愛香のあまりの剣幕に気け圧おされ、何も悪いことをしていないのに思わず条件反射で謝ってしまいそうだった。
「何やってんの？　何やってんの⁉　何やってんのっ⁉⁉⁉」
　この突然のモーニングパニックは一体⁉
　まさか、俺が変身していることを咎とがめているのか？　今さら⁉
「落ち着け愛あい香か！　俺が早起きして変身してツインテールを眺めるなんて、今までしょっちゅうしてきたことじゃないか⁉」
「眺めるだけじゃないし！　むしろ、何やってたのかわかんないのが余計アウトなの！　最近朝に変なことばっかりやってるから気合い入れて見張りに来たら、案の定これよ‼」
「待て、これには理由わけが――」
　俺は懸命に、俺が夢描くビジョンを愛香に説明した。
　ドキュメンタリー番組になりそうな壮大な演説ができたと思ったが、俺の語ご彙いが足りなかったのだろうか、愛香は白目になってしまった。
「自分で、ツインテールを触る⁉　どーすればそんな考えが思い浮かぶのよ！　そんな練習してたらいつか、テイルレッドの状態で腕だけそーじのまま……とか、とんでもないビジュアルになりかねないわよ⁉」
「さすがにそれは困るな」
　愛香は、なおも語気を強める。
「そーじ、ツインテール依存を見直してベストな距離感を模索するんじゃなかったの⁉　全然適切じゃない、悪化しまくってるじゃない！　何か、ツインテールとツーカーになってるっていうか……昔と距離感が違う‼」
　鋭い。確かに俺は、アルティメットチェインに到達して以来、今まで以上にツインテールと通じ合っている。心をさらに通わせたと言えるだ

ろう。
　だが、果たしてそれに何の問題があるというのだろう……⁉
「大丈夫だって、ベストな距離感を模索した上でこうしているんだから」
「～～～～～～～……」
　愛香は怒り、悲しみ、呆あきれ、諦あきらめ、と百面相を繰り出す。
　そして何かを決意したように頷うなずくと、俺をひょいっと抱かかえ上げた。
　お姫様抱っこの格好だ。
「寝なさい」
「えっ」
「あたしがここにいて、時間になったら起こすから……寝て。疲れてるのよ……そーじ」
　真剣な愛香の眼まな差ざしを前に、俺は素直に厚意を受け取ることにした。
　二度寝というか、もう仮眠の域だが……テイルレッドの姿だと、装甲がごつくて眠れない。
　変身解除しようとしたその時、計ったようなタイミングで入り口のドアが勢いよく開く。
「ああああああああああ愛香さんうおらぁああああああああああああああああああああああ‼」
　やって来たのは、珍しく凄すごい剣幕で怒っている制服姿のトゥアールだった。
「何だあ⁉」
　ベッドの横で俺を見下ろしていた愛あい香かに、白衣を翻ひるがえして猛然と飛びかかるトゥアール。
「レッドたんを押し倒すなんて、なんてうらやま…………許しがたい蛮

行です!!」
「押し倒っ……!?　違うわよ！　そーじが疲れてるみたいだから、休ませようと思って……」
「これまで散々私が小ちっちゃい子を愛めでることを咎とがめてきた愛香さんが、よもや私の隙すきを突いてレッドたんを押し倒すとは……うおおおおおおおおおお!!」
　しどろもどろな愛香を突き飛ばすと、トゥアールらしからぬ雄お々おしい咆ほう哮こうと共に跳躍。
　ベッドに寝ている俺へと覆おおい被かぶさってきた。
「ぷわっ……！」
　トゥアールの豊満な胸に、テイルレッドの俺の小さな頭が丸々包まれる。衣服越しなのに、互いの肌と肌がぴったりと吸い付くような柔らかな感触。
　それだけではなく、トゥアールは俺の後頭部に腕を回し、全身を密着させ抱擁する。
「まったくもう私のおっぱいにすっぽり収まりますねえレッドたんは！　蛮族の蛮行からは、この私が守ります!!」
　あたかも降り注ぐ瓦が礫れきから我わが子を守る母のように、身体からだ全てを使って俺を守らんとする。
　ちなみにこの場合降り注ぐ瓦礫……災厄とは──
「その蛮行に蛮行を天丼するあんたは何なのよ離れろーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　愛香が猛烈な勢いでトゥアールの頭を引っ掴つかみ、力尽くで引き剥はがしにかかる。
「私はレッドたんを守るためにやむを得ず押し倒しているだけ！　愛香さんが押し倒すのは犯罪です！」
　愛香との戦いの日々が、プロレスラー以上の背はい筋きん力を体得さ

せたのか。トゥアールは、愛香の腕力に上半身が逸それた状態で耐えていた。
　俺は依然としてトゥアールの胸で視界を覆われている。
「あたしだって、そーじのためを思ってしたのよ!!」
「テイルブルーの世の評価を鑑かんがみてください！　犯罪とは時に世論で被加の立場が逆転するのです！　愛香さんイズクライム、愛香さんイズバイオレンスですのぎゃああああああああ!!」
　パワーイズオンリージャスティス。
　法も世論も超越して炸裂する愛香の信念が、一市民の部屋を処刑場に変える。
「あんたの仮面ツインテールだって一般人には変態白衣って思われてるでしょうが！　目撃回数が少ない上でその認識なんだから、テイルブルーよりもっとタチ悪いわよ!!」
　ムキになる愛香。トゥアールの背骨がブリッジに耐えられず悲鳴を上げ始める。
「ぐおおおおおおおお！　総そう二じ様を愛香さんから守るためなら、背骨の一本や二本痛めつけられようと私は屈しません!!」
　俺の勉強不足でなければ、背骨が複数ある脊せき椎つい動物は存在しないはずだが……。
　とにかく、レフェリーなき戦いでは部外者の俺が二人の戦いをストップしなくては、戦いは泥沼の一途を辿たどるだろう。じゃれ合いだとはわかっていても、背骨はまずい。
　俺はテイルレッドから変身解除し、ベッドの上で男の姿に戻る。トゥアールは愛あい香かとの争いに夢中で、すぐには気づかない。
　自分の身体からだに押しつけられるトゥアールの胸の感触を努めて意識しないようにしつつ、俺はのし掛かっているトゥアールと、引き剥はがそうとする愛香──二人の腕を、優しく掴つかんだ。

「え？」

「ほ？」

　短い驚声を上げる愛香とトゥアール。

　ベッドから起き上がり、体勢を反転。

「俺は大丈夫だから……な？　二人とも落ち着いて」

　俺は、二人をできるだけそっとベッドへと投げた。

　ぽふっ、と軽い音が響いて体勢が入れ替わり、ベッドに身体を横たえた二人を俺が見下ろす形になる。

　こうもしょっちゅう朝から気を揉ませるのは、愛香にもトゥアールにも悪いからな。

　一度俺がツインテール属性を失った時の醜しゅう態たいを見せている以上、愛香の過保護が加速してしまったのも無理からぬことだ。俺はもう大丈夫だと、行動で示していくしかないだろうな。



　ふう、と一息ついて二人を見ると──
「……」
「……」
　何な故ぜか、瞳ひとみを潤うるませて俺の方を見つめていた。
　しかも、二人とも心なしか頬ほおが赤らんでいるような。
「……？　えっと……」
「……」
「……」
　二人はすっかり脱力し、全身をベッドに預けてしまっていた。すぐさま起き上がってまた戯たわむれ合いを再開するかと思っていた俺は、意表を突かれてしまう。
「いい光景ね……自分のベッドに美少女二人転がして、さあ、今日はどっちからにしよっかなっていう、全国の男の子憧れの光景！　総そうちゃんも新たな〝領域〟へと突入したのね……!!」
　声にぎょっとしてドアの方を見ると、母さんが腕組みをしながら不敵に笑っていた。相変わらず、忍者のような隠密性を発揮して接近してくる。
　こうなると、集結の連鎖が始まるのだ。
「…………………………………ず、るい……」
　立て付けが悪くないはずのクローゼットが何故か軋きしんで開き、中からジャージ姿のイースナが現れる。眼鏡めがね越しに眼をぎょろっと剝むきながら、四つん這ばいでこちらへ迫ってきた。
　イースナは震ふるえる手でスマホを俺に突き出し、追及してくる。
「ゆ、昨夜ゆうべ……メールの返信が来なかった……ずっと待ってたのに……」
　だって、メールのアイコンに新着数１００＋って表示されるんだぞ。

＋が内包する無限大の可能性が怖くて、俺も気が遠くなってしまうよ。
「……い、いいもん……慧え理り那なに、送るから……」
　軽く頬を膨ふくらませ、俺に見せつけるようにスマホを操作し始めるイースナ。
　おお、慧理那ともメールでやりとりをしているのか。
　先日、慧理那とイースナは大喧嘩バトルをした。そのおかげで、今やこうして極度の人見知りなイースナからメールを送るほどに友情が深まったのだから、何とも微笑ほほえましい。
　慧理那のことを思ったせいか、俺の意識がセンサーのように外へと放たれる。
　──やはり。
　家の外に、ツインテールの気配が二つ。リムジンに乗って迫ってくるのを感じる。
　慧理那と桜さくら川がわ先生だ。あっという間にここにやって来るだろう。
　どう収拾をつけたものか。
「…………」
「…………」
　ところで、俺のベッドの上の愛あい香かとトゥアールが、さっきから一言も喋しやべらないのが怖い。

◇

　総そう二じたちの世界に進行しているアルティメギル部隊の基地。
　その基地の中心に位置する大ホールは、むくつけき冒険者集う酒場のように、これまで多くの勇者を迎え、語り合わせ、そして戦地へと送り出してきた。

怒ど号ごうにも似た討論と豪笑の絶えない、活気溢あふれる場所だった。
だがその大ホールは今や──火が消えたようにしんみりとして久しい。
いや、しんみりどころではない。
「テイルレッ！（くしゃみ）」
「ティ～～～～ルレッ……（あくび）」
「テェーイル……レーッド……（寝息）」
……だらけていた。
見上げるほどの巨きよ躯くを誇る怪人たちが、ニートもかくやというほどに弛ゆるみきっている。
やる気がゼロどころか、もはやマイナス軸に突入していた。
『インフィニットオオオオオオオオオッ！　バニッシャーーーーーーーーーーーーーーーッ!!』
壮大に爆散するエレメリアンが、大ホールのモニターに映される。
こうして神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士ワイバギルディとツインテイルズの戦いの録画映像を見終えても、リアクションが皆無だ。
「まあその……以上が先日の、神の一剣ゴー・デイア・ソードワイバギルディ殿の戦いだ……」
参謀スパロウギルディが諦あきらめ気味に締めると、だらけた反応だけがホールに木こ霊だました。
「はあ」
「ほお」
「テェーイル……レーッド……（寝息）」
うら悲しげな嘆息を重ねるスパロウギルディ。
録画映像を見ている理由は、この士気の無さから窺うかがい知れるだろう。同士の戦いをリアルタイムで刮かつ目もくするほどの興味は消え失せてしまっていた。

もう自分たちにとって、ツインテイルズの戦いは遠い世界の出来事なのだ、と。

──組織に完全なる戦力外通告をされた、用済みの自分たちにとって。

彼らがそれほど自暴自棄になり、心折れてしまった原因は、神の一剣ゴー・デイア・ソードにある。

死の二菱ダー・イノ・ランヴアス隊長ティラノギルディが撃破され、最後の四し頂ちよう軍ぐん・神の一剣ゴー・デイア・ソードは首領護衛が至上任務。ゆえに、この部隊への増援はありえないと目されていた。

ならば残ったこの面々。力及ばぬまでもツインテイルズに挑み、華々しく散ろうと奮起していたまではよかった。

ところが──グリフォギルディと名乗る戦士が突とつ如じよとして人間世界に出撃し、ツインテイルズと死闘を繰り広げたのだ。

いや、どうも大々的にツインテイルズとぶつかる前からこの世界に来ていたようなのだが、彼らはこの時初めて、神の一剣ゴー・デイア・ソードがこの世界に向かってきていることを知る始末だった。

それから今まで、数週間……。

昨日また、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンが、ツインテイルズとの戦いに敗れ去った。

「皆、すまぬ……アルティメギル最強の軍団、神の一剣ゴー・デイア・ソードが我われらの加勢にこの世界へとやって来るはずはない……という私の見解、誤りであった」

スパロウギルディは、この状況を招いたのは自身の見解の甘さだと、責任を感じていた。

「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は、こうして続々とこの世界にやって来ている。ただし……単独行動でな」　それを聞き、ホールの席に座っていたエレメリアンの一体が、自じ嘲ちよう気味に呟つぶやいた。

「つまり我らは、この世界にいてもいなくても同じ……。いよいよアルティメギルに見放されたというわけですな……」

　一様に押し黙る面々。
　神の一剣ゴー・デイア・ソードに自分たちを率いてくれとまでは望まない。せめてこの母艦基地へとやってきて、如い何か様ようにも謗そしり言をぶつけてほしかった。
　未いまだ侵略を果たせぬ役立たず部隊として粛正されるならば、それも仕方のないことだ。
　しかしこの多くのエレメリアンたちは、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士──引いてはアルティメギルにとっては、目に映す価値もない存在として無視されてしまった。
　この仕打ちが烈はげしき誅ちゆう伐ばつよりも痛烈に、彼らを苛さいなみ……そして最後には、心を折ってしまったのだ。
「モケー……」
「モケ……」
　ホールの隅では、大勢の戦闘員アルテイロイドが体育座りをしていた。
　神の一剣ゴー・デイア・ソードは戦闘員アルテイロイドの帯同を必要としないことが多いらしく、彼らはより深刻なお役御免となっていた。神の一剣ゴー・デイア・ソードの出撃に気づいて、隠し撮りをするように戦闘映像を記録する一、二体が戦場に向かうのが関の山だった。

「はーいはいはい！　暗い暗い！」
　そんな濁り、よどんだ巨漢たちの瘴しよう気き……男エアーを清浄したのは、弾けんばかりにエネルギッシュな女性の声だった。

声と手の打つ音のするホールの入り口に目を向ける戦士たち。
そこにいたのは、科学班から出向してきた女性エレメリアン・マーメイドギルディだった。
白衣をまとうかのようなその麗うるわしき容貌には、知性の輝きが迸ほとばしっている。
「マ、マーメイドギルディ……ちゃん……」
着席していた戦士の一体が、後ろめたそうにそう呼ぶ。
マーメイドギルディはこの残存部隊の戦士たちに気恥ずかしい〝ちゃん〟付け呼びを半強制しており、彼らはようやく慣れてきたところだ。
「なに？　神の一剣ゴー・デイア・ソードが勝手に出撃してるから、いじけちゃったの？」
マーメイドギルディは、戦士たちの怠たい惰だぶりにやや呆あきれ顔だ。
「あいつらねー、協調性がぜんっぜんない、スタンドプレー大好きな奴やつらなのよ。あなたたちのせいじゃないわ」
仮にも四し頂ちよう軍ぐんの最頂点たる軍に対して、この放言。不敬が過ぎるのではと慌あわてふためく戦士たちに構わず、マーメイドギルディは続ける。
「今までやって来た神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士だって、結局誰だれもツインテイルズに勝てていないのよ？　彼らがいばれる要素なんてないし、あなたたちが卑ひ屈くつになる必要もないの‼」
ぴしゃりと言い放つマーメイドギルディ。
「……しかし……彼らが我われらの力など露つゆほども必要としていないのは事実……。もはやツインテイルズとの戦いに介入するなということなのでしょう……。弱い我らは……」
「──だから、強くなりましょうよ！」
女め々めしい嘆きを遮さえぎり、マーメイドギルディは発奮を促うな

がす。
「心を燃やして進化するのは、何もツインテイルズの専売特許じゃない。むしろ精神生命体である私たちエレメリアンこそが先駆者であるはずなのよ？」
　いつしかマーメイドギルディは中央の登壇台の前に立っており、今まで名だたる部隊長たちがそうしてきたように、戦士たちに語りかけた。
「むしろ神の一剣ゴー・デイア・ソードなんて何ほどのもんだ、ってぐらい気合い入れて頑張れば、あっさり彼らの強さを上回ることだってできるかもしれない。……いえ、そうあってくれなければ、科学班わたしたちも技術の追究のし甲が斐いがないわ。みんな……頑張って！」
「マ、マーメイドギルディちゃん……」
　めいめいに嗚咽おえつを漏もらす戦士たち。こんな情けない落らく伍ご者たちを、ここまで気にかけてくれるとは。
「す、すみませぬ……我らが間違っておりました……!!」
　戦士たちの頬ほおを流れゆく、熱き涙。
　彼らの身体からだの震ふるえが、ホールの空気すらも律動させるかのようだ。
　それを拭ぬぐえるのは、テイルレッドハンカチ以外にあるまい。
　慟どう哭こくする戦士たちを満足げに眺めながら、マーメイドギルディは予かねてより提唱していたパワーアップ方法をあらためて勧める。
「さあ、合体を！　同僚たちとの合体をイメージするのよ!!」
　このかけ算さえなければいい人なのにな、と、屈強な怪人たちは肩を落とした。
「……まあ、それとは別に色々考えてるから、頑張ってね！」
　戦士たちの敬礼を受け、ホールを後にするマーメイドギルディ。
　廊下を歩く彼女の背に、現金なことに早くも活気づき始めたホールの

喧けん騒そうが届く。
「うふふ、やさぐれ君たちに檄げきを飛ばすなんて……私ってばユグちゃんの熱血教師が伝う染つったみたいっ」
　友人である貴の三葉ノー・ブル・クラブ隊長・ユグドラシルギルディを彷ほう彿ふつとさせる自身の行動を省かえりみる。
　何がそれほどに面白いのか、マーメイドギルディは踊るようにして廊下を滑り歩く。
　その足がピタリと止まった時。不気味な静寂が廊下を支配した。

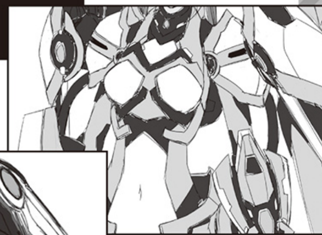
「……ねえ、そう思うでしょ？」

　まるで名を出した当人に同意を求めるかのように、虚空に放たれる言葉。
　マーメイドギルディは、無人の廊下で妖あやしく微笑した。

テイルギア設定補足 05







テイルギア・防御機能

TAILGEAR-PROTECTION

戦闘服であるテイルギアは、身体強化や武器による攻撃力もさることながら、防御機能も極めて優秀である。強固な装甲部以外のアンダースーツもフォトンヴェイルと呼ばれる硬くしなやかな軟性金属で構成されており、さらに装着者の全身をフォトンアブソーバーと呼ばれる光膜が取り巻くことで完璧な防護を実現している。直接的な衝撃への防御はこの光膜が占める部分が大きく、装着者の身体を離れたテイルイエローの装甲——合身巨大砲が著しく硬度が落ちてしまうのはこのためでもある。そして心の力で起動・稼働する空想装甲であるテイルギアは、それが長所とも短所ともなっており、精神状態が出力に大きく影響する。そのためトゥアールは精神への攻撃に対する防御も重視して設計しており、催眠や刷り込みといった方法でテイルギア装着者を攻撃するのは、よほど強大な属性力を誇るエレメリアンでも不可能である。



テイルレッドが最初に苦戦を強いられた相手・フォクスギルディが精神攻撃を得意としていたように、エレメリアンもまた異世界のツインテールの戦士との戦闘手段に精神攻撃が有効であることは熟知している。テイルギアの防護のみならず、装着者の強靭な精神力こそがそれらを打ち破るためには必要不可欠なのだ。テイルレッドはその可愛さゆえか、頻繁にエレメリアンの幻覚攻撃の標的となる。

第二章　ツインテール・チェンジャー。

　今朝方、俺がじゃれ合いを諫いさめようとベッドに軽く投げ倒した途端、やけに大人しくなってしまった愛あい香かとトゥアール。登校中も、二人の様子はまだおかしかった。
　愛香はスキップするように早足になってみたり、かと思うと立ち止まって含み笑いを浮かべたり。妙にふわふわしているというか、挙動不審というか。
　それとは逆に、トゥアールは徹底してアルカイックスマイルのままだ。その徳のありそうな微笑ほほえみが家を出てから一瞬も崩れていないので、顔がん層そう筋きんの固着が懸念される。
　桜さくら川がわ先生、そしてお付きのメイドさんを大勢伴って少し後ろを歩いている慧え理り那なは、動と静で対称的な二人を見て、興味深そうにしている。
「観み束つか、ちょっと二人を落ち着かせてやれ。特に津つ辺べは、何度か電柱に手刀を放っているぞ」
　桜川先生に促うながされ、俺は愛香に駆け寄った。愛香は牧歌的な雰囲気をまとって軽く踊っているだけだが、その手足がぶつかっただけで電柱が被害を受け始めているからな。
「なあ愛香、何かいいことでもあったのか？」
　俺が問いかけると、愛香は足を止め、軽やかに一回転。
　ツインテールで宙に円まどかを描き、屈託のない笑みを浮かべた。
「さっき、そーじがあたしを押し倒……投げ飛ばしたでしょ？」
「あ、ああ……」

　真まっ直すぐに向けられる愛香の瞳ひとみは、どこか陶然として見えた。
「や、やっぱりそーじが本気になったら……あたしなんか、どんなに抵抗しても敵かなわないんだなあって思って……ふふ」
　負けず嫌いの愛香にしては、やけに嬉うれしそうに敗北宣言する。
　……………………まさか、打ち所が……。できるだけそっと投げたつもりだったが……。
「あたしとトゥアールが何しても傍観してる、今までの方がおかしかったのよ。これからもあたしが騒がしいって思ったら、遠慮なく押し倒……技かけていいからね!!」
　愛香は拳こぶしを軽く空に突き上げ、攻撃してこいと嬉き々きとして請う。
　本当にどうしてしまったというんだ。
（！　そうか……俺は、なんて迂う闊かつなことを……！）
　愛香とトゥアールの喧けん嘩かは、不可侵の聖なる争い。俺が不意打ちで諌めたことが、愛香の武術家としてのプライドを傷付けたに違いない。
　愛香はこうして笑顔になることでしか、戦士としての矜きよう恃じを支えられないんだ……！
　俺は悔恨を言葉に託し、愛あい香かに詫わび入った。
「俺が悪かった！　もう、二人の争いに割って入ったりはしない……!!」
「…………はあ!?　何言ってんのよ、これからもどんどんしなさいよ!!」
　ツインテールを逆立たせんばかりの勢いで俺に詰め寄ってくる。
　……すると、愛香とトゥアールが挙動不審な原因は別にあるのか……？

「えっと、ね……そうよ、そーじに投げ飛ばされて、いい特訓になるって思ったの。あたし、トゥアールとばっかりポカポカやってて、ちょっとなまってるって感じたのよ」
　これまで繰り広げてきた死闘を表すには擬音がチャーミングすぎるが……なるほど。
「でも今の俺じゃ、もう愛香の組み手の相手なんてできないと思うぞ？」
　トゥアールとのじゃれ合いで切せつ磋さ琢たく磨まし、技を磨き続けてきた今の愛香に、俺では練習相手は務まらないと思うのだ。
　愛香は、少しむっとしたように言い返した。
「そんなことない！　そーじは強いよ！　自信を持って!!」
　素足で電柱を蹴けり折る幼馴染おさななじみに強さを期待されるということは、同等の攻撃力を我わが身に備えていなければいけないのだが……。
「じゃあ……交換条件にしない？　そーじが朝やってるツインテールの特訓に何も言わないし……何だったらあたしも手伝うわ。その代わり、そーじもあたしの特訓に付き合って」
「それは頼もしい。何たって、消えたツインテールを手に掴つかむような難題だからな……」
「だから、さっきみたいにあたしを投げ飛ばして欲しいの。…………ベッドに」
　愛香はツインテールの毛先を指で巻き取りながら、そう提案する。
　ツインテールの毛先の回転に合わせ、俺の眼球も回転する。
「あ、もちろん技をかけるのはあたしにだけよ。トゥアールは怪け我がしちゃうもんね」
　愛香がそこまで言ったところで、トゥアールがついに微笑ほほえみと決別した。

「人が今朝のエロメモリーを反はん芻すうして下腹部をきゅんきゅんさせてる傍そばでどこまで増長してくんですかこのぶりっ子蛮族はあああああああああああああああああああああああああ!!」
「菩ぼ薩さつみたいな顔して通学路で発情してんじゃないわよこの痴ち女じよ!!」
「完全弾性衝突でそっくりお返ししますよその言葉!!」
　まさしく完全弾性衝突を実現できるであろう、その豊満な胸を愛香に突き出すトゥアール。
　蝶ちようが本能で蜜に引かれるように、愛香もまた本能で巨乳を攻撃してしまうのだ。
「今朝の思い出は永久保存版です！　隣の愛香さんだけ消してトゥアールちゃんだけベッドに寝てる記憶に改かい竄ざんしておきます!!」
「あたしもそうしてやるわよ！　あんたこそ白い格好して消しやすそうだし！」
「直線胴体の愛香さんと違って起伏に富んでいる私はトリミングに手間取りますー！」
「この世からトリミングされたいのあんた!?」
　なんて恐ろしい恫どう喝かつなんだ……。
　呆あつ気けに取られている俺に気づいてか、愛あい香かはトゥアールを引っ掴つかんで電柱の陰に移動、ひそひそ話を始めた。
「高校生になっても全然進展しないまま、冬になるけど……やっと、やっとそーじの方から押し倒してくれるとこまで来たのよ!?　これは歴史的事件よ!?」
「その事件が愛香さんとセットでなければもっとよかったんですけどねえ……！」
「協力しなさいよ……あたしとあんたが喧けん嘩かすれば、そーじが押し倒してくるんだから……。あんたにもメリットあるでしょ？」

「さらっと一人占めしようとしたくせによく言いますね!!」
「とにかくこれは喧嘩なんだから、あんたもどんどんあたしを攻撃してきなさい！　それをそーじが止めて、それで……まあ、今朝みたいに……」
「嫌ですよ！　愛香さんにパンチとかしたら逆にトゥアールちゃんの拳こぶしの方がグロ画像になります!!」
「あたしがあんたをグロ画像にするか、あんたが自らグロ画像になるかよ！　グロ画像は自分の手で勝ち取りなさい!!」
「いやあああああああエロイベントに喜んでゴリラがめっちゃ昂たかぶってるううううううう!!」
　密談が終わったのか、唐突にじゃれ合う二人。喧嘩でありながら、達人同士の演舞を思わせるしなやかな肉弾戦だ。
　うん、やっぱり俺ごときじゃ愛香の特訓の役には立てそうもないな……。
「…………ってあれ、慧え理り那ながいないぞ？」
　振り返ると、慧理那の姿がない。ツインテールの気配の確認を怠おこたったか……。
　かなり後方に視線を移すと、慧理那は歩道の端で立ち止まり、トゥアルフォンの画面を見ていた。桜さくら川がわ先生やお付きのメイドさんたちが傍そばで見守っている。
「……！」
　メイドさんたちが俺に気づき、手を振ってきた。俺も手を振り返しながら慧理那に近付く。
「慧理那、どうしたんだ？」
「あ、すみません……お待たせして。イースナさんからメールがたくさん届きましたので、一通だけでも返しておこうかと」
　友達からメールの返信を急かされても歩きスマホをしない。当たり前

のことではあるが、さすがの振る舞いだ。
「観み束つか君はこんなにたくさんのメールに返信しているのですわよね？　すごいですわ！」
「いや、俺だってイースナの望む分はとても返しきれてないよ。でも、慧理那だったら心を込めた一通で十分喜んでくれると思うぞ？」
「はい！　わたくしメールには不慣れですが、心はしっかり込めますわ！」
　健けな気げにメールを作成する慧え理り那なをしばらく見ていると、妙に粘度の高い視線に取り囲まれていることに気づいた。
　お付きのメイドさんたちが、目を血走らせて俺と慧理那を見ている。そ、そこまで厳重に主人を監視するものなのか、メイドさんって……⁉
「お嬢様可か愛わいい……」
「観み束つかきゅん、お二人でそうしてるととーっても絵になってるよっ」
　きゅん……？　まあ、メイドさんたちとも顔見知りになって長いし、フランクにしてくれるのはいいことだ。
　そのメイドさんで一番付き合いの長い桜さくら川がわ先生は、穏やかに慧理那を見守っていた。
　愛あい香かとトゥアールもやってきたが……何な故ぜか互いに肩を震ふるわせている。
「うう、会長……」
「私たちが醜い女の争いをしている傍そばで、慧理那さんは清らかな友情を育はぐくんでいる……何ですかこれ、何ですか⁉」
　健気に友達にメールを送り返そうとする慧理那と、朝からブラッドフェスティバルに勤いそしむ自分たち二人。その構図を俯ふ瞰かんし、落差に耐えられなかったのだろう……。
「……もっと殴なぐってください愛香さん、私を……！　自分の浅まし

さに耐えられません!!」
「それを言うならあたしよ！　あたしを殴りなさいよ、トゥアール!!」
「「ああああああああああああああああ……!!」」
　まるで慧理那の放つ聖なる気に中あてられたかのように、愛香とトゥアールは揃そろって慟どう哭こくし、へなへなと地面に崩れ落ちた。

　　◇

　マーメイドギルディの檄げきを契機に、怠たい惰だな日々を脱したアルティメギル残存部隊。
　この日、マーメイドギルディによる戦闘力強化案の発表が執り行われることとなった。
　基地内の大ホールには、登壇台の前に立つマーメイドギルディの姿が。
　スクリーンに映るのは誇張されたキャッチコピーなどを用いない資料で、彼女の説明も実に端的。科学者らしい簡明なプレゼンテーションだ。
　それはいいのだが、ページがスライドする合間合間に妙な絵が見える。
　耽たん美びな雰囲気で見つめ合うスパロウギルディと他の戦士など、残存兵たちのよりどりみどりの組み合わせが、まるでアイキャッチのように差し込まれているのだ。
　恩人の趣味に異を唱となえるわけにもいかず、戦士たちは磨き鍛えたスルー力りよくでやり過ごす。
　一通り説明を聞き終わると、スパロウギルディが皆を代表し強化案について確認する。
「……複数の属性を身に宿す、ですか」

「エレメリアン同士で合体するよりもハードルは低いでしょう？」
　首が据わらなくなったかのように何度も激しく首しゆ肯こうする一同。
「ティラノギルディ君だって、ツインテール属性を取り込んでから飛躍的に強くなったでしょう？　そもそもほとんどのエレメリアンはツインテールへの愛を持っているんだから、生まれた時からある意味複数属性みたいなものだし」
　元よりフォクスギルディなど、自身の核たる属性以外にも僅わずかに別の属性を宿すエレメリアンもいたが、それを意図的に行うという。
　マーメイドギルディは予かねてより、複数のエレメリアン同士の合体による強化案を提示してきた。しかし多くの戦士が煮え切らなかったため、今回は理屈は同じでもよりイージーな案を挙げたのだ。
　スパロウギルディは気がかりな点を質問した。
「複数属性というのは、きっかけをマーメイドギルディ……ちゃんが作り、己おのが力で新たな属性を芽生えさせる……という解釈でよいかな？」
「ええ。さすがに私にも一から属性力エレメーラを作り出すことはできないから、そこはみんなに頑張ってもらうことになるわ」
　それならば、と納得するスパロウギルディ。
　それはそうだろう。人工的に属性力エレメーラを生成できるのなら苦労はしない。
　どれだけ科学を究めようともそれが絶対にできなかったからこそ、アルティメギルは長い間人間世界を侵略してきたのだ。
「実はこの強化案、すでに一人志願して実行してくれた子がいるの。カメ君~」
　マーメイドギルディは、ホールの入り口を向いて呼びかける。
「はっ!!」

　気勢よき返事とともにホールに入ってきたのは、一体のエレメリアンだった。
　黒がかった緑の体表はイボのように隆起しており、菱ひし形がたの頭部のほぼ両りよう側そく面めんに巨大な目。長い尻しつ尾ぽは、渦巻き状に丸まっている。
　ホール内の戦士たちが総立ちで迎えた彼は、この混成部隊の中でも古参に数えられる戦士、カメレオギルディだ。
「調子はどう？　カメ君」
「すこぶる良好ですぞ、マーメイドギルディちゃん！　あとその愛称ですと、今は亡きタトルギルディと勘違いされる可能性が!!」
「残念……じゃあ、カメレオギルディ君」
　マーメイドギルディのフレンドリーな言葉にも、気後れせずに返せている。
　愛称の付け方にダークグラスパーを思い出し、戦士たちは雰囲気を和なごませた。
　登壇台まで歩いてきたカメレオギルディを見て、スパロウギルディが不安げに尋ねた。
「だ、大丈夫か？　カメレオギルディ……目が少し血走っているようだが……」
「ふふふ、目がぎょろついているのは生まれつきでございます、スパロウギルディ殿！」
　考え過ぎなのだろうか。元々それほど体格のよい戦士ではなかったが、強化を受けたにしてはむしろ少しやつれて見える。
「上り調子で油断しているでしょうからね。ツインテイルズは、カメレオギルディ君の術中にまんまと嵌はまるはずよ」
　マーメイドギルディの激励を受け、カメレオギルディは深く首しゆ肯こうする。

「皆、俺の戦いをとくと見てくれ！　この戦い、我われらの新たなる門出としてみせよう!!」
　同胞たちの喝かつ采さいを受けながら、意い気き揚ようようと出撃するカメレオギルディ。その背中に、悪意を伴った妖よう艶えんな視線がへばりつく。
　マーメイドギルディの浮かべた微笑は、実験の成功に満足する狂科学者のそれだった。

　　◇

　変身解除の瞬間にツインテールを掴つかむ。
　この数日、毎朝だけでなく就寝前にも特訓を続けたが……ツインテールどころか、微かすかな手て応ごたえさえも掴めない。
　簡単なことではないと、理解しているつもりだが……先は長いな。
　今日の放課後も、ツインテール部部室で椅い子すに背を預けながら、俺は自分の手の平を見つめていた。何か、前進するきっかけが必要なんだろうか。
　愛あい香かにトゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生と俺との五人でしばらくのんびりとしていたが、やがて唐突に転送ロッカーが開く。
「生放送終わりじゃーっ！　こんにちイースナ!!」
　アイドル衣装のイースナ……善いい沙すな闇あん子こだ。その後ろからは、鮫さめの着ぐるみのゆるキャラ・メガネドン。
　イースナの明るい挨あい拶さつに、トゥアールが食ってかかる。
「あっイースナ！　それ私の素敵挨拶集の一つ、『こんばんトゥアール』の真ま似ねじゃないですか!!」
　どこかで聞いた挨拶だと思ったが、オリジナルはトゥアールだった

か……。
「ふふん、夜か昼かで言えばやはり昼の方が爽やかじゃ。ゆえにわらわの方が強い!!」
　謎なぞ理論でトゥアールの抗議を防ぎきるイースナ。
「もうすぐニューシングルのレコーディングが終わる、そうしたらわらわも少し時間が取れるはずじゃ。またどこかに行くか？」
「あなた短期間によく出しますねえ、歌……」
「善いい沙すな闇あん子こは人気じゃからのう！」
　トゥアールとのやりとりの間に慧え理り那なの席まで歩くと、イースナはハイタッチを求めて元気よく右手を挙げた。
「慧理那ー、イエーイ、なのじゃっ」
「いえーいですわっ」
　手の挙げ具合こそ淑しとやかで控え目なものの、慧理那も嬉うれしそうにハイタッチを受ける。
　じゃれ合う二人を見て、トゥアールは頬ほおをひくつかせた。座ったまま腕組みをし、苛いら立だつように指で二の腕を叩たたいている。
「おーおー、すっかり慧理那さんと仲良しちゅっちゅですね、イースナ」
「……ふむ？」
　不思議そうに振り返ったイースナから視線を逸そらし、トゥアールはさらに投げやりな口調になる。
「最初は私が好きだとか言っておいて、その次はテイルレッド。舌の根も乾かないうちに総そう二じ様の彼女宣言をして、今度は慧理那さんですからねえ。あなたのビッチぶりもいよいよ極まりましたね！」
　やっぱりトゥアールは、妹分のイースナが最近つれなくて寂しいようだ。
　自作の挨あい拶さつを真ま似ねしたり、今でもちゃんとトゥアールに

懐なついていると思うんだけどなあ。



　椅い子すに腰を下ろしたイースナが、さして気にした風もなく言い返した。
「何を言う、総そう二じがわらわの彼氏なのは変わらん。慧え理り那なとは親友マブダチになっただけじゃ」
　慧理那はお姉さんぽく人差し指を立て、朗ほがらかに諭す。
「イースナさん、観み束つか君はわたくしのお婿むこさんですのよ」
「そうか！　では総二は、わらわの彼氏で慧理那の婿じゃ！」
「うふふ」
　うふふで済ませていいのか、この複雑な人間関係。
　だが、トゥアールとは別に複雑そうな顔をしているのが、愛あい香かだ。
「ってか、あたしだけがイースナの遍歴にいないじゃない!?」
　イースナは身体からだを両手で掻かき抱き、怯おびえるように椅子ごと後あと退ずさった。
「何じゃ貧乳、貴様わらわに愛されたいと申すか!?　怖っ、トゥアールの彼女の座で我慢しておけ!!」
「誰だれがトゥアールの彼女よ！　別にあんたの彼女になるとも言ってない！　ただ何かこう、一人だけ仲間外れだとモヤモヤするじゃない!!」
　愛香は単純にイースナと仲良くなりたいと思っているだけなのだ。それはとてもいいことなのだが──ブラックとイエローがそうしたように、大喧げん嘩かの末の友情を望んでいる。
　焦じれた愛香が強引に喧嘩をふっかけないか、今後も慎重に見守る必要がある。

　どちらがお茶を淹いれるかじゃんけんをしている桜さくら川がわ先生とメガ・ネを見ながら、イースナは椅子の前脚を浮かせて聞いてきた。

「ところで今日は何の会議じゃ？　何も話題がないなら遊ぶぞ、総二！」
「ああ、それは構わないけど……」
　俺が言い終わる前に、慌あわてて立ち上がるトゥアール。
「議題ならありますよ！　え、えーと……神の一剣ゴー・デイア・ソードのことについて!!」
　イースナに場の主導権を取られまいと、トゥアールは慌ててホワイトボードを長机の前まで引っ張ってきた。
「……あのー、そう！　神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンを倒しても属性玉エレメーラオーブが出現しないこと……その理由をそろそろ真剣に探った方がいいと思うんです!!」
　見切り発車で提示した話題が上う手まく着地した、という雰囲気を感じるが……。
　トゥアールはホワイトボードを液晶スクリーン機能に切り替える。これまでに倒した五体の神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンの映像が並んで映し出され、それぞれの隣には未回収を表す黒塗りの属性玉エレメーラオーブが表示されていた。
「ん、何だ。結局ツインテイルズの話になったのか」
　メガ・ネとのじゃんけんに勝ったらしい桜川先生が、お茶を運んできてくれた。
　相変わらず俺には婚こん姻いん届とどけもおまけでついてくる。
　そして桜さくら川がわ先生は、議題にあがっている属性玉エレメーラオーブについて思い出したようだ。
「属性玉エレメーラオーブ……ああ、使うと動きが速くなったりするあれか。特に津つ辺べは、あれをよく使って戦うんだろう？　新しい物が手に入らないのは死活問題じゃないのか？」
「問題ないですよ。属性玉エレメーラオーブが使えないなら使えない

で、徹底的にブン殴なぐるだけですから！」
　しれっと答える愛あい香か。
　……何で属性玉エレメーラオーブ使えないならその次の手段が拳こぶしなんだ、お前にはウェイブランスという立派な武器があるじゃないか……。
　慧え理り那なはツインテールを揺らして可か愛わいらしく考え込む。
「もしかして、ある程度の強さを持ったエレメリアンは、消滅する際に属性玉エレメーラオーブも消えてしまうような特性があるのでしょうか？」
　その仮説に、トゥアールは首を振った。
「確かに神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンは、おそらくは尖せん兵ぺいクラスであろう現在の段階でさえ、恐るべき戦闘力を誇っています。ですが、これまでの各部隊の隊長副隊長級のエレメリアンにさえ勝るかといえば、そうでもありません」
「確かにそうですわね……」
「ですから、戦闘力がある領域を超えれば属性玉エレメーラオーブが出現しなくなるという説は成り立ちませんね。考えられる理由としては……」
　トゥアールはボードに向き直り、神妙に呟つぶやいた。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士だけが、ツインテイルズに属性玉エレメーラオーブを利用されることを恐れ、敗北時に属性玉エレメーラオーブが自壊するようあらかじめ仕込まれている……とか」
　納得できないのか、愛香が首を捻ひねる。
「でも、あたしたちって最初の頃から堂々と属性玉エレメーラオーブ使ってたじゃない。エレメリアンが自分たちの力を利用されることを警戒するのは、ちょっと遅すぎるんじゃない？」
「少なくとも、わらわが美の四心ビー・テイフル・ハートとともに着任

した頃でさえ、属性玉変換機構エレメリーションを脅威に感じてなどいなかった。なおのこと、神の一剣ゴー・デイア・ソードほどエリート意識の高い連中が部隊ぐるみで警戒を共有するとも思えんのじゃがな……」

アルティメギルに属していた時のことを思い出しながら言うイースナ。

その後もある程度の意見は出し合ったが……まだ判断材料が足りないと結論づけ、会議は終了した。

イースナは神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で持ち上げ、アイドル衣装からジャージ姿に早着替えする。そして、俺の膝ひざの上にちょこんと乗っかってきた。

「か、会議は、おしまい……。そ、総そう二じさん、慧理那、遊ぼ……」

イースナは、話し合いをする時は弁の立つ善いい沙すな闇あん子この姿でいることが多いが、こうして遊ぶと決めると素すの自分に戻る。

愛あい香かに抱かかえ上げられて自分の席に座り直させられるイースナに、俺は一つ提案をした。

「なあイースナ。俺のことも慧え理り那なみたく総そう二じ、って呼び捨てでいいぞ」

「そ、総二さんは、カレシだから、総二さん……」

イースナが俺の膝ひざの上に乗ったあたりでまた眉まゆを顰ひそめていたトゥアールが、聞き捨てならないと反論した。

「待ちなさいイースナ、その理屈だと私ともただならぬ仲みたいじゃないですか、呼び捨ての方がマシですよ！」

「ト、トゥアールさんは、昔の女のよしみで、トゥアールさん……」

愛香がジト目で自分を指差す。

「……あたしは？」

「貧乳さん」
「だからあたしが一番ぞんざいじゃないのよーーーーっ!!」
　桜さくら川がわ先生とメガ・ネが保護者同士、微笑ほほえましい話をしている。
「おかげ様で……ウチのイースナちゃん、みんなとどんどん仲良うなって……」
「いや、それを言うならお嬢様もだな……」
　……などと言われているそばから、愛香はイースナにねちねちと絡んでいく。
「イースナ。いい加減あたしとも仲良くしようよ、ね？」
　案の定、イースナは警戒を強めて、愛香から距離を取った。
「ひ、貧乳さんの『仲良くして』、は……極道の人が、肩を組んできて、『まあ、仲良くしようや』……って言ってるような、感じ……。……怖い……含みがある……」
「含みなんてないでしょ！　あたしほど──」
「性に」
「オープンな女はいないわよ!!」
　捲まくし立てる愛香の言葉の間かん隙げきを縫ぬってトゥアールがぼそりと何かを呟つぶやいたような気がするが、よく聞き取れなかった。
　何はともあれ、今日も和わ気き藹あい々あいとした放課後だ。
　そう安心している時に限って──

　トゥアールのおっぱい
　　　トゥアールのおっぱい
　　　　　トゥアールのおっぱい

　部室に、エレメリアン出現アラートが響くのだった。

「……エレメリアンか……」
　俺は軽く溜ため息いきをつき、気持ちを切り替えた。
　トゥアールが端末で素早く情報を確認する。
「はい……神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンでしょうね」
　敵影を捉えず、反応の強弱しかキャッチできていない段階で神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンだと断言しているのは、もはやその他の残存軍には幹部級の強者がいないのが確実となったからだ。
「よし、出撃しよう。――――テイルオン!!」
　部室に赤、青、黄、黒の光が重ね咲く。
　幾度と見た仲間の色を目に、頷うなずき合う俺たち。
　トゥアールと桜さくら川がわ先生に見送られ、ツインテイルズは出撃した。

◇

　滞とどこおりなく出現地点に到着し、俺とブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネは状況を確認する。場所は、大きめの多目的ホールだ。
　そのエントランスから、大勢の人たちが避難してくる。マントを羽織っていたり、着ぐるみに包まれていたり、奇抜な格好をした人ばかりだ。
「……みんな……コスプレ、してるのか？」
「そのようですわ。ツインテイルズの〝こすぷれ〟をされている方もたくさんいらっしゃいます。……テイルレッドだけですが……」
　ややしょんぼりしているイエロー。確かに、コミケでもかなりお目にかかったテイルレッド姿のコスプレイヤーが大勢いた。
　他にも、カラフルなウィッグのコスプレイヤーがひしめき合っている。

『明日から始まる大きめのコスプレイベントの準備日のようですね……広場は十分な大きさですが、戦闘規模の拡大に注意してください』
　トゥアールも、基地で会場の情報を把は握あくしたようだ。
「み、みんな……俺たちから目一杯離れてね……？」
　俺が声をかけると、エントランスから出てきた人たちは訓練されたような動きで広場の隅に整列していった。
　戦闘中は十分離れてくれと一度きつく言ってから、ギャラリーも安全圏を模索してしっかりと距離を取ってくれることが多くなった。
　できれば見物せず完全に避難して欲しいんだが……。

　遅れてエントランスから出てきたのは、ひょろっとした体格のエレメリアンだった。
「こいつは……神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンか？」
　まず間違いないとは思うが、このカメレオンじみた風貌のエレメリアンからは、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士特有の神こう々ごうしさを感じられない。やつれているようにさえ見える。
「モケー」
「モケケケ」
　それに付き従うように出現する、数十体の戦闘員アルテイロイド。
　まるで久しぶりの出撃に歓喜しているように、跳んだり跳ねたりとテンションが高い。
　エレメリアンは大きな目を輝かせ、俺のツインテールを賞賛しながら近寄ってきた。
「テイルレッド……ああ、赤毛だ……素晴らしい赤毛のツインテールだ！　念願叶かなってこうして間近で見ることができた……!!」
　黙っていればエレメリアンは俺のツインテールに触れるぐらい肉薄してきそうだったからか、ブルーが前に進み出た。

　足を止め、疲れきった印象と真逆に元気よく名乗りを上げるカメレオギルディ。
「私の名はカメレオギルディ……その赤毛への讃美からわかろうが、赤髪属性レツドヘアーを主に持つ戦士だ、よろしく頼むぞ!!」
　含みのある言い回しが気がかりだが、それよりもこいつは印象どおりカメレオンのようだ。神話の生物や幻獣の活性体シルエットではない、ということは──。
『おや、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンではないみたいですね』
　トゥアールも同じことを考えていたらしく安あん堵どしたように通信し、ブラックも同意した。
「大方、組織に居場所を失った侵攻部隊の残存兵が自棄になって出撃してきたのじゃろう」
　だけど、気になるな。
　まさにカメレオンのように、側頭部に大きく陣取る愛あい嬌きようのある目だが……そこに自棄の諦てい観かんは微み塵じんも感じない。
　むしろ、必勝の気迫さえ感じる。
「ううむ、この世界で赤毛を求めて幾いく許ばくか彷徨さまよい歩いてはみたが……深刻な赤毛不足!!」
　悲観を分かち合うように吐と露ろしてくるカメレオギルディ。
「ようやく訪れたこの地でさえ、目に映る全ての赤髪が、人工物！　それも赤毛が好きでウィッグをかぶっている者は一人もおらぬ、単にテイルレッドを模倣したいだけとは……!!」
「そりゃ俺は属性力エレメーラのおかげで真紅のツインテールになってるけど、完全な真まっ赤かっかの地毛なんてこの世界にはいないぞ……」
　夏休みに行ったロエルたちの異世界はカラフルな髪の色の人も多くい

たので、他の世界では珍しいことでもないとは思うが。
「まあよい。目の前に極上の赤毛少女がいるのだ、他に目移りする必要もあるまい!!」
「みんな、武器出さなくていいわよ。このぐらいならあたし一人で大丈夫」
　さすがのブルーも一般兵相手には気を抜いているようだ。
　ブルーの視線から逃れるように、カメレオギルディは俺に向き直る。
「せっかく直じかに会えたのだ……そ、その……一つ、私の長年の疑問に答えてはくれぬか」
「何だよ」
　そしてえへえへと不気味な笑いを浮かべ、意を決したように質問してきた。
「………………赤毛の女の子は……やはり全てが赤毛なのか……？」
「え、全て？」
　俺が質問の意味を考え倦あぐねていると、ワイバギルディ戦のデジャブのように蒼あおい旋風が横を吹き抜けていった。
「しッ——!!」
　人間でいう顔面急所の人中に、ブルーの拳こぶしが突き刺さる。横についた目を回しながら、カメレオギルディは地面に叩たたきつけられた。
「げぶう!!」
「——ごめん、神の一剣ゴー・デイア・ソードが特別じゃなかった。やっぱりあんたら全部変態だわ」
「同じ部隊でもないくせに、似たような無礼者が続くのう！」
　倒れたカメレオギルディに、ブルーとブラックが目を逆三角にしてストンピングを始める。
　イエローは他の二人のように足あし蹴げにこそしないが、腹に向かっ

て無言でヴォルティックブラスターを斉射していた。腹パンならぬ腹バンだ。
「ぐわあああああああああああああああああああ、近年希まれに見る多勢に無勢！　どこの赤毛とは限定しておらんぞおおおおおおおおお!!」
『レッドたんのお毛毛は今見えている部分で全部です！　……と、カメレオギルディに引いん導どうを渡しておやりなさい、愛あい香かさん!!』
　トゥアールの通信が何を指しているのかはわからないが、ブルーは言葉ではなく直接引導を渡そうとしている。
　嫌な予感がして振り返ると、ギャラリーがブルーたちの凶行に元気よくドン引きしていた。
　しかもさっきの質問が原因なのか、カメレオギルディにもドン引きしているような……？
　これはいけないと、俺は努めて笑顔でツインテールを掻かき上げてみせる。
　俺のツインテールよ、人々の恐怖を中和してくれ……!!
「別に私はいやらしい気持ちで言っているのではない！　毛だ、毛の色にしか興味がない！　他はどうでもいい！　あらゆる赤毛をこの目に焼き付けたいだけなのだ!!」
「目を焼いて欲しいのね。レッドみたく上う手まくできるかわかんないけど、消し炭にしてやるわ」
　身の毛もよだつ宣言をするブルーに、カメレオギルディは何とか反撃を試みる。
「くうっ……かああぁっ!!」
　カメレオギルディが開いた口から、てらてらと光る長い舌が飛び出す。
　牽けん制せいされるように眼前を飛旋され、ブルーは怖おぞ気け立っ

た。
「ひいっ!?」
　久々の、ブルーの苦手とする触手じみた攻撃だ。その隙すきにカメレオギルディは離脱し、体勢を立て直す。
「や、やはり、全力を出すしかないか……」
　カメレオギルディは胸の前で腕を交差させ、属性力エレメーラを紫し電でんとして周囲に弾け散らしていく。
「我わが魂たましいの、赤髪属性レツドヘアー！　そして──」
　俺を凝視するカメレオギルディの背から、湯気のように赤いオーラが立ち昇る。
「貴様たちに勝つためにこの身に宿した、新たなる輝きを見よ!!」
「何!?」
「──青髪属性ブルーヘアー……」
　カメレオギルディは俺から視線を切ると、今度は今まで避けていたブルーをあえて注視する。それに合わせて、背中のオーラは赤から青へと変わっていった。
「金髪属性ゴールドヘアー……！」
　さらにイエローへ。やはりオーラが黄色に転じる。
「黒髪属性ブラツクヘアーッ!!」
　最後にはブラックへの視線と連動し、オーラは黒く染まる。
　さすがに様子がおかしいと思い始めた時、トゥアールが焦りながら通信をしてきた。
『……変です、皆さん気をつけて！　今のカメレオギルディからは、まさにその四つの属性がほぼ同出力で探知されています!!』
「四つの属性だって!?」
　じゃああいつが最初に、「主に赤髪属性レツドヘアー」って言ってたのは間違いじゃない……ヒドラギルディと同じ、複合属性だったのか！

　警戒を強めた時には、もう遅かった。
　カメレオギルディの丸まった尻しつ尾ぽはピンと伸びきり、頭頂から背中、尻尾の先━全身から満まん遍べんなく立ち昇るオーラはいつしか、赤青黄黒の四色がひしめき合うように渦巻いていた。
「くまなく浴びよツインテイルズ！　我が奥義、四人四色ミツシングカラー━━━!!」
　そのオーラが、俺たちに向けて放たれる。
　回避してギャラリーに被害が出ないか!?　一瞬の判断が命運を分け、俺たちは全員モロに光を浴びてしまった。
　目を灼やく四色の波光の眩しさに、堪たまらず腕で目を覆おおう。
　程なく閃せん光こうが止やんだ時、俺は仲間と、そして一般人の安否を確認した。
　かなり広範囲に光線が照射されたので、肝を冷やしたが……一般人のギャラリーは距離を取ってくれていたので、大丈夫だったようだ。
「みんな、大丈夫か!?」
　目視での確認に先んじて、後ろの仲間に声をかける。直撃を受けたが特にダメージは感じない。念のため、もう少しカメレオギルディから距離を取ることにする。
「□□□□□□!?」
　跳躍で風になびき、眼前に舞った自分のツインテール。
　それを目にした時、驚きよう愕がくのあまり一瞬時が止まったように感じた。

「俺のツインテールが……青い……!?」

　本能的にツインテールの変様にいち早く気づいたが、変わってしまったのはツインテールだけではなかった。焦りのままに両腕を眼前にかざ

し、そして胸に腰にと視線を急がせる。
　まとった装甲が……テイルギアまでもが、青く変色してしまった!!
「お、おお、効いた……効いたぞ！　私の必殺技が……ツインテイルズに一いつ矢し報むくいた!!」
　息を荒らげながらも、戦果に満足するカメレオギルディ。
「どうなってるんだ、俺のツインテールと、テイルギアが青くなってる……!!」
『総そう二じ様！　レッドだけじゃありません、見てください……!!』
　トゥアールが泡を食って通信してくる。
　焦しよう燥そうに駆られて振り返った時……悪夢が自分だけでなく、仲間の身にも降りかかっていることに気づいた。
「何よ、これ……」
「わたくしの、ツインテールが……」
「違う色になってしまっておる!!」
　ブルーが、イエローが、ブラックが、口々に動揺を漏もらしていく。
　いや、今やそのコードネームで呼んでいいものか——。
　幾度となく見合った仲間の色が——不変のはずの俺たちの魂色いろが、完かん膚ぷ無きまでに変異してしまっていた。
　俺が……テイルレッドが、全身青に。
　テイルブルーは眩まばゆいばかりの黄色に。
　テイルイエローは艶あでやかなまでの黒に。
　テイルブラックは燃え立つ赤に——!!
「落ち着けみんな、この手の攻撃には俺は慣れっこだ……どうせ、趣味丸出しの幻覚攻撃か何かに決まってる!!」
　何の自慢にもならないが、俺は今まで他メンバーよりも突出して敵の妙な攻撃の被害に遭ってきた。
　その中にはやたらとコスプレさせられまくった時もあったが、結局本

当にテイルギアを強制解除して着替えさせるような力はエレメリアンにはない。
　今回のこれも、単なる幻覚だろう。トゥアールも同意した。
『そのとおりです、色が変わって新鮮な印象になる以外に何の効果もないはずです!!』
「心を強く持つんだ！　こいつを倒せば元に戻る、いくぞみんな!!」
　だがこの戦闘経験からくる思い込みこそ、最大の誤算だったのだ。
「果たして強く持てるかな、心を……」
　またも含むような言い回しが気になり、カメレオギルディを凝視した瞬間。
「ッ……ぐ……!?」
　頭が痛む。
　半紙に墨汁を垂らすように、心に落ちた一滴の黒がじわじわと染み広がっていく──。
「何だ、これは……!!」
　頭を手で押さえて痛みに耐えながら、仲間の様子を確認する。
　ブルーたちも同じように、膝ひざをつき、何かに耐えるように震ふるえていた。
　やばい……こいつ一般兵だけど、普通じゃない……!!
「……みんな、早く逃げて！　この戦いは危険だ!!」



　俺が離れたギャラリーに避難を促うながしても、その場を動こうとする者はいない。
　興味本位と言うより、みんな急に青くなってしまった俺を見て戸惑っているようだ……。
「くそ……何だ、俺の裡うちから湧き上がるこの強大な破壊衝動は……⁉　う、ぐ、エレメリアンを見ていると、無性に殴なぐりたい……‼」
　だがこの結果に心当たりがあるのか、カメレオギルディは俺に指を突きつけた。
「テイルブルーの人格が移ったのだ、当然そうなろう……‼」
「何だと⁉　カメレオギルディ……！　一体、俺たちに何をした……‼」
　カメレオギルディは、こともなげに種明かしをした。
「髪の色とともに、貴様らツインテイルズの人格を交換したのだ！　見ろ、他のツインテイルズたちも別の人格が現れ始めるぞ‼」
『嘘うそです、ありえません！　テイルギアは心で操る特性上、精神への攻撃には最大の防御リソースを割り振っています！　幻覚を見るぐらいならまだしも、人格を丸々交換するなんて‼』
　通信越しに聞こえるトゥアールの狼ろう狽ばいは、相当なものだ。
　そのとおりだ、まして部隊長クラスの強敵ならともかく──
（ッ……この先入観にしてやられたってのに……‼）
　現実問題、俺たちの精神は確かに何かがおかしくなってしまっているんだ。
「モケーイ」
「モッケケケ」
　戦闘員アルテイロイドたちも興味深そうに俺たちを見ていた。
　あいつらの全身黒ずくめが赤に変わって見えたりはしていない。色彩

感覚までがおかしくなったわけではないはずだ。
　俺は青くなったツインテールに動揺し動けずにいるが、周囲の反応は違った。ギャラリーは歓声を上げて喜んでいる。
「青いレッドたんかわいー!!」
「新鮮だぜ！　サンキュー怪人!!」
「フハハハハハ、礼には及ばぬ民衆ども!!」
　おい、何でいつの間にかギャラリーまで味方につけてるんだカメレオギルディは……!!
「レ、レッド……」
　金髪になったブルーが、縋すがり付くように俺の肩を掴つかんできた。
　付き合いの長い幼馴染おさななじみが突然金髪になるのを見るって、かなり精神に来るぞ……!!
「ごめんなさい、レッド……あたしが油断したせいで……。遠慮なくあたしのこと罵ののしって……はあ、はあ……」
　馬ば鹿かな!?　罵るぐらいなら殴る、でお馴な染じみのブルーが、自ら罵られることを請うなんて!?
『これは単純な人格交換じゃなありません……パーソナリティが強調されています！』
　焦っていたはずのトゥアールも悪い癖くせが出て、ブルーの変容を楽しむように含み笑いを浮かべている。
『だから愛あい香かさんはイエローの正義感はブン投げて、単なるドＭに成り下がってしまっています！　誤解を恐れずにいえば……悪いとこ取りです!!」
　最悪じゃねえかあああああああああああああああああああああああ!!
「イ、イエローたちは……!?」

　はあはあしているブルーに掴つかまれたまま振り返る。
　黒くなったイエローはというと……湿っぽい表情でぶつぶつ呟つぶやいていた。
「ああ、また黒く、なっちゃいましたわ……。きっと、わたくしは……まっくろ暗黒が、お似合いなのですわ……」
　かつてイエローは、シャドウイエローとして完全な暗黒に堕おち、テイルギアを邪悪の漆黒に染め上げたことがある。
　あの時に比べれば、今回は正道。紛まぎれもなく正義の魂たましいを輝かせる黒だ。
　ところがそれをまとうイエローが、一番ダウナーな時のイースナもかくやのネガティブぶりになってしまった。
　口調もイースナと同じく、しどろもどろになっている。ブラックの性格が移ったはずなのに、どうしてそっちなんだ⁉
　そして唯一色と人格交換の被害を受けなかったメガ・ネは、髪からギアから真まっ赤かになってしまったブラックを見て右往左往する。
「ブ、ブラックちゃんが赤髪に……やんきーになってもうた……‼」
「ヤンキーじゃない！　これは……情熱の赤なのじゃぜ‼」
「じゃぜて……ブラックちゃん、じゃぜ、て⁉」
「わからん！　じゃが、身体からだが燃えるように熱い……妙に熱血してきおったああああああ‼」
　ブラックは……大丈夫か、元々変身するとテンションは高くなるから他の二人よりは変化が少ない。…………あれは俺の人格なんだよな……。
　そして自分の人格を失った俺は、自分の身体を掻かき抱いて震ふるえを抑えた。
「う、ううううう……‼」
　仲間を気遣う余裕もない。とめどなく押し寄せる破壊衝動に耐えるの

で精一杯だ。

　ブルー、お前普段どんだけエレメリアンを殴なぐりたがってるんだよ！

　カメレオギルディを見ていると、目玉を消し炭にしたり、ボロ雑ぞう巾きんになるまで踏みつけたりしてやりたくなる！　いくらブルーでもそこまでは…………って、ついさっき実際にしてた!!

「さあ、お前に殴られるのなら本望だ……やれ！　お前の中のテイルブルーが暴力への誘惑を囁さささやいているはずだ……!!」

　見抜かれている……だが思い通りになってたまるか!!

「ふ、ふざけるな……！　俺は、悪魔の誘惑には屈しない!!」

「……その悪魔、あたしの中にいたんだよね……ごめんなさい、ごめんなさい……!!」

　そしてブルーは自分を間接的に罵ののしられる度たびにはあはあしてるし……!!

「おい、テイルレッドよ」

「……何だよ！」

「――この、貧乳めが！」

　カメレオギルディは、俺の破壊衝動を爆発させる最後の一押しをしてきた。

　テイルレッドは子供だ、胸が小さいのは当たり前なんだ……こいつらの上司にあたる貧乳属性スモールバストのクラーケギルディが言ってたことじゃないか。

　耐えろ、俺の中のブルー!!

「寒色になると貧乳が引き立つな！　赤い時の貧乳もよかったが、お前ならば青くなった貧乳もよい!!」

　しかし貧乳と罵られる度、俺の体内に澱おりのように沈んでいたニトロが煮え立ち―ついには着火した!!

「貧乳貧乳うるせえええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

『ああっ……テイルブルーの決め台詞ぜりふをレッドたんが!?』
「あたしはそんなの決め台詞にしてないよぉ……！」
　トゥアールとブルーの驚きよう愕がくを置き去りに、俺はカメレオギルディに馬乗りになる。
　そして、破壊衝動のままに両りよう拳こぶしを交互に振り下ろした。何度も何度も何度も……！
　叫びも勇ましく暴力に支配された俺は……カメレオギルディの健在ぶりに目を疑う。
「あ、あれ……全然効いてない……!?」
　それどころか、カメレオギルディは恍こう惚こつの表情を浮かべていた。
「ふはははははは、これでは俺はテイルレッドにお腹なかに乗っかってもらってぽこぽこ叩たたいてもらえただけ！　実に儲もうけたわ!!」
　俺が飛び退のくと、起き上がったカメレオギルディは元気溌はつ剌らつと謳うたい上げた。
「く、なんてこった……俺は、完全にブルーになっちまったっていうのか……!?」
　再び弱々しく縋すがり付いてくるブルー。
「ひ、ひどい……レッド……あたしのこと、貧乳のことネタにしてきたエレメリアンをボコボコにするだけの女って思ってたの……!?」
　ひどいと非難している割りに、めっちゃ嬉うれしそうなのはどうしてなんだ……。
「よせ、レッドだけを悪者にするなっ！　わらわもいつもそう思ってた

のじゃぜ！　そしてイエローもな!!」
「うん、お、思ってましたわ……で、でへへ……」
　でへへだと!?　脱衣に身を任せるその時でも高貴さを損なわなかったイエローが、引きこもりじみた卑ひ屈くつな笑いを!!
「おっと、貴様らだけにいい格好はさせんぞ、ツインテイルズ！　テイルブルーが貧乳をネタにしたエレメリアンをボコボコにするだけの夜叉!?　当の我われらエレメリアンも満場一致でそう思い続けてきたわ!!」
　まるで不器用な優しさで罪を共有するように、粋な割り込みをするカメレオギルディ。
　自覚できるほど握力の弱くなった手の平を見つめ、俺は焦しよう燥そうに独りごちた。
「どういう理屈だ！　色と人格交換まではわかる、何で力まで大幅に低下する……!?」
『総そう二じ様たちが、人格交換の弊へい害がいで御自分の心を見失われているからです……！』
　慌あわてふためく俺へと、トゥアールが冷静に通信をしてきた。
　そうだった、テイルギアは心で操る装甲……イエローがたびたび苦しんだように、精神が不安定になったら、その影響をモロに受ける。今の俺も、心が相当乱れているってことか。
「だったら……弱体化した力を底上げするまでだ！　ツインテイルブレス!!」
　俺は一般兵エレメリアンに対して初めて、最強の力を解き放つ決意をした。
　アルティメットチェインに最強変身チエインエヴオルブして、一気にケリをつけてやる!!
　手て応ごたえの無さに左腕を見ると……

「……な……ツインテイルブレスが出現しない……⁉」
　他のメンバーも進化装備エヴォルブアームズを出そうと躍起になっているが、結果は俺と同じだった。
「うちもや赤いブラックちゃん！　インフィニットシステムが起動せえへん‼」
「ア、アブソリュートリング、出せねー……ですわ……ペッ……（唾だ棄き）」
「ううううう……エターナルパッドが出ない……ごめんねレッド……お詫わびにレッドのお手々をパッドの代わりに入れてもいいよ……？」
　あまりに突拍子のない展開に翻ほん弄ろうされていたが、ようやく俺は、今自分たちが置かれた状況がどれだけ危険なのかを自覚した。
　あと、ブルーが思った以上にデンジャラスなことになっているのも痛感した。
「──心を掻かき乱して、心の力を弱体化させる！　強化形態にもなれない！　こいつ、色替えなんてしょぼい能力かと思ったら、とんでもない！　めちゃくちゃピンチだぞ⁉」
　こんなとんでもない能力、今までのどんな大幹部にだっていなかった。
　カメレオギルディ、こいつは一体──
「よっしゃ、こうなったらウチがやったる！　ウチは色変えされてへんからな！　その間にみんな落ち着いて、何か方法考えて‼」
　メガ・ネは単身、カメレオギルディに戦いを挑んでいった。
「とりあえず、ここからもっと離れてもらうで！」
　十指のバルカン砲で上う手まく牽けん制せいし、ギャラリーと逆方向にカメレオギルディを移動させていく。
「頑張れーテイルシルバー‼」
　おお、子供たちまで声援を……なんて正当派ヒーローなんだ、メガ・

ネ……。
　カメレオギルディは、メガ・ネの猛攻を冷静に見切って回避する。
　メガ・ネは幹部級のエレメリアンにもひけを取らない強さのはずだ、やっぱりこいつはただの一般兵じゃないぞ……！
　爆走機形態メガネストライカーに変形したメガ・ネはスタンドアローンで疾走、その重量感のある前輪で敵を跳ね飛ばす。直撃を受けてもピンピンしていたカメレオギルディだが──
「ぐ、う、うううううう……!!」
　ややあって急に胸を押さえ、蹲うずくまった。それだけではなく、内側で何かが爆発しているかのように、全身から断続的に放電し始めた。
「ぐああああああ……お、ああああああ……！　赤……青、黄……黒、ぬわあああああああ!!」
　俺は我われ知らずカメレオギルディに声をかけてしまう。
「おい、どうした！」
　窮地なのは俺たち、敵の心配をする余裕などないと仲間にどやされそうだが……さすがにこの尋常ではない苦しみ方を見れば、そんなことも言っていられない。
　カメレオギルディはいらぬお世話とばかりに後あと退ずさり、脂汗の伝う口くち許もとを無理に吊つり上げた。
「この痛みは、せ、戦士の勲章だ……！」
　よろめきながら立ち上がり、髪の色の変わったツインテイルズを代わる代わる眺視していくカメレオギルディ。まるで、自身の戦果を存分に味わうかのように。
「……はあ、くう、はあ……勝負は預けるぞ、ツインテイルズ……！　と言っても、俺の勝ちは決まったようなものだがな……!!」
　後方に転移ゲートを出現させるカメレオギルディ。そのまま転がり込むようにゲートに飛び込むと、戦闘員アルテイロイドたちも一緒に撤退

していった。
「あいつ、何で急に苦しみだして……」
　メガ・ネに助けられたが、それでも奴やつの優勢には変わりなかった。
　俺たちにこれほどの被害を与える技だ、奴自身にもとてつもない負担があったということなのだろうか……？
　困惑する俺に、一般人を代表するように可か愛わいらしい声がかけられた。
「青いレッドたん、次はがんばってねー！　ぜったい勝てるよ!!」
　子供の応援に手を振り返しながら、俺は内心で敗北感を噛かみしめていた。

　運がよかっただけだ。事によっては……その〝次〟がなかったかもしれないんだ……。

　　◇

　基地内のマーメイドギルディの工房の奥にある、秘密の部屋。
　ここに一時的に身を置いているフェニックスギルディは、モニターに映るツインテイルズの惨状に衝撃を受けていた。椅い子すに腰を下ろしたフェニックスギルディは、頭を掻かきむしる。
「……マジかよテイルレッド、あんな手にしてやられるなんて……！　くそっ、俺様のライバルともあろう者が、情けねえ！」
「あまり熱くなると、部屋が燃え上がっちゃうわ」
　フェニックスギルディの発散する熱波を、手で扇あおぎ返すマーメイドギルディ。
「剛速球を何十球も打ち続ければ目も身体からだも慣れるでしょう。そ

こにいきなりすっぽ抜けの変化球がきたら、見えてても間違って振っちゃうものなのよ」
「ほおう、面白え喩たとえをするじゃねえか！　意外にスポーツ好きか、てめえ！」
「スポーツ漫画はＢＬ妄想が捗はかどるから、たくさん読んでいるの」
　なおも納得いかずモニターを見続けるフェニックスギルディ。ツインテイルズは這ほう々ほうの体ていで帰っていった。
　マーメイドギルディは悪戯いたずらっぽく笑う。
「キミも気をつけた方がいいわよ、フェニックスギルディ君。自分は大丈夫だって思ってる人ほど危ういものなんだから」
「ご忠告どうも。──で、そろそろいいだろ」
　わざとらしく首を傾かしげるマーメイドギルディ。フェニックスギルディは舌打ちし、
「俺様の能力を何に使うつもりか知らねえが、ああしててめえの研究は成果を挙げてるようだ。今度はてめえが約束を果たす番だぜ。首領の間にとっとと案内しやがれ」
　フェニックスギルディは、自身の能力を研究させるなど、マーメイドギルディと一時的な協力関係を結んだ。
　もちろんフェニックスギルディの実直な性格からすれば、平気で仲間を犠牲にするマーメイドギルディは絶対に相あい容いれない存在。それをあえて呑のみ込んだのはひとえに、マーメイドギルディが首領の間へ何度も行き来した希少なエレメリアンだからだ。
　フェニックスギルディの最終標的でもある、アルティメギル首領の間へ。
「焦らなくても、歓迎されるわよ……首領様はいつも退屈してるもの。サプライズ大好きよ」

アルティメギル首領は不可侵の絶対存在であるがゆえに、その生に一切の刺激がない。
ゆえに、反逆や抵抗をむしろ好ましく思う節があるのだ。
おそらくは、マーメイドギルディが影で妙な研究をしているのも見抜いているだろう。
そしてマーメイドギルディもまた、それをわかっていて放ほう蕩とうをしている。
極限の危うさを愉たのしむ……まさにマッドサイエンティストだ。
「首領の間へはてめえら神の一剣ゴー・デイア・ソードでも容易には入れねえって話だが……どうやって俺様を案内する？　今さらできねえなんて言わせねえぜ」
「そうねー、いくら私でも反逆者を直接エスコートしたら、首領様に怒られちゃうかも♪」
悪びれずに約束を反ほ故ごにしようとするマーメイドギルディ。
頭に血を昇らせたフェニックスギルディが詰め寄ろうとすると、その手にディスクが手渡された。
「……何だ、こりゃあ」
ディスクを摘つまみ、光に透かすように天井にかざすフェニックスギルディ。
「――だから、案内するんじゃなくて、行かせてあげる。一回っきりの通行証でね」
グリフォギルディがテイルブラックへアルティメギル基地に帰還するよう与えた転送ゲート発動用のディスクよりも、さらに一回りは大きいものだった。
「……これが……こんなもんで、首領んとこに行けるだと……!?」
さすがのフェニックスギルディの顔つきも、一気に険しくなる。
「マルチバースキューブ……首領の間のある超次元の迷路。本来なら、

首領が許可した場合にしか入れないのよね。でも、私はそのロジックを解明しているから、フリーパス状態なのよ」
　手も無く口にしているが、首領の間の存在を知る全ての上位エレメリアンが、聞けば絶句するであろう。
　首領の間は難なん攻こう不ふ落らく。数兆通りの解を持ったパズルに喩たとえられる、一度として同じ方法では辿たどり着けない神秘の具現だ。
　それを科学で以もつて解明したというのなら、もはや科学を超越した神の御み業わざ。
　この部隊の兵たちにどれだけ素性を隠そうと、マーメイドギルディは紛まぎれもなく神の軍の戦士たる能力を秘めているのだ。
「何だったら、あと何個か作る？　下見用とか、予備とかあった方がいいでしょ？」
「一つで十分だ。何度も行ったり来たりなんざ、性に合わねえ」
　首領とは、一回で決着を着ける。その宣言は性分というより、自身を追い込む決意のようでもあった。
　ディスクを手の平で弄もてあそびながら、椅い子すから立ち上がるフェニックスギルディ。
「えー、もう行っちゃうの？　もっと一緒にいましょうよ～」
　わざとらしく甘え声を出すマーメイドギルディ。フェニックスギルディは威い嚇かくするように背の翼を大きく展開する。
「これ以上いたら、俺様自身まで実験に使う気だろう？　現に、何度も狙っていたみてえだからな」
「……やっぱ気づいてたかあ。でもその前に私を倒すでしょう？　あなたなら」
　今まではスワンギルディを人質扱いしてまでフェニックスギルディを引き留めていたマーメイドギルディが、あっさりと踵きびすを返すのを

見過ごす。
　彼女がフェニックスギルディを利用して進めていた研究は、完成を見たのだ。
　つまらなそうに鼻を鳴らし、フェニックスギルディは陰気なラボの隠し部屋を後にした。

　不死鳥の戦士の気配が基地から完全に消え去ったのを確認すると──マーメイドギルディは、ディスクを取り出して展開。部屋の中に、極彩色の転送ゲートを出現させた。
　大胆にも、今し方見送ったフェニックスギルディの行き先である首領の間へと先んじる。
　プリズムを重ねたような神秘的な回廊を歩むと──程なく、一体の戦士が門番のように道を塞ふさいで立っていた。
「……放ほう蕩とう者が首領様の御目を煩わずらわせるな」
　ローブの下から聞こえるのは、研ぎ澄まされた剣のように凛りんとした女性の声だ。
「あらあらあら、そういうあなたは神の一剣ゴー・デイア・ソードの女神様じゃない」
　臆おくすることなく、妖よう艶えんな笑みを口くち許もとに讃たたえるマーメイドギルディ。
「ちょうどよかったわ。私が用があるのはあなたよ──ヴァルちゃん」

◇

　カメレオギルディの撤退で、九死に一生を得たと小さな安あん堵どを浮かべたのも束つかの間ま。
　基地に帰った俺たちは、より深刻な窮地に立たされてしまったことを

知る。
「メガ・ネ以外の全員が弱体化なんて、前代未聞だな……」
　戦力低下を憂う俺の言葉を皮切りに、ツインテイルズはコンソールルームになだれ込んで変身解除をする。
　一瞬ギクリとして全員のツインテールを見比べたが、髪の色は元に戻ってくれた。
　だが、もう一つ戻るべきものが、そのままだったのだ。
　俺は……去っていったカメレオギルディを思い出し、今すぐにも追いかけて殴なぐりたい衝動が強まる。
　そして愛あい香かが頬ほおを紅潮させ、息を荒らげて俺にしな垂れかかってきた。
「うう、ごめんねそーじ、役立たずでごめんね……？」
「やめなさい愛香さん、そんなリチウムバッテリーじみた真っ平らの胸を押しつけるのは！　おとなしくスマホの中にお戻りなさい！」
　トゥアールと口喧げん嘩かが始まるかと思いきや、愛香は俺との密着を深めてきた。
「……ねぇ、そーじも、トゥアールみたいにたくさん罵ば倒とうして……？」
　おねだりをするような愛香の猫ねこ撫なで声に、トゥアールが目を丸くする。
「え、愛香さん、まさか……」
　最悪な確信に突き動かされ、俺は愛あい香か以外の確認を急いだ。
「最悪、ですわ……敵を取り逃がしてしまって……わたくしたち、どうなりますの……」
　慧え理り那なが床を見つめながら眉まゆを顰ひそめ、ぶつぶつと文句を言っている。
「これは反省しないと駄目なのじゃ！　わらわたちの油断が招いた敗北

じゃぜ!!」
　ジャージに戻ったイースナなのに、やたら暑苦しい！

　ようやく帰還した安らぎの場所にまで踏み込んでくる悪夢は、恐怖映画の結末を思わせる。
　俺は、震ふるえる声を絞り出した。

「──変身解除しても……人格交換が継続してる……!?」

キャラクター名鑑 035



DATA

身長：209㎝

体重：236㎏

属性力：赤髪属性(レッドヘアー)（メイン）
青髪属性(ブルーヘアー)、金髪属性(ゴールドヘアー)
黒髪属性(ブラックヘアー)

混成残存軍最古参の兵士。出撃の機会を逸し続けてきたが、マーメイドギルディの強化計画に志願。仲間たちと語り合ってきた「様々な髪の色のよさ」を己が身一つに結集し、満を持してツインテイルズとの戦いに臨む。伸縮自在の舌と尻尾を武器とし、360度をカバーする視野の広さを活かしたトリッキーな戦いを得意とする。誠実な戦士だがデリカシーに欠け、赤髪の女の子はあらゆる体毛が赤いのか興味津々。

第三章　魂の色い彩ろ。

　地下基地のコンソールルームには、重苦しい空気が漂っていた。
　人格をシャッフルされてしまった俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ。
　それを見守るトゥアール、メガ・ネ、桜さくら川がわ先生、母さん。
　奇くしくも向かい合って座るこの面子メンツは、挟んだ机が日常と非日常の境界線のようだ。
「やられたな……絶対に油断なんてしないつもりだったけど……」
　情けないことに、真っ先に俺の口をついて出たのがそんな弱音だった。
　心のどこかで、カメレオギルディのことを一般兵だと侮あなどっていたんだろう。
　その結果が……これだ。
「みんな、一応自我は残ってるのね。総そうちゃんと愛香ちゃんの精神がそっくり入れ替わった、とかじゃないんだ～。……そっちの方がもっとハチャメチャになったのに……」
　いつもながら速攻で状況を理解する母さん。雰囲気の重さでスルーしかけたけど、久々に悪の女幹部コスをしている……。
　っていうか最後、小声で恐ろしいこと言わなかったか。
「いえ、未み春はる将軍……人格だけでなく、精神そのものが交換されていたらアウトでした。テイルギアを維持できず、あの場で強制的に変身解除されていたでしょう」
　説明を聞いて空恐ろしくなる。よりによって今日は、ギャラリーがい

た戦いだったのだ。
　トゥアールはスクリーンを四分割し、俺たちのバイタルグラフを表示した。
「もっとも、本来は精神まで交換するカメレオギルディの能力を、テイルギアの防御特性でギリギリ人格のシャッフルだけで食い止められたのかもしれませんが……」
　精神の防御を最優先にするというテイルギアの特性に、薄皮一枚で助けられたんだな。
「しかし……特殊能力での戦闘に特化したエレメリアンはこれまでに何体もいましたが、よくて変身時に限り、何らかの影響を及ぼす程度でした。変身解除してからも効力が続くというのは、ただ事じゃありません」
　確かに。変身していない時の俺たちに起こった異変なんて、俺が女の子の身体ソーラになったことぐらいだ。しかし、その原因は俺にあった。エレメリアンの攻撃が元じゃない。
　トゥアールが指でこめかみを押さえながら確認する。
「えーと、総そう二じ様がテイルレッドブルー、愛香さんがテイルブルーイエロー、慧理那さんがテイルイエローブラックで、イースナがテイルブラックレッド、ってことになりますかね？」
　母さんは苦笑しながら肩を竦すくめた。
「一般人にはなかなか定着しなさそうねえ……母さんはもう暗記したけど」
　何かその呼び方だと、二つの色が混ざった中間色みたいだしなあ。
　イースナが勢いよく机に手をついて立ち上がった。
「そもそもおかしくないかっ、トゥアール！　神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンならともかく、相手はただの雑兵じゃ！　カメレオギルディ……あいつ確か、わらわが着任した時にはもうおったのじゃ

から、混こん成せい残ざん存ぞん軍ぐんの兵士なのは間違いないっ!!」
　コンソールルームに響きわたるイースナの声。さすが歌手、腹式呼吸ができている。
　俺、いつもそんな発声練習みたいなテンションで会話してたかなあ……。
「ええいあなたは少しおとなしくしていなさいイースナ！　もうすぐ冬なのに暑苦しい!!」
「聞いたか総そう二じ！　お前の人格が移ったわらわを暑苦しいって言ったのじゃーっ!!」
「総二様の熱血は大歓迎ですが、あなただと全然違うんです！　私の下半身に響きません!!」
　トゥアールがイースナを窘たしなめる様を、慧え理り那なが昏くらい瞳ひとみで見つめている。
「いいですわね、イースナさん……元気に、なって……。わたくし……世界の全てが、どうでもいいですわ……」
　お嬢様がしれっと暗黒に染まっているが、大丈夫か。
「おしりかゆいですわ」
　俺たちの前で堂々とお尻をぽりぽり掻かく慧理那。うん、大丈夫じゃないな。
「……多分、カメレオギルディはん……無理して強くなっとるんと違うかなあ。……以前戦ったブラキオギルディって子が、何や妙な道具使つこて強うなってな。同じような苦しみ方をしてた気がするんよ。あっちは理性まで無くしてしもてたけど……」
　苦い戦いの記憶を呼び起こすように、沈ちん鬱うつに語るメガ・ネ。トゥアールは、同意するのを躊躇ためらうように目を伏せた。
「その可能性は高いですね。ですがそれは裏を返せば、これからはどんな一般兵でも無理をすればこのぐらいの脅威になりえるということで

す……」
　考えれば考えるほど、不安要素が募つのっていく。
　イースナは皆を見渡すと、駄々をこねるように両手を勢いよく上下させた。
「みんな！　落ち込んでても仕方ない、今はこの状況を受け容いれるしかないのじゃぜ!!」
　あれが俺の人格とは思えないのだが……今は、底抜けに明るくなったイースナが癒いやしだ。
「つーかわらわ、ツインテールを見てると身体からだがカッカしてくるぞ！　のう慧理那!!」
　イースナが、隣でどんよりしている慧理那のツインテールを摘つまみ上げた。
「うおおおおおおいっけえーわらわのツインテール!!」
　そのツインテールを、児童向けホビーマシンを投とう擲てきするように勢いよく放るイースナ。
「イースナの熱血力が、児童コミックの主人公並みにインフレしてますね……」
　さすがのトゥアールも、イースナのテンションに圧おされ始めている。
　ツインテールで熱くなる……すまんイースナ、やっぱりそれ俺の人格だ。
　慧え理り那なは自分のツインテールでエキサイトするイースナに、無言で昏くらい瞳ひとみを向けた。
「なんじゃあ、ノリ悪いぞ慧理那ーっ！　元気出していくのじゃぜっ!!」
　ダウナー入ってる人に「元気になれ」は禁句だと聞く。案の定、慧理那は態度を一層硬化させてしまった。

「イースナさん……無駄ですわ。わたくし、笑い方を忘れてしまいましたの……」
　桜さくら川がわ先生は慧理那の豹ひよう変へんに動揺し、立ち上がって部屋を右往左往している。
「お嬢様の麗うるわしい笑顔がこんなに曇ってしまって……ああ、奥様に何とお伝えすれば!!」
　いや、理事長は普通にこの状況を面白がりそうな気がする……。
「遅れてきた反抗期だって伝えればバッチリよ、尊みことさん！　こんな機会滅多にないんだから、えむぴー大歓迎するわ！」
　……と思った直後、母さんが俺のように予想ではなく断言してしまった。
　ところでイースナがひときわ元気なこの場では、普段と違い火の消えたように静かな愛あい香かは完全に存在感が無くなってしまっている。
　視線を向けると、愛香は苦しげに震ふるえながら、制服のブレザーのボタンを外し始めていた。
「……はぁ……はあ…………ぎ、た……」
　苦しげに何かを呟つぶやいているので、俺は咄とつ嗟さに耳を傾ける。
「ぬ……脱ぎ……た……」
　──いかん、愛香が慧理那の人格に完全に支配されつつある!!
「脱ぎたければ……脱げば、いいのですわ、だりー……」
　愛香を煽あおるように制服を脱ぎ、床に散らかしていく慧理那。
　脱衣は凛り々りしく美しく、がモットーのテイルイエローである慧理那が……単なる引きこもりが物ぐさゆえに下着姿で過ごすような、怠たい惰だな脱衣を!?
　驚きが先に来て、下着姿の慧理那から目を逸そらすのが遅れてしまった……！

「お嬢様ァァァァァ！」
　桜川先生はパニック寸前で駆け寄り、慧理那に服を着せようと苦心する。
「ぶっちゃけ総そう二じの周りの女はみーんな妙ちくりんな奴やつばっかりじゃぜ！　性格がチェンジしても変質者という本質はそのままなのじゃから、そこまで問題はなかろう‼」
「あかんイースナちゃん、ブーメランや！」
　自分のことを棚どころか衛星軌道上にまで上げるイースナに、おかんが待ったをかける。
　こんな俺たちを嘱しよく目もくし、トゥアールが羨うらやましそうにテーブルをべしべしと叩たたく。
「ぐああああみんな楽しそうですね！　……私だけこんなおもしろイベントに参戦できないなんて！　私も誰だれでもいいから人格交換したいですよお‼」
　当人は傍そばで見るほどには愉快じゃないぞこれ、めちゃくちゃ精神が不安定になるし……。
　トゥアールは、白衣のポケットからにゅるんと何かを取り出した。
「こうなったら……深夜のノリで作ったけど実際これいつ使うんだろって我われに返ってロストナンバーと化していた習作を、今こそ正式ナンバーに加えます！」
　メカニカルなラインがボディに走る、帽子とゴーグルが合わさったような機械だ。
「これぞアンチアイカシステム十二号・アイカフヤース！　これをかぶった人は脳内の興奮物質を活性化されて暴力的になり、網膜を通してのサブリミナルを駆使してもろもろ愛あい香かさん的な思考を植え付けられる！　早い話が愛香さんになるのです‼」
「ちょっと待て、すでに人格操作の機械作ってたのか⁉」

期せずして今回の一件のパイオニアだったトゥアールに、俺は驚きを隠せない。
「愛香さんを倒すために愛香さんになるって、燃えて泣ける展開じゃないですか⁉」
目を輝かせて力説するトゥアール。ある意味それもアンチアイカの到達点だな……。
「ただ、よく考えたら精神だけ愛香さんになっても身体能力の差で血祭りにされるなあと思いまして。ですが、これを使えば今の総そう二じ様とお揃そろいになれます‼」
もちろん、次々に自分を複製されるとあっては、本人が黙っていない。
「あたしになるのはそーじだけでいいの、よぉ……！」
愛香が放った拳こぶしは、トゥアールの肩に当たってぺしっと軽い音を立てた。
「……って、あれ……⁉　の、乗らない……あたしの拳に、重さが……」
「おやおやどうしましたかねえこのワンちゃん、じゃれついてきてこそばゆいですが？」
いつもの愛香のパワーに慣れきってしまったトゥアールにとっては、まさしく犬がお手をしてくる程度の衝撃しか感じないだろう。
「ドＭになっていつもの蛮性が発揮できるはずがありませんからね、当然の結果です‼」
愛香は逃げるようにしてトゥアールから離れ、俺に涙目で縋すがり付いてきた。
「どうしよ、そーじ……怖いよ……あたしがあたしじゃなくなってく……！　トゥアールをブン殴なぐりたいっていう気持ちが、バラバラになって消えてくの……！」

自分が変わっていく怖さはわかるが、それは消えても問題ないものじゃないかな……。
「……しかし、これではっきりしましたね。いま総二様たちが体験しているのは、ただの人格の交換ではありません。正確には、性格のトレースです」
「みんな、笑ってやるのじゃ！　いまトゥアールが駄だ洒じゃ落れを言ったのじゃぜ!!」
「ええい偶然ですよスルーしなさい!!」
トゥアールはイースナをあしらいながらコンソールを操作し、メインモニターに簡単な説明を表示する。
「もし愛香さんが完全に慧え理り那なさんの性格と交換になっていたのなら、そもそもさっきのように私を殴りたいという気持ちは湧いてこないはずですよね？」
確かにそうだ。ドＭになったはずの愛香が、トゥアールにツッコもうとしていたもんな。
「まあ、慧え理り那なさんがいつもニコニコ笑顔の裏で『あの巨乳ブン殴なぐりてー』とか心の奥底で思っていたらそれはそれで興奮しますが……！　それ以上に凹へこみますけど」
「お嬢様がそんなことを考えるか!!」
桜さくら川がわ先生に窘たしなめられ、説明を続けるトゥアール。
「総そう二じ様たちの性格は、変わらず本人の中に残っています。今表面に出ている他の面々の性格は、総二様たちご自身がそれぞれのツインテイルズのパーソナルカラーに紐ひも付づけしていたもの……つまり、『その色』の人は『どんな性格』か──という連想ですね」
カメレオギルディはツインテールの色を交換した。それにより、俺たちは仲間の色から連想する仲間の性格──ブルーはこういう思考だ、イエローはこんな言動をする、など──まで連動して変化してしまったという

のだ。
　先ほどのアンチアイカシステム一二号の原理でもあるが、とかく人間は視覚から得られる情報に惑わされやすい。俺たちはエレメリアンの強力な能力として暗示を受けたのだから、なおさらだ。
「よかったですね愛あい香かさん……記憶や考えていること──精神を丸々交換されたら、愛香さんの妄想や性癖が全部総二様にバレてしまっていましたよププーーーププププ」
「う、うん……そうなったら大変だったわね……そーじ、あたしのこと軽蔑するかな……」
「……おんやあ……？」
　妙に控え目な愛香に、拍子抜けするトゥアール。俺から見ても愛香が何な故ぜか喜んでいるように見えるが……皆を心配させまいと、気丈に振る舞っているのだろう。
「愛香はつらいだろうな。普段あんなに勝ち気なのに、対極のドＭになったんだから……」
「それがねそーじ、すごくいい気分になってきたの……昨日までのあたしが嘘うそみたい。ドＭに溺おぼれてしまいそう……はあ、はあ……」
　恍こう惚こつの表情で、バラードの歌詞じみたサティスファクションを吐と露ろする愛香。
　トゥアールは居住まいを正し、頼れる参謀の表情となった。
「新世界に旅立ってしまった蛮族は戦力外と考えましょう……今はカメレオギルディをどうするかを考えておかなければ」
　確かに今の俺たちでは、奴やつが再び現れた時に対抗できるとは思えない。
「変身を解いてもずっとこのまんまなんやもん、やっぱりカメレオギルディを倒さんとイースナちゃんたち元に戻らへんよね……」
　メガ・ネの言うとおり、このまま時間が経たてば元に戻るとも思えな

い。つまり俺たちは、弱体化した状態でカメレオギルディを迎え撃ち、呪じゆ縛ばくを解かなければならないということだ。
「愛香の人格が移った俺は、幸いエレメリアンに過度の怒りを懐いだくだけで済んでる。それなら日常にあまり影響はないはずだ。カメレオギルディのことは俺に任せて、みんなは無理をしないように過ごしてくれ」
　多少強がりが入っているが、俺がしっかりしなければ。
　愛あい香かもそうだが、社交的でお淑しとやかなお嬢様から引きこもり系ネガティブ──元と両極端の人格になってしまった慧え理り那なも大変だ。
　この調子では、二人とも学校で満足に過ごせるかさえ怪しいからな。
「総そうちゃん……本当に大丈夫？　愛香ちゃんの人格には、もっと重要なのがあるけど……？」
　母さんは俺に悪の女幹部さながらの含み笑いを向け、指でくいっくいっと横を指し示した。
　指された先を見ると、トゥアールがテーブルに身を乗り上げ、イースナと何か言い合いをしていた。両腕で胸を挟んで強調するようなポーズだ。

　───あれ。トゥアールの胸見てるとムカつくぞ。

「ぐ、あ、あ……な、何だこの衝動は……!?　エレメリアンに向けるよりも遥はるかに強大な憎しみが、俺の五体をも蝕むしばんでいく……!!」
　唐突に襲おそい来る激しい頭痛に、俺は取り乱してしまう。
「〝始まった〟わね──」
　母さんが堂に入った所作でマントを翻ひるがえし、意味ありげに独り

ごちた。
「今渦巻いている感情こそが愛香ちゃんの本質。ここからが総ちゃんの本当の戦いよ」
　俺がこうなることを見抜いていたのか、母さんは！
「だ、大丈夫ですか総そう二じ様!?」
　俺の異変に気づき駆け寄ってくるトゥアールの胸が、躍動的に弾む。
　憎い。
　憎い憎い憎い憎い憎いニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイ――
　巨ち乳ちが憎い――!!
　まるで全宇宙を呪のろうかのような、途方もなく巨大な負の感情。
　これが――愛香の巨乳への憎しみ……!!
　いや違う。憎いだけじゃない、愛香は巨乳がとてつもなく羨うらやましいんだ！
　憎悪と羨せん望ぼうが鬩せめぎ合うことで、やがてさらに大きな憎しみとなる……!!
「あ、愛香……お前、常にこんな不安を抱かかえて生きていたのか……」
「あああ、覗のぞかれてる……あたしの大事な心ところがそーじに覗かれてる……はあはあ」
　ビクンビクンと身体からだを震ふるわせる愛香。一番困ったことになってる時の慧理那に生き写しだ。
「愛香さんにしてはエロいシチュエーションですね……。それはそうと、総二様は無理をなさらずにお休みください。やはり蛮族の人格は、誠実な総二様には刺激が強すぎるんです」
　視界にトゥアールの胸が大写しになった瞬間。
　俺の両腕が、コントロールを失って暴走した。

「え」
　トゥアールが素すっ頓とん狂きような声を上げる。
　胡う乱ろんな意識の中ではっきりと俺の手の平を支配する、際限のない柔らかな感触。

　俺は――トゥアールの胸を、両手で鷲わし掴づかみにしてしまっていた。

　　◇

　久方ぶりの吉報に湧くアルティメギル基地のホールは、宴会場と化していた。
　ツインテイルズをここまで追いつめたのは、テイルレッドのツインテール属性を奪取したティラノギルディ以来なのだから。
「ふふふふ……ありがとう、皆、ありがとう!!」
　ディナーショーの大物歌手のようにホールに並んだテーブルの間を練り歩き、贈られる声援に応えるカメレオギルディ。
「次の出撃の時こそ、ツインテイルズを完かん璧ぺきに打倒する！　そしてテイルレッドのツインテールを我われらがものとしてみせるぞ!!」
　その頼もしい言葉を受け、戦士の一人が先の戦いの再上映を戦闘員アルテイロイドに指示する。
「さあ皆の者、今一度我らが英雄カメレオギルディの戦果を讃たたえようではないか!!」
　ホールの大モニターに、青いテイルレッドの映像が大写しとなった。
　おおおおおおお……と怒ど号ごうめいた歓声を上げ、総立ちになる戦士たち。
　青くなってしまったツインテールに戸惑うテイルレッド。率直に言っ

て愛らしすぎる。
　戦士たちはめいめいに感想を口にする。
「これまで我らにとって恐怖の象徴であった青色だが、テイルレッドがまとった途端これほどまでに愛らしい光を放つとは！」
「そうだ、元来青とは数あま多たの異世界で遍あまねく輝く空の色！　その希望の色を恐怖と変えてしまったテイルブルーが、別わけて罪深い存在なだけだったのだ！　ありがとうテイルレッド!!」
　色が変わってもテイルレッドは可か愛わいい。
　むしろ、青くなったことで新鮮な庇ひ護ご欲をそそる。涙目になっているテイルレッドの頭を、よしよしと撫なでてあげたい。
　だが……名残惜しくも、映像は次に移ってしまった。テイルブルーイエローだ。
「黄色くなってしまったテイルブルー……見ているだけで不安になるわ!!」
「うむ……映像を静止させても、勝手に動いて脱ぎ出しそうではないか！　すまぬ、早送りしてくれい!!」
　テイルブルーの映像は、色が変わっても今までどおり要スキップ対象だった。
「ええと次は……テイルイエロー……うむ、黒いな」
「敵ながら同情するわ……！　ただでさえいまいち影の薄かったテイルイエローが真っ黒になってしまったら、いよいよ陰と同化してしまうのではないか!?」
　イエローに至っては、勝手にキャラとしての今後を心配される始末だ。
　そしてテイルブラック。赤い。だいぶ赤い。
「くっ……やはり赤はテイルレッドだけのものであって欲しい！　元ダークグラスパー様とはいえ、真まっ赤かっかになられるのはいかがな

ものかと!!」
「……そういえば一度、ダークグラスパー様は御自分でテイルレッドの衣装をまとわれたことがあったな……我われらの士気を上げるためにと申されて」
　彼女が指揮官だった頃を思い出し、ちょっとだけほろりとしてしまう一同。
　義務的にツインテイルズ全員分の映像を確認した後は、ひたすらテイルレッドのループだ。戦闘員アルテイロイドもモケモケと映像を操作する。

　ホールの隅で、目立たず黙して歓喜を見守るスパロウギルディ。彼の元へ、喧けん騒そうを離れたカメレオギルディが歩み寄った。
「苦しいのか……」
　憂いの言葉をかけるスパロウギルディ。彼は、カメレオギルディが大いなる戦果の代償に激しい苦痛を伴い、それをやせ我慢しているのを見抜いていた。
「ああ、胸の辺りが少し疼うずきますかな？　テイルレッドにぽこぽこしてもらったお陰で！」
　おどけてみせるカメレオギルディ。
「……ならば、私は何も言わぬぞ、カメレオギルディ。お前が選んだ道だ」
　目を伏せるスパロウギルディ。男の決めたことだ、誰だれが止められよう。
「感謝します、スパロウギルディ殿。……もっとも、他の者たちも気づいておるやもしれませぬが……」
　ホール内には、この成果の立役者であるマーメイドギルディの姿が見えない。

強大な力を得るためには犠牲がつきものだろうが、彼女はこれほどの苦痛を伴うものだと知っていて強化を勧めたのか……？　いや、彼女の優しい性格では、躊躇ためらいそうなものだ。
　スパロウギルディは、全てを見守ることしかできない自分の無力さに、胸を痛めた。

◇

　トゥアールの胸を掴つかむ自分の両手を、俺は他人のもののように見つめていた。

「ッ―――すおあああああああああああああああああああ⁉」
　深呼吸と共に驚きよう愕がくするという離れ技を見せるトゥアール。
「うわああああああああああご
めーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーんっ‼」
　我われに返り、トゥアールの胸から両手を引き剥はがした俺は、何とか正気に返ろうとテーブルに何度も額を打ちつけた。
　勝手に腕が動いた……なんて言い訳で許されるものではない。
「これは……これは！　トゥアールちゃん史上最強の完全勝利です！ハハハハハ……ハハハハハハ……！　ハーーーーーーーーーーーーーッッハッハッハッハッハッハッハッハッハァー‼」
　確かにトゥアール史上類を見ないほどの高笑いだ。
　ただこういう高笑いを上げるキャラクターって、だいたい後で逆転されるのだが……。
「お義か母あ様お義母様！　今まで私から無理矢理胸を押しつけてましたけど、総そう二じ様から触ってもらえるだけでこんなに幸福感が違うんですね‼」

「苦節八か月、ついにトゥアールちゃんも女の幸せを知ったのね！　その調子で、しぶとく生き残ってる総ちゃんの貞童テードーの撃破もシクヨロ!!」
　ああ、母さんが面白がってトゥアールを焚たき付けている……！
「と、とにかく暴走する俺の両腕を何とかして止めないと……俺の意思ではもう、コイツを封じ込められない……!!」
　意思とは関係なく女性の胸を触ろうとする手なんて、最低最悪すぎる。
「いいわよ！　今の台詞せりふすごくいいわよ総ちゃん！　お父さんも学生時代、テスト勉強サボる時そんなふうにして鉛筆持てなかったもの!!」
　素直にテスト勉強しろよ親父おやじ!!
「ふむふむ、何な故ぜ総二様がおっぱいを掴つかんでしまうかですが──見当がつきました！」
　トゥアールは今の俺の状態についての考察を自信満々に明かした。
「総二様は最近、変身解除して消える瞬間のツインテールを掴む特訓をしているそうです」
「うーむ、我わが息子ながらロックなことしてるわねー」
　頼もしげにうんうんと頷うなずく母さん。
「身体からだに染みついたその反復行動と巨乳への憎悪が化学反応し、視界に入った巨乳を自動追尾する全自動おっぱい掴みマシーンと化してしまったのです!!」
「最悪だあああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　過ぎ去りしツインテールの特訓の日々よ、何故俺を裏切ってしまったのだ……!!
「いつも肝心なところでヘタれるだのファッション痴ち女じよだの愛あ

い香かさんに見下されてきましたからね、今日という今日はこのチャンスを逃しませんよ！　さあ総二様、次は私の生なま乳ちちを――」
　服を脱ごうとするトゥアールの腕に、愛香が弱々しく手をかける。
「だ、だめ……よ……」
　精神をドＭに支配されてなお、肉体だけがトゥアールを止めようと……。
　意識を失ったボクサーがファイティングポーズをとり続けるかのような……これまでトゥアールの見せてきた不屈の闘志のお株を奪うかのようだ。
　だが今の自分ではトゥアールに力及ばぬと悟ったのか、愛あい香かは桜さくら川がわ先生に意思を託す。
「さ、桜川……せんせ……あたしの代わりに……そーじを……」
「……任せろ津つ辺べ。お前の代わりに私が観み束つかと結婚する!!」
「ちが……あ、でも結婚……は違わな……代わりが……」
　すっかりテンションの上がったトゥアールは、愛香や桜川先生に宣言した。
「邪魔はしないでもらいましょうか！　総そう二じ様は、御自分の意思で私の胸を揉もむ道を選ばれたのです！　あなたたちに男の決断を止める権利などありません!!」
　イースナは眼鏡めがねの奥の瞳ひとみにわかりやすい熱血の炎を灯ともらせ、トゥアールを断罪する。
「墓穴を掘ったな！　総二の人格になっているわらわは今、トゥアールのおっぱいを全然揉みたくない！　つまり総二は普段、トゥアールのおっぱいを特に揉みたくはないのじゃ！　今も自分の意思ではないのじゃぜ!!」
「な……嘘うそです！　それはイースナが総二様の人格を使いこなせていないだけ!!」

　とうとう話が、他人の人格を使いこなす使いこなさないの異次元に突入しちまったぞ……。
「わたくし、観束君の、お役には……立てないですわね……こんな小さい、胸じゃ……」
　鬱うつ々うつと表情を翳かげらせ、慧え理り那なが自分の胸を手の平で触れていた。
「気を落とさないで、慧理那さん！　幼い女の子は胸が小さいからこそ正義なのですよ!?」
「わたくし、幼く、ありませんわ……身体からだが幼い、だけですわ……」
「最高じゃないですか!!」
　トゥアールは慧理那へと力強くサムズアップする。……ネガティブになってしまった慧理那を、慰なぐさめてあげているだけだとは思うんだが……。
　勝手に動く腕を抑えるのに限界を感じた俺は、慧理那を見て打開策を思いついた。
「ッ……そうだ、桜川先生！　慧理那の手錠を貸してください！　ありますよね!?」
「ああ、持っているが……」
　桜川先生はバッグの中から手錠を取り出し、俺に手渡してくれた。
　手錠や目隠しや首輪などの不穏なアイテムの数々は、理事長の指示でいつでも慧理那が使えるよう、桜川先生が携行しているのだ。
　この手錠で俺の両腕を拘束すれば、トゥアールに迷惑をかけずに済む。
「はあはあ、あたしがはめるわ……はあはあ」
　愛香が俺から手錠を取り上げて言った。俺にはめてやる、という意味かと思ったが……何と、自分の手首にはめてしまった。

「何やってんだ愛香ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　しかも器用に後ろ手ではめやがった！　それじゃ日常生活に支障をきたすだろうが!!
「これであたしは無抵抗よそーじ、何をされても手も足も出ないわ……!!」
　後ろ手に組んだまま、身体からだをくねらせて俺に近づいてくる愛あい香か。
「いや足は出るだろ!?」
　普段の愛香なら本物の警察用手錠でも鎖を腕力でねじ切るだろうけど、さすがに今はそうはいかないだろう……!!
　俺が縋すがるように桜さくら川がわ先生を見ると、その視線の意味を勘違いされてしまったようだ。
　バツが悪そうに自分の身体を抱き締める桜川先生。
「そ、その……観み束つか、お前も大変だとは思うが、私の胸を鷲わし掴づかみにするのは勘弁してくれ。協力したいのは山々だが、さすがに恥ずかしい……。抱き締めるのはいいんだが……」
「それでいいんですよ、むしろそんなことしそうになったら俺をブン殴なぐってください！」
　トゥアールは鼻を鳴らしながら桜川先生に絡む。
「なぁーにが恥ずかしいですか！　結婚してくれと頼む殿方にその程度もさせてあげないから、あなたは行き遅れるんですよ!!」
「……………………そうなのか……」
　しょんぼりしてしまった桜川先生を見て、からかっていたトゥアールが逆に取り乱す。
「へっ……あ、わわ、何でマジ凹へこみするんですか、むしろこういう時こそ言い返してきてくださいよ！　ってか愛香さん、ツッコミサボっ

てないでちゃんとしてください！　そろそろトゥアールちゃんが天井に刺さる頃合いでしょうが!!」
「え？　何、あたし？」
　天井に刺さりたいというトゥアールの願いも虚むなしく、後ろ手に手錠をした愛香は床に倒れ込んでいた。そして、釣り上げられた魚のようにピチピチ跳ねている。
「ああああああツッコミ役がドＭになって機能してないのすぐ忘れるうううううううううう!!」
　悲嘆に暮れるトゥアールを見て、頷うなずく母さん。
「普段トゥアールちゃんが、どれだけ愛香ちゃんのツッコミに依存してたのかが露呈したわね……。失って初めて気づくツッコミの大切さ、か──」
　前々からその兆候はあったが、やっぱりトゥアールは定期的に愛香のツッコミを受けないと落ち着かない体質になっているようだ……。
「え、えへへ、そーじ、そんな目であたしを見ないで……いややっぱり見て……」
　……とにかく愛香だ、愛香の変化が大きすぎて、どう接していいか迷ってしまう。
　慧え理り那なは、状況をエンジョイしている愛香に嫉しつ妬との眼まな差ざしを投げかける。
「皆さん、楽しそうで、いいですわね……。どうせわたくしなんて、イースナさんの性格を使いこなせない、ダメ女ですわ……」
　落ち込むどころか、憔しよう悴すいしているように見える。
「おいたわしや、お嬢様……」
「よおおおおおおおおおおおおし！　だったらエロゲーでバトルしようぜっ、慧え理り那な!!」
　トゥアールの喩たとえどおり、日常生活のいざこざ全てをホビーバト

ルで決着する児童コミックの主人公じみたテンションで慧理那を慰なぐさめるイースナ。
　一応噛かみ合っているんだろうか、この二人は……。
「ただの性格トレース……ともすればお遊びにさえ見えますが、心を強く持たなければその〝演じている性格〟に元の性格が上書きされてしまう可能性もあります。特にイースナのネガティブを押しつけられた慧理那さんが危険です。何とか心を強く持ってもらわないと……」
　なるべくトゥアールの胸を見ないようにしながら、俺は聞き返す。
「色に性格が紐ひも付づけされてるってことは、ツインテールの形は性格と関係ないんだよな？」
「え？　ええ、少なくともカメレオギルディの能力はそうかと……」
　俺が引いただけ胸を近づけてこようとするトゥアールから離れ、俺は慧理那の背後へ。彼女のツインテールを掬すくい取るが、やはり無反応だ。
「ちょっとごめんな、慧理那」
　俺は断腸の思いで、慧理那のツインテールを解ほどく。
「えっ……えっ……？」
　それまでこの世の全てに感心がなさそうにしていた慧理那が、初めて驚きの声を上げた。
　そして、慧理那に代わってイースナが猛抗議してくる。
「何をするのじゃ総そう二じ！　性格と共にツインテールへの愛も失ってしまったのじゃぜ⁉」
「それはない。俺はツインテール属性を奪われても、ツインテールへの愛を失わなかった筋金入りだぜ？」
　きっぱりと否定すると、俺はイースナのツインテールをじっくりと確認し、そして慧理那の髪を同じように結んでいった。
「下手だろうけど……ごめんな」

　慧理那とイースナのツインテールは似ているが、結び位置の前後がけっこう違う。
　そのポイントを外さないよう、俺は全神経を指に集中した。
「あ、あの、観み束つか君……」
　思い出すなあ。俺が女になってしまった時、慧理那はこうしてツインテールの下結びを俺に教えてくれたんだ。これは、ちょっと遅い恩返しのようなものかな。
「こうやってツインテールも〝気分転換〟すれば、少しは心が楽になるんじゃないかな」
　俺の提案なんて、本当に気分転換程度のものだろうが……移った性格の持ち主と同じツインテールにすれば、性格の拒絶反応からくる疲労も薄れるんじゃないかと思ったんだ。
「よし、できた」
　自己申告どおりそれまで笑顔を忘れ、唇くちびるを引き結んでいた慧理那が……ようやく不器用な微笑ほほえみを浮かべてくれた。
　普段背中に靡なびいている慧え理り那なのツインテールが、今は胸にかけるようにして前に優しく垂れている。うん、やっぱり似合うな。
　どこから持ってきてくれたのか、トゥアールが身長大の姿見を慧理那の前に置いてくれた。
　鏡に映るちょっとだけツインテールを変えた自分を見て、慧理那はもう一度微笑む。
「…………………み、観み束つか君……さては、わたくしのこと、好きですわね……」
「え」
　目線を泳がせながら、俺に尋ねてくる慧理那。
「あなたを、わたくしの〝かれし〟にしてさしあげますわ……」
　あ、この流れ……一度経験してるぞ。

「あーーーーーーーっちょっと優しくしただけですぐ惚ほれるめんどくさいストーカー気質が顕けん現げんしてしまいました!!」
　トゥアールがイースナの性格を完全に覚かく醒せいさせた慧理那を見て危き惧ぐの叫びを上げる。
　俺のデジャブの主であるイースナが、我慢できないとばかりに俺の前に元気よく身を躍らせてきた。
「わらわも、わらわも変えたい!!」
　自分のツインテールを差し出し、子犬のように俺に身を擦すり寄せてくる。
「長さは足りんが、テイルレッドっぽくしてくれ!!」
　俺は快こころよく受け、イースナの髪も結び直していった。
　確かに、イースナをテイルレッドと同じスタイルのツインテールにするには、なかなか難しいものがあるが……何せ、この八か月では箸はしよりも多く触った俺のツインテールだ。
　俺は情熱と経験で髪の長さの差を埋め、見事イースナのツインテールをイメチェンした。
　再び姿見をイースナの前に移動させるトゥアールだが、その口くち許もとには邪悪な企たくらみが浮かんでいた。その思惑どおりなのか、イースナは鏡に映る自分を見てぶるぶると震ふるえ始める。
「ああ……何という美しさ……最高じゃぜ！　愛いとしいぞ、わらわのツインテール!!」
　ついには、んーま、んーま、と鏡の自分に向かってキスまで投げ始めた。
「思った通り……フッ、その鏡を相手に永遠に醒さめることのない熱情と戯たわむれていなさい」
　かつて敵だったイースナが、俺たちを幻覚世界に閉じこめていた時のような台詞せりふを放つトゥアール。彼女は何な故ぜこうも、悪役っぽ

い台詞が堂に入っているのか。
「ほっほーう、総そうちゃんの性格を上う手まく使いこなせないとああいうツインテールナルシストになっちゃうわけね……!!」
　これは面白い、と指で顎あごを撫なで擦さする母さん。もう完全に「性格」の概念がアイテムみたいになってるな。
　ところがトゥアールの思惑はあっさり外れ、イースナは俺に向き直って感謝をしてきた。
「総そう二じが結んでくれたツインテール、すごく嬉うれしい……わらわの宝物じゃ!!」

　ツインテールを摘つまみながら、天てん真しん爛らん漫まんに踊るイースナ。
　それはこれまで俺が見た中でも一、二を争う、彼女の笑顔だった。
　そこまで感謝されると、俺もツインテール冥みよう利りに尽きるってもんさ。
「ああっ……イースナちゃん！　イースナちゃんイースナちゃんめっちゃ可か愛わいい!!」
　いつもは常識人なメガ・ネでさえ、イースナの素直な笑顔に感激しまくっていた。
　三脚に乗せたビデオカメラを二台設置し、自身はその大きなボディからは想像もできない俊敏な動きでイースナの周囲を瞬動し、デジカメのシャッターを連打するメガ・ネ。
　子供の初めての運動会に張り切る親御さんそのものだった。
「だじ……！」
　目を血走らせてツインテールを差し出してくる愛あい香か。
　もちろんそのつもりだ。俺は苦笑しながら、愛香のツインテールを慧え理り那なと同じ下結びにしていく。

　あと、慧理那がすっごい近い。半笑いで、息がかかる距離で俺をガン見している……。
　最初こそ、はあはあと息を荒らげていた愛香だったが──
「…………もう、何でこんな時なのよ……」



　少しだけ心が落ち着いたのか、口調が穏やかなものになる。
「…………ありがと、そーじ。これで……もう少し頑張れそう」
　後ろ手で手錠をしてなければ、俺も力強く頷うなずき返せたんだが……。
「……う、うふふふ……そーじに、結び直されちゃった……はあ、はあ……やっぱりあたし、何の抵抗もできない……」
　で、すぐに戻ってしまう。頑張れそうだと言ってくれたから、いいか……。
　イースナは、ハイテンションのままに慧え理り那なに眼鏡めがねをプレゼントしている。

　トゥアールはそんな俺たちを見て、少し寂しそうに微笑ほほえんでいた。
　そしてすぐにドヤ顔に戻ると、パン、と手を叩たたき、
「――――よし、カメレオギルディを倒すのはやめましょう!!」
　ここまでの会議を銀河の果てにブッ飛ばすとんでもない提案をした。
「雑魚ざこエレメリアンが執念で強くなったんです、その心意気は認めてあげるべきでしょう」
「何言ってるのじゃぜトゥアール！　それじゃわらわたちはずっとこのままだぞ!!」
「無理に元に戻すよりも、入れ替わった性格で問題なく生きていく方法を模索した方が建設的です！　総そう二じ様はおっぱい触ってくれるし愛あい香かさんは私を半殺しにしてこないし、いいこと尽くめじゃないですか!!」
　俺は横目で愛香を窺うかがう。いつもなら刹せつ那なで襲おそい来るツッコミが、未いまだ始動しない。
　確かにトゥアールは無事でいられるだろうが……本当にそれでいいの

か!?
「さあさ、皆さん、今日はひとまずお開きにしましょう！　私はこれから入念にシャワーを浴びないといけませんので！」
　呑のん気きなことを言っているけど、トゥアールは皆が早く休めるように気遣ったんだろうな。
　ずっと性格が変わったままじゃ、ツインテイルズも弱体化したままだ。今、新たな神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンが現れたら、とても太た刀ち打ちできない。
「うふふふー、今夜は慧理那さんを弟子にした時以来ご無沙汰だった夜よ這ばいスーツの出番ですね～。遠慮なくガン揉もみしてください、総二様!!」
　……トゥアールは俺たちを、気遣ってくれた……はず……。
　そして俺はもう、拘束衣でも着込むしかないのかもしれない……。

◇

　翌朝。──というより、浅い眠りを繰り返したせいで夜朝の境界が曖あい昧まいな、昨日と地続きの翌日。
　俺はベッドで上体を起こすと、欠伸あくびではなく溜ため息いきをついた。
「……眠ったはずなのに、身体からだが重い……」
　毎朝の習慣になってたツインテールを掴つかむ特訓だけど、さすがに今日は体調が悪い。何よりこの状態で今までのように変身と変身解除をポンポンと繰り返すのは危険かもしれない。
　聞こえてきた荒い息の音にぎょっとして、ベッドの脇わきを振り返る。
　トゥアールと桜さくら川がわ先生が呼吸を乱し、牽けん制せいし合う

ように膝ひざ立ちで向かい合っていた。
「お、お前の体力は底無しか……本当に一晩中暴れ続けるとは……」
「もう夜よ這ばいじゃなくて朝這いに切り替えますから、そこをどいてください尊みことさん!!」
「聞けんな。観み束つかを監視すると津つ辺べと約束したし、何よりお前が観束に妙な真ま似ねをするとお嬢様が悲しむ！」
　桜川先生は愛あい香かの希望どおり一晩中、俺を見守ってくれていたらしい。主人である慧え理り那なも性格が変わって大変だというのに……申し訳がない。
　ああして朝トゥアールと争うのまで、愛香の代わりを務めてくれたのだろうか……？
「尊さんは私のように若くないんです、夜更かしは老化を一気に進めますよ!!」
　トゥアールは気力を振り絞るように、桜川先生を糾きゆう弾だんする。
「うむ、そこはお互い気をつけよう」
「だからティーンの私は夜更かしなんざ怖くないっつってますでしょうがあああああああ!!」
　ああ、トゥアールがまた元気よく飛びかかって……。
「観束にちょっかいを出したいならお嬢様たちが元に戻ってからにしろ、不公平だろ！」
「あなたはその余計な騎士道精神の果てに行き遅れたのだと何な故ぜ理解しないのです！　私は今までずっとフィジカル怪獣の愛香さんと不公平な戦いを繰り広げてきたんですよ!!」
「すみません桜川先生……迷惑をかけてしまって……」
　ひとまず俺は、桜川先生にお礼を言った。
「何、お嬢様のためだ……気にするな。一晩中お前を悪霊から護まもっ

て、ちょっとした霊媒師気分だったぞ」

　うわぁベッドの周りをよく見ると護符の代わりにビッシリと婚こん姻いん届とどけがー。

　恐怖に負けて視線を彷徨さまよわせると、机の横の犬小屋がガタリと揺れた。

　中から頭を出したのは慧理那、ではなく――

「愛香が犬小屋にいるーーーーーーーッ!?」

　つやつやとした顔の愛香だった。

「すごく居い心地ごこちがいいの、ここ……ふふふ……」

「そうか、居心地いいか……」

　パッツンパッツンだよ……小柄な慧理那でさえギリギリのサイズの犬小屋に愛香が入ったもんだから、小屋が浮き上がってカタツムリみたいなことになってるよ……。

　その時、古びた洋館の鉄製門もん扉ぴが開くような軋きしみ音を立てて、クローゼットが開いた。

　中から頭を出したのはイースナ、ではなく――

「おはよう……ございます、わ……」

　どんよりとした笑顔の慧え理り那なだった。

「犬小屋がクローゼットに変わっただけじゃねーか!!」

「クローゼットの中……すごく、居い心地ごこちいいですわ……。観み束つか君の匂いがしますの……」

　そう言いながら慧理那が胸に抱き締めているのは……俺のトランクスだった。

　いつも脱衣所からイースナが自分のパンツと交換で持っていくせいで、けっこうな頻ひん度どで買い足しを余儀なくされている。

「いやいやいやいやいや俺のトランクス手に持って観束君の匂いとか勘弁してくれ!!」

　さらに慧理那は俺の側まで歩いてくると、トランクスを持ったまま俺の手を握った。
「朝のおトイレ……一緒に行きますわ……観束君……」
　ぎょっとして止めにかかる桜さくら川がわ先生。
「おやめくださいお嬢様！　観束と一緒にト、トイレに行くなど……奥様が知ったら何と仰おつしやるか……!!」
「え、『よくやりましたわ慧理那』一択だと思うけど……」
　ドアを振り返ると、母さんがしれっと立っていた。今朝も今朝とて神しん出しゆつ鬼き没ぼつだ。
　背後でゴトゴト鳴る音で我われに返る。足元に圧迫感を覚え、視線を落とす。
　カタツムリと化した愛あい香か──アイカタツムリが俺の足に縋すがり付いてきていた。
「クローゼットでしかそーじの匂いを感じられないなんて、まだまだ未熟ね会長……。あたしなんて、隣の家のあたしの部屋からそーじの匂いはかぎ分けられるわよ……えへえへ……」
　犬小屋に入る前から、犬並みの嗅覚を備えていたとは……。
「いつまで犬小屋ではあはあしてるんですか、愛香さん！　あなたが目の前にいるのに私に何もしてこないことに、私の身体からだ中の細胞が悲鳴を上げていますよ!!」
　懸命に愛香に呼びかけるトゥアール。好敵手の願いは、愛香に届くのだろうか……。

◇

　数か月前、フェニックスギルディはテイルブルーに止とどめを刺されかけていたスワンギルディを助け、人里離れた洞どう窟に匿かくまっ

た。
　存在の探知を妨害する装置を手渡し、修行の手ほどきまでして弟子の動向を見守っていたのだが──総そう二じとの宿命の戦いを前に別れを告げ、去っていった。
　スワンギルディは飽くなき克こつ己き心しんで一人特訓を続け、着実にアルティメギル五大修練をこなしつつあった。
　全ては、隊長ドラグギルディの遺志を継ぎ、テイルレッドとの再戦に臨のぞむため。
「……フェニックスギルディ殿は、まだ戻られないのだろうか……」
　そんなスワンギルディでも、やはり一人の時間が長いと焦しょう燥そうは募つのる。
「……今頃、スパロウギルディ様や部隊の仲間はどうしているだろう……」
　背後で草が踏まれる音に驚き、身を固くするスワンギルディ。
　陽光さんざめく木々の回廊から歩みを進めてきたのは、理知的な美を全身から匂い立たせる怜れい悧りな女性エレメリアン──マーメイドギルディだった。
「はぁ～い」
「にょ、女によ性しよう……あっ、いえ、これは！」
　陽気に挨あい拶さつをされたスワンギルディは、後ろに置いてある透明な箱を背中から覆おおい被かぶさるようにして隠した。
「いいのいいの、五大修練のスケテイル・アマ・ゾーンでしょ、私も知っているから」
　ドラグギルディも修了したという試練──通販の梱包箱が透明になるという地獄の業行。
　その名もスケテイル・アマ・ゾーン。
　しかしある意味、女性にガン見されるという恥ずかしさを味わってこ

そ、この修行は活きるというもの。
　絶望的な恥辱を全身に浴びながら、スワンギルディは精神が燃焼するのを感じていた。
「あ、あなたは……一体どうやってこの場所を知ったのです……」
「警戒しないで。私はフェニックスギルディ君の知り合いよ。ちゃんとあなたたちの取り決めや境遇は把は握あくしているから」
「そうでしたか……よかった」
　むしろ、今の自分の所在を把握するのは、フェニックスギルディづてでなければあり得ないことだ。期せずしてフェニックスギルディの安否も知れ、ほっとするスワンギルディ。
「それでね、スワンギルディ君──ちょっと、お話ししない？」
「そ、それは構いませんが、私は別の五大修練ナニイー・テモス・ヴェイルにも挑戦しておりますゆえ、会話のことごとくが滑る可能性が……」
「ぜーんぜんオッケーよ。滑るのも忘れるぐらい、とっておきのニュースがあるの」
　マーメイドギルディはどぎまぎするスワンギルディをからかうように、パーソナルスペースを縮めていった。
「これからこの世界に、とっても素敵なことが起きるわ。その時あなたは、一番会いたい人に会えるはずよ」
　会いたい人。宿敵であるテイルレッド……だろうか。
　素直に彼女の言葉に耳を傾けるスワンギルディは、知らなかった。
　つい先日まで、彼の大恩ある師匠のフェニックスギルディが、マーメイドギルディに協力させせられていたことを。そして、その理由の一端が、自身が人質とされていたためであることを。
　そして、フェニックスギルディは純粋すぎた。
　研究への協力は果たし終えたのだから、そこから先マーメイドギル

ディがスワンギルディに手を出すなど、考えもしなかったのだろう。
『……契約期間が終わったんだもの、私が誰だれに声をかけようと自由よね──フェニックスギルディ君』
　マーメイドギルディは反逆者の正義を遥はるか出し抜く邪悪で、純粋な若武者を奸かん計けいに陥おとしいれようとしていた。

　　◇

　性格が変化してしまい、初めての学校生活。
　朝の全校集会で早速、慧え理り那なはイースナの性格となったことによる試練を迎えていた。
『……全校の、皆さん。もうすぐ、冬です……』
　慧理那の声が、体育館に反響する。
　全校生徒を導くいつもの凛りんとした生徒会長の面影はなく、初めて壇上で読書感想文を発表する小学生のようにたどたどしいスピーチだ。
『制服を、脱ぎ散らかして、風か邪ぜを引かない、よう……健康には……気をつけましょう……』
　昨日、今の注意と全く真逆の脱ぎ散らかしを自分で実践してたような……。
　俺は、はらはらしながら慧理那を見守る。おかんの心境だ。
　がんばるんやで、慧理那ちゃん。
　それでも、何とか無事に終わりそうだ、と俺が胸を撫なで下ろしていると……
『……でも。健康に気をつけていても……成長できない、幼いまま……』
　唐突に話題が切り替わる。
　全校生徒が同時にぽかんとしてしまった。

『わたくしは……なぜ幼いのでしょう……。いつも、がっかり、させてしまっています……』
………………あれ、何だろう、俺を糾きゆう弾だんするかの如く、刺すような視線が四方八方から向けられているような。
気のせいだよな、スピーチをしているのは慧理那なんだから。
慧理那は登壇台に置いていたのだろう、黒くろ縁ぶち眼鏡めがねを持ち上げてそっとかけた。
『だからわたくし、眼鏡を、かけることにしましたわ……。少しでも、大人っぽく……見えるように……』
会長がんばってー、という女子の声援。
『皆さんも眼鏡をかけましょう……』
声援に応えるよう、慧理那は呼びかけた。
『眼鏡めがねを……眼鏡をかけるのですわ……』
「ああ、かけるぜ眼鏡！」
「私も眼鏡かける!!」
唐突に体育館を席せつ巻けんする眼鏡コール。
善いい沙すな闇あん子このライブで観客がしているコールみたいだ……。
俺がツインテールの結び方で心を強く持ってもらおうとしたのをヒントに、慧え理り那なはさらにイースナの眼鏡好きも率先して真ま似ねることで、心の安定を図っているのだろう。

とぼとぼと登壇台を後にする慧理那と入れ替わりで、凛りんとした足運びの女性がステージに向かう。
毅然としたツインテールは今日も麗うるわしく。
陽よう月げつ学園高等部理事長である慧理那のお母さんが、唐突にスピーチを始めた。

『婿むこ殿……慧理那が幼さを気にしていますわ……ですから、励ましてあげてくださいまし』
　っていうか、もはや初しよっ端ぱなから俺にターゲッティングされた演説だった。
『いつか必ず、このわたくしのように成長できると。今は、幼い容姿の妻、いわば幼妻として尽くせばよいのだと。婿殿はそれを愛すると……!!』
　あの人は全校生徒の前で俺に私信を送ってくるのを、いつになったら思いとどまってくれるのだろうか。
「フッ……理事長のくせにいいことを言いますね。幼さもろとも全てを愛する度量あってこそ真の男。全てを愛さずとも幼さだけを愛するのもまた真の男です」
　俺の少し後ろに並んでいるトゥアールが、理事長の言葉に共感している。
　女の子ですよねトゥアールさん。

　俺も愛あい香かも慧理那も、言葉だけでなく行動まで変化した性格の影響を受けてしまう。俺は一日中気が気じゃなかった。
　ようやく放課後になった教室で、互いの健闘を讃たたえるように俺と愛香は向き合って座る。
「ずっと腕を抑えておくのはしんどいな……いっそ両腕に骨折治療のギブスでもつけたいぐらいだ」
　特に、トゥアールが授業中でもチラチラと俺の席を振り返り、胸を強調するようなポーズをしてくるのだ。修行でもさせているつもりなのだろうか。
「何とか、何とかクラスの皆さんに総そう二じ様が私の胸を触るとこを見てもらえれば、私の勝ちです……蛮族が無力化しているこの瞬間に私

の全てを懸けなければ……!!」
　そして今も、トゥアールは何かを狙っているかのように目を爛らん々らんと輝かせている。
　愛香は放課後になって緊張の糸が切れたのか、徐々に息を荒らげ始めた。
　まだ早い、ツインテール部部室に行くまで耐えるんだ。
「そんなに心配しないで、あたしはドＭになんか絶対に負けないから……はあはあ」
　愛あい香かの中でドＭの精神が、どんどん馴な染じんでいっているようだ……。
「う、だ、駄目よ、学校じゃ絶対に駄目……そーじ以外には……見せないんだから……!!」
　自分を鼓舞するように小声で何か呟つぶやいている愛香。きっと、脱衣を我慢しているのだろう。
　お互い頑張ろう愛香、俺も女子の胸を触ろうとする腕を必死に抑えているから──!!
　……俺たち、もしかして薄氷の上で学校生活送ってるんじゃないのか。
「じゃあ、そろそろ帰りましょ、ご主人様──あ」
　愛香はまるで先生をうっかり「お母さん」と呼んでしまった小学生のようないたたまれなさで縮こまってしまう。
　まあ放課後だし、喧けん騒そうに紛まぎれて誰だれにも聞こえていないだろう──と思いきや。
「愛香愛香愛香っ!?」
　きゃー、という歓声を上げ、クラスの女子が殺到。俺と愛香を円状に取り囲む。
「ちょっとー、どうしちゃったの急にー！」

　ツッコミ力が絶無になってしまった愛香の肩を、遠慮なく手の平でぺしぺし叩たたく女子たち。
　さらには、俺の肩にもそのスイングハンドは向けられた。
「……愛香、不器用だけどいい子なの……知ってるよね？」
「え、あ、ああ……もちろん」
「追いつめられちゃって無理にこんなエロキャラしてるだけなの！　でもね、愛香が極端なことしだすのって、観み束つか君の責任でもあると思うの!!」
「お……俺の……!?」
　何を求められているのかよくわからないが……一つだけ言えるのは、俺の近くに来た女子がけっこう胸が大きくて、それを掴つかもうと俺の腕がプルップルしているということだ。薄氷に亀裂が入っているのだ。
　こんな時こそ俺！　心のツインテールを掴んで耐えるんだ!!　修行の成果だ!!
「そういや俺、この前の日曜にビッグサイトに行ったんだけど、そこでエレメリアン見たんだよ……何もしないでいなくなったみたいだけどさ。セミみたいなのと、蚊みたいなのと……」
　クラスの男子が得意げに話しているのが聞こえてくる。
　ああああ……きっと冗談半分の話だろうけど、エレメリアンと聞くと破壊衝動が！
　破壊衝動を抑えるのに必死になると──腕を抑えきれず、明後日の方にぶっ飛んでいく!!
「察知……！　はいキャッチ！　そしてタッチ！　胸に設置！　いや～んエッチ♪」
　トゥアールの軽快なラップともに、途方も無い柔らかさが右手を包む。
　あわや近くにいたクラスの女子の胸を触ろうと跳ね上がった俺の手

は、トゥアールにがっちりとキャッチされ、その胸に彼女が言うところの〝設置〟をされてしまった。
　ありがたいけど、そのまま押さえててくれれば大丈夫なのに……何で自分の胸に!?
「やった、やりました！　蛮族が無力化している間に、クラスの皆さんの前でパイタッチというライトな既成事実を作りましたー!!」
　嬉うれしそうに笑って左腕でガッツポーズをするトゥアール。
　クラスの面々は、あ、うん……という感じで一様に頷うなずいた。
「あれっ、想像だにしないサイレント……もしかしてライトすぎました!?」
　助けられたとはいえ、このままみんなの前でトゥアールの胸を触り続けるわけにはいかない。咄とつ嗟さに立ち上がった俺だが、その腕は横から別の手によって掴つかまれた。
「……よく考えたら、巨乳に、怒っているのに……巨乳に触ったら、逆効果……ですわ……」
　ストーカーの神出鬼没性能をいかんなく発揮して現れたのは、慧え理り那なだった。
　その目がブラックホールのような黒さでぐるんぐるん渦を巻いている。
「観み束つか君は、わたくしの胸を……触れば、いいのですわ……そして安らげですわ……」
　トゥアールは慧理那の出現に気を取られ、腕の力を緩めた。その隙すきに俺の腕を取ると──なんと、今度は慧理那が自分の胸に俺の手の平を押しつけてしまった。
　おおおおおおおお……という男子の歓声。いや、何か悲鳴も交ざってる。
「観束君！　愛香の方にしなよ、愛香の胸の方が絶対会長よりも小ちっ

ちゃいよ!?」
　こっちの水は甘いぞとばかりに、友人である愛香の胸を俺に差し出そうとする女子たち。
「えっ、なんでクラスの皆さん、総そう二じ様が私の胸を触った時にはノーリアクションだったのに、慧理那さんの時にはそんな学園ラブコメじみたリアクションを!?　私と慧理那さんのヒロイン力の差って何ですか!?　お嬢様言葉にすればいいんですの!?」
　白衣の袖そでを噛かんで悔しがるトゥアールが、言葉とは裏腹に胸を俺に近づけてくる。
　慧理那とトゥアールから離れようとした俺は、後あと退ずさって椅い子すにぶつかり、勢いよく座り込んでしまった。この椅子、やけに温ぬくいような……？
「ぎゅむ……う、うふふふ……こ、こんにちは……椅子です……」
「うわああああああああああ椅子だと思ったら愛香だああああああああああああああ!!」
　四つん這ばいで、俺が座り込むようなベストポジションにスタンバイしていた愛香。
　椅子に転生したことに歓喜した愛香が、とろけた目で見てくるこの非日常よ。
　女子たちはヒャッハー、と獰どう猛もうなエールで愛香を讃たたえている。
　……このまま学校にいたら、状況はどんどん悪化していくに違いない。
　俺は、今日の放課後はツインテール部にも寄らずに直帰することを決意した。

◇

男性客が多いうちの喫茶店なら、巨乳を回避できる。そう考えて帰宅後すぐに喫茶店に逃げ込んだものの、数分と経たたずに愛あい香かとトゥアールが追いついてきてしまった。

説明しておけばよかったかな……いや、トゥアールは自分の胸を触らせる自己犠牲で俺が快復に向かうと信じているフシがあるようなので、それでも駄目か。

桜さくら川がわ先生は放課後、理事長室に向かうそうだ。慧え理り那なと理事長が親娘で大切な話をし終わってから、こちらに向かうと。話は多分、全校集会でのことだろう。

「ああ、この席で、あたし……そーじに足、揉もまれた……」

愛香がただならぬドＭ表情をしているのを、固かた唾ずを呑のんで見守るお客さんたち。

客入りがよくても何な故ぜか空あけてもらっている俺たちの定位置、店の最奥のボックス席。

俺はそこで、トゥアールから詰問を受けていた。

「総そう二じ様は……どうして私を頼ってくれないんですか!?　私たち、仲間でしょう!?」

ウインクをしながら、ピッと人差し指を立てるトゥアール。心が温かくなる。

「ゲヘヘヘヘヘヘヘヘやばいですね、こういう時こしゃくに突っ込んでくる愛香さんは腑ふ抜ぬけのドＭ……もはや私の欲望を遮さえぎる者は誰だれもいません……!!」

合間合間に、こうしてあえて剽ひよう軽きんに振る舞ってまで俺のことを……すまないトゥアール。

「だから、私のおっぱいならいくらでも掴つかんでください！　私は全然構いません!!」

　髭ひげのダンディなおじさん、季節が追いついてきた年中トレンチコートの人、ロマンスグレーの紳士──店内中のお客さんたちが、ほほう、と余裕の表情で俺たちを見てくる。
　何故トゥアールは、店中のお客さんに聞こえるような大声で言うんだ!?
　視線から逃げるように店内設置のテレビへ目を向けると、夕方前の情報バラエティー番組で早速昨日のツインテイルズの身に起きた異変が特集されていた。
　映っているのはほぼ、青くなってしまったテイルレッドだけだが……。
『青いテイルレッドも可か愛わいい、という結論に揺るぎはないですが、何故青なのでしょう？　黄色や黒に比べて、突出して悪印象の色ですが──』
『それをあえてテイルレッドが浄化しよう、という慈愛かもしれません』
　愛香がドＭになっていなかったら、テレビが破壊されていたかもしれない。
　エレメリアンの攻撃で青くされた、という流れにはなっていない。やはり、俺たちの苦戦は番組では伏せておきたいのだろうか……。
『元は青だった自球団のユニフォームの色を、テイルブルーへの世論を鑑かんがみて変更していた球団ですが、今回青に戻すチャンスだと喜びのコメントを表明しており……』
　コメンテーターの話を聞いてると、テイルブルーの印象が悪すぎて、これまで世界規模で青色を避けている向きがあったようだ。
　色々なところで無理が祟たたっていたそれを、今回元に戻すチャンスだと。
　テイルレッドが色替えをしただけで、経済効果は数十億円にも上ると

試算されていた。
「こうして経済は回っていくんですね……」
　しみじみと語るトゥアール。
　平和なのはいいことだけど、俺たちは今かなりピンチなんだよなあ……。
「あ、総そうくん。もう帰ってたの？」
　ドアベルの音が店内に響く。大人びた女性。愛あい香かの姉、恋れん香かさんが入店してきた。
「こんにちは、恋香さん──」
　挨あい拶さつした瞬間、俺の視界に映ったのは、歩み寄ってくる恋香さんの弾む胸。
「ふふ、どうしたの、総くんも愛香も、今日はすごく疲れてるみたい」
　俺たちを気にかけてくれた恋香さんに、恩を仇あだで返すかのように──。
　俺は、恋香さんの胸を両手で掴つかんでしまっていた。
　トゥアールの胸とはまた少し違う、ふんわりとした感触が手の平に広がる。
「あら」
　のほほんとした声で、俺の手を振り払おうともしない恋香さん。
「ご、ごめんなさい……！」
　力尽くでずらそうとした俺の手に、恋香さんがそっと自分の手の平を重ねた。
「うふふ、どうしたの総くん？　興味あるの？　私はいいけど、愛香には内緒ね？」
　目の前に愛香がいるのに、俺に堂々と内緒事を取り付ける恋香さん。
「今日、腕の筋肉が痙けい攣れんしてて……腕が勝手に跳ね上がっちゃうんです!!」

苦しい言い訳だが、恋香さんは全然気にしていない。ここで怒ってくれないと、俺は罪の意識で灰になってしまいそうなんだ……！

「その手をお離しなさい恋香さん！　総そう二じ様の腕に安らぎを与えるのは私の役目です!!」

怒り心頭といった面おも持もちで恋香さんに食ってかかるトゥアール。

「腕が痙攣してるんだったら、柔らかい物に触れていた方が緊張も解けるわ」

「いえいえですからそれが私の役目なんです！　私の方が大きくて柔らかいので、恋香さんは無理しなくていいんですよ!?」

「無理なんてしてないわよ、総くんは家族みたいなものだもの。でも、こんなところは愛香には見せないようにしないとね」

目の前に愛香がいるのに、愛香に見せまいと努力しているらしい恋香さん。

こんなに華きや奢しやな恋香さんの手で押さえられているだけで、万力で締められているように感じる。俺もかなり力を入れているのに、ビクともしない。

……いや、俺が弱ってるからなんだろうけど。

またまた店内のお客さんの視線を感じ、俺はいたたまれなくなる。

ダンディなおじさんは、そんな俺の心境を見透かしたようにフォローしてきた。

「ははは、本気で胸を触っていないことぐらいわかるよ。何せ君には、ラブコメハプニングに巻き込まれているオーラを感じるからね！」

くそお変なトコで人生経験豊富な大人だなあこの人たちは!!

「まあ、そのハプニングを楽しみたまえ！」

……本気で触ってないことはわかる……。

そこまでわかる人が、別人格が憑ひよう依いしているとまでは推察し

ないんだな。

　この人たちだって、ある意味色んな人格を演じてるようなものなのになあ。

「……演じる……」

　推察も何も、案外普通のことなのかもしれない。何も敵の能力で性格を移し替えられなくても、人間は色々な性格を演じることがある。

　そうだ。惑わされずに見極めて、心のツインテールを手た繰ぐり寄せるんだ。

　　◇

　学校や喫茶店で俺たちがてんやわんやになっている時、アイドル活動をしているイースナもまた、ピンチに陥っていたらしい。

　俺たちの中でも変化した性格が安定していると思われていたイースナ──善いい沙すな闇あん子こだが、デュエット相手のアイドルのツインテールに飛びかかってしまったのだという。

　そこはやはり、俺の、観み束つか総そう二じの人格の業か───。

　しかも言い訳ご無用の生放送。

　アイドルに抱きつきながらそのツインテールを夢中でいじり続けた善沙闇子は、番組が強制ＣＭで緊急回避するという憂き目に遭ってしまったとのことだ。

　今こうして、イースナは地下基地のコンソールルームで頭を抱かかえていた。

「やってしまったのじゃぜ……！　しかもわらわに抱きつかれたアイドル、心なしか目が潤うるんでおった！　今後もあやつと共演したら、わらわの貞操が危険な気がするのじゃぜ！」

「ウ、ウチが何とかフォローはしといたから、な……？　イースナちゃ

ん」
　スポンサーや局を怒らせてしまったと悩んでいるかと思えば、アイドルの態度が妙だったことの方をを気にかけているらしい。
「悠ゆう長ちようなことを言ってはおれん……一刻も早くカメレオギルディを倒さなければ!!」
　そのとおり。俺たちもイースナ同様、ほぼ全員頭を抱えるような一日だった。
　昨日トゥアールによって先送りにされかけた、打倒カメレオギルディの決意を新たにするには十分すぎるほどに。
「ああ、それは俺も強く同意だ……。とにかく巨乳への憎しみは、ツインテールへの愛で封じ込める……！　次にカメレオギルディが現れたら、何としても倒してみせるさ」
「何でそこで超人的な精神力で克服しようとしてしまうんですか総二様!?　見てください愛あい香かさんを、日常生活にデメリット無しと判断してドＭをエンジョイしていますよ!!」
「唐突に女の子の胸を触ろうとする人格なんて、克服しなきゃ生活していけないだろ!?」
　普段そんなに話したこともないクラスの女子の胸まで触りそうになったんだ、このままじゃ社会的に抹殺されてしまう……！
「今なら貧乳の性格のせいにして女の子のおっぱい触りたい放題なのに、さすがは総そう二じじゃぜ！　わらわなら遠慮なく触るぞ!!」
　そりゃイースナは女の子だからな……できればこの衝動だけさらにもらって欲しい……。
「エ、エンジョイしてないわよ……ドＭを続けると、頭がぽわぽわしてくるし……！」
「わたくしも、ですわ……。すとーかーさんを頑張っていると、異様に眠くて……」

愛あい香かと慧え理り那なが、睡魔と戦っている。
気を張り詰めると身体からだを動かすよりも疲労することはままあるが……普段の性格との差異が激しい二人は、やはり〝気疲れ〟も相当なのだろう。
「気をつけてください二人とも、起きていないとイースナがツインテールを狙って抱きついてきますよ」
「総二の人格を持っているわらわが、ツインテールを求めなければむしろ総二に失礼じゃろう！　二人とも喜んで触らせるがよいぞ!!」
「開き直りましたね。ビッチの最終形態〝誰だれでもいい〟に覚かく醒せいしたイースナ!!」
うわあ、と身を守るように後あと退ずさるトゥアールに、イースナは──
「安心しろ！　トゥアールの髪には、何も感じんのじゃぜ！」

陽気に言い終えた瞬間だった。
イースナは息を呑のみ──少年のように無邪気に破は顔がんしていた表情を、見る見る曇らせていった。
やおら平手を振り上げると、自分で自分の頬ほおをはたくイースナ。
「んがっ……！」
一度では足りないと二度叩たたき、それでも足りないと三度叩き。
俺が止めようとすると、イースナはトゥアールの両腕を掴つかみ、縋すがり付くようにして詫わびた。
「……すまぬ！　トゥアール……このとおりじゃぜ！　愉快な雰囲気に呑まれて失言を!!」
「な、ちょ、イースナ……」
当のトゥアールはそこまで気にしていないようだが、イースナは自分の言葉を重く受け止めすぎている。

「わらわはやはり総二の偽者じゃ……！　総二は違う！　絶対にあんなことを言ったりせんのじゃぜ!!」
　もがけばもがくほど沈んでいく底無し沼のように、言葉を発するごとに冷静さを失っていくイースナ。
「……総そう二じはっ……トゥアールのこと……こんなふうに思ったりしないからっ……」
　過剰なまでに暑苦しい口調を強しいられてきたイースナが……悲しみのあまり、素すの人格を顕在化させ始めた。
「…………ごめんなさい……」
　瞳ひとみを潤うるませ、唇くちびるを噛かみしめるイースナ。
「────まったく……」
　トゥアールはイースナの頭を胸に抱き寄せ、多少乱暴に撫なで擦さすった。
「…………子供のあなたが、いちいちそんな気遣いをする必要はありません」
　トゥアールの胸の中でしゃくり上げるイースナ。
　俺も、桜さくら川がわ先生も、メガ・ネも、母さんも。船を漕こいでいた愛あい香かや慧え理り那なも、あえて眠いふりを続けながら、そっと二人を見守った。
　落ち着いてきたイースナは、涙を誤ご魔ま化かすようにトゥアールを茶化す。
「……トゥアールから見て、わらわが子供だということは認め──」
「年下だから子供でしょう！　私一五歳あなた一二歳！　三歳年下!!」
　機関銃のように捲まくし立てると、トゥアールはわざとらしく咳せき払いをした。
「あなたには総二様の性格が憑ひよう依いしているから、ちょっと優しくしてあげただけです!!」

　そのちょっとの優しさが──いつも、俺たちみんなを救ってくれているんだ、トゥアール。
　そして、だからこそイースナも、こんなに優しい子になったんだ。
「────うん……」
　イースナは安心しきったように意識を手放し、眠りに落ちてしまった。慌あわててメガ・ネに支えられ、椅い子すに座らされる。
「改変された性格に真っ向から逆らったので、精神が極限まで疲ひ弊へいしてしまったんでしょう……」
　慈愛に溢あふれる笑顔を浮かべるトゥアール。
「トゥアールを傷つけたかもしれないって悲しむことができるのは……イースナの心が強い証拠だ」
　人格の変化──確かに恐ろしい能力だ。見知らぬ者同士だったら、とうに精神が破綻していたかもしれない。
　けど俺たちは、深い絆きずなで結ばれた仲間だ。お互いの性格をよく知っているから、自分以外の性格に上書きされても錯さく乱らんはしなかったんだな。
　俺も力の限り戦うんだ。エレメリアンへの攻撃衝動とも、巨乳への憎しみとも。
　カメレオギルディとの再戦について俺が意見しようとした時──
　狙い澄ましたかのようなタイミングで、エレメリアン出現のアラートが鳴り響いた。
「カメレオギルディの反応です……意外に早かったですね」
　情報をモニターに表示するトゥアール。俺は拳こぶしで手の平を叩たたいて気合いを入れた。
「よし……決着を着けてやる！　愛あい香か、慧え理り那な！　活路が見み出いだせたぞ!!」

「え？」
「別にこのままで、いいですわ……」

　愛香と慧理那は、別の性格と共生を始めていた。
「抵抗する気ゼロじゃねえかあああああああああああああああああああ!!」
　いやそもそも、この二人は初めから精神的疲労の度合いが俺たちとは段違いだった。
　今回は、休んでいてもらおう。
「お一人で大丈夫ですか、総そう二じ様」
「大丈夫。イースナが教えてくれた……俺たちは、心への侵略を心の力で打ち勝つことができるってな……!!」
　不安げに尋ねるトゥアールへ向け、俺は確信に拳を握り締める。
「いいの？　トゥアールちゃん。カメレオギルディは倒したくないんじゃなかった？」
　悪戯いたずらっぽく問いかける母さん。
「ま、まあ……イースナのマジ泣きで萎なえちゃいましたし……いつもどおり、私の方からおっぱい触ってもらえばいいだけの話ですから。……愛香さんと戦いながら」
「ふふ、トゥアールちゃんのそういうとこ、大好きよ！」
　トゥアールはストレートな賞賛に照れ、メガ・ネに指示を出す。
「今回はメガ・ネさんも基地に待機してください」
「けど、総二君をサポートできるのは今、ウチしかおらへんで!?」
「念のためです。カメレオギルディにも戦力を補ほ填てんする時間はありました、今度は銀髪属性シルバーヘアーなどを追加してきていたら、メガ・ネさんも標的になってしまうかもしれません」
　自身も銀髪であるトゥアールが言うと説得力がある。

確かに現存する髪の色の数だけ強化できるなら、それこそ七色にも十色にもなる可能性はある。

ただ、用心もあるだろうが……メガ・ネには今イースナの傍そばにいてあげて欲しいという、トゥアールの優しさだと思うけどな。

「メガ・ネ。俺がかなりやばいって感じたら、その時は遠慮なく助けを呼ぶから、加勢に来てくれると助かる」

「わかった、任せといて！」

応援要請をメガ・ネにしっかりと頼み、俺は変身した。

「テイルオン!!」

ギアの色も、力の弱々しさもそのままだが、今の俺は体の色と裏腹に燃えている。

〝青い俺のツインテール〟は少しだけ名残惜しいが……今日でお別れだ。

◇

強大な力を持つ幹部エレメリアンがあえて人里離れた山林などに出現したりするのは、人間を大きな戦いに巻き込んで命を奪ったりしないようにだという。

カメレオギルディもまた今回、鮮やかな色の髪の毛の人なんて影も形もない、朽ち果てた工場跡に出現した。こいつにとって、この戦いが決着戦なんだ。

しかし、俺が一人で出撃してきたことは、こいつにとっても予想外だったようだ。

「……これは驚いた。まさか、お前一人でやって来るとはな……テイルレッド」

「それだけ俺たちは、お前の能力にしてやられたってことだよ」

　早くも俺の胸の中で鎌かま首くびをもたげる、エレメリアンへの攻撃衝動──だが、これに身を任せてはいけない。たとえ、〝貧乳〟と罵ば倒とうされようともだ。
「だが、勝算があるから一人で来たのであろう？」
「そんな大層なもんじゃねえよ。要するに、気合いで何とかするんだッ!!」
　俺の考え無しな宣言を聞き、カメレオギルディは豪笑した。しかし、まるでその笑いで治りきっていない傷が開いたかのように、前回の戦闘時のように苦しみ喘あえぐ。
「はあはあ、はあ……ぐううう……ま、まだだ……！　まだ散れん……!!」
　こいつが戦士の勲章と称していた苦しみは、やはり──。
「やっぱりお前、身体からだがブッ壊れるような無茶な強化をしてたんだな！」
「闘争への心が折れた時点で、この生命は一度潰ついえたようなもの……こうして身体に鞭むち打つことでお前と相まみえることができたのだ、何の憂いがあろうか!!」
　俺はフォースリヴォンに触れ、刀身に蒼あおいラインの走るブレイザーブレイドを引き抜いた。
「一度潰えた生命を取り戻したのに、今度は生き急いでどうするんだ!!」
「だ、黙れ！　お前たちに私の……いや、私たちの〝本当の〟苦しみがわかるか!!」
　カメレオギルディは丸めた尻しつ尾ぽを限界まで引き延ばし、俺の脳天目掛けて振り下ろす。
　すんでのところで回避し、尻尾を打ちつけられたアスファルトが砕ける。

舞い上がった粉ふん塵じんの向こうで、カメレオギルディは慟どう哭こくしていた。
「私はドラグギルディ部隊の戦士！　本来ならば、我われこそはとこぞって出撃した同志たちに続き、とうの昔にお前たちと戦っていたはずなのだ!!」
イースナがこの世界での最古参の戦士だろうと言っていたから、多分そうじゃないかと思ってはいたが……やはりこいつは、俺たちの世界に初めて侵攻して来たアルティメギル・ドラグギルディ部隊の戦士だったのか。
「しかしテイルレッド……お前のあまりの強さ美しさに、想定外の早さで我われらが御大将が出撃され……そして……そして……!!」
癇かん癪しゃくを起こすように何度も何度も振り下ろされる尻しっ尾ぽ。攻撃は回避しながらも、俺はカメレオギルディの窮きゅう愁しゅうだけは逃げずに受け止めた。
「その後は！　増援される強戦士たちをただ見送ることしかできぬ日々だった……!!」
『強さのインフレに取り残されたというわけですね……』
黙って俺たちの会話を聞いていたトゥアールが、通信越しで憐あわれむように呟つぶやく。
「私はただ、胸を張って仲間と語り合いたかったのだ……様々な髪の色の良さを！」
自じ嘲ちょうしながら攻撃を繰り出すカメレオギルディ。その間にも主張は続く。
「青髪はミステリアス……底の知れぬ謎なぞの美少女！」
トゥアールがその主張に補足をするように俺に通信してくる。
『ツインテイルズの青髪は言わずと知れた地球最蛮の獣けものですが……』

「黒髪は知的で活動的な才女！」
『引きこもりのストーカーですが……』
「金髪はプライドが高く、それでいてどこか寂しがり屋……‼」
『脱ぎたがるドＭさんですけど……』
　カメレオギルディには届かぬトゥアールのツッコミが、俺にだけ空しく響く。
「……それは血液型ならぬ、髪型での性格分析かっ⁉」
　問いかけながら、俺は剣を振るった。俺はツインテールから感情を察することができるが、髪の色で性格を想像するのも趣があるな……！
「そのようなものだ。私たちの語らいで生まれたイメージと、お前たちツインテイルズの性格は違っていて……それがまた面白かった」
　尻尾とブレイザーブレイドを打ち合わせ、俺たちは間合いを取った。
「しかし一番いいのは赤髪だ。赤は元気の象徴だ、心を高揚させる情熱の色だ、と……私はいつもそう締しめたものだ」
『それだけはレッドたんと合致しますね！』
　いいのか悪いのか……型通りの普通な性格ってことか、俺は。
「だが属性の素晴らしさを語り合うほどの士気も、今の私たちの部隊からは失われてしまった……。私は混成部隊最古参の戦士として、何としてもそれを取り戻したかった‼」
　自分たちの苦しみがわかるか、って言ったな……カメレオギルディ。ああ、いつだってそうだ、俺たちは完全にはわかり合えない……でも、俺の方から歩み寄ることはできる。
「夢も、希望も、大いに仲間と語り合えばいいさ！　だけどそれを人間に押しつけたり、まして奪ったりするのなら、俺たちは守るためにお前たちと戦うまでだ‼」
「□□□□□□！」
「ツインテールの色は、かけがえのない俺たちの魂たましいの色い彩ろ

だ！　取り戻してみせるぞ、お前を倒してな!!」
「……本来ならば恨み事をぶつけるべき私に、堂々たる宣戦布告！　テイルブルーの蛮性に侵されながらもなお気け高だかきその心、深く感じ入った！」
　……そういうお前も、やっぱりドラグギルディ部隊の戦士なんだな。隊長あいつも、同じことを言っていたよ。
　人間からの恨みや憎しみは受け慣れたって強がっていても、本当は心を痛めている……そんなお前たちだからこそ、俺も正しい心で戦うことができるんだ。
「テイルレッドよ……正直に、ありのままにこの胸の裡うちを明かしてよいか!!」
「な、何だよ」
「自分で変えておいて何だが……やはり赤い髪のお前の方が可か愛わいい!!」
　ありのまま過ぎる懺悔ざんげとともに、渾こん身しんの拳撃を繰り出してくるカメレオギルディ。
「俺もやっぱ落ち着かねえよ……。青いツインテールは新鮮だけど、気分転換に髪を染めたりするような洒しや落れっ気なんて、俺にはないしな……!!」
　胸中を吐き出し終えたカメレオギルディは、晴れやかな表情で宣言した。
「ゆくぞテイルレッド！　もはやお前を不調の戦士とは思わん、全力で倒させてもらう!!」
「こっちの台詞せりふだ！　そこまで言うなら、もう具合悪いアピールするんじゃねえぞ！」
「応おうとも!!」
　カメレオギルディの舌が伸び、空気を破裂させて唸うなりを上げる。

「はっ……かあぁーーーーっ!!」
「くっ……！」
　それは、槌つちのような重量感を伴って繰り出される鞭むち。
　変幻自在に乱れ飛ぶ舌を、かろうじてブレイザーブレイドで弾き飛ばす。
　しかしこの手の痺しびれ……腕力は大幅に低下している。防戦一辺倒は危険だ。
「！　しまったっ……！」
　防御の間かん隙げきを縫ぬい、カメレオギルディの舌が手首に巻き付いた。
　激しい締め付けに、俺はついにブレイザーブレイドを取り落としてしまう。
『ーーーーーーー気をつけてください総そう二じ様！　そのまま舌がにゅるにゅるーとその小ちいちゃなボディに這はいよってくるかもしれません！　……ええと愛あい香かさんも同じことを言っています！　慧え理り那なさんは羨うらやましがるはずなのに……！』
　よくわからないが、仲間に心配をかけてしまっているようだ。
　舌を強引に振り解ほどこうとした俺の脳天から足の先までを、凄すさまじい衝撃が突き抜けていく。
「ぐっ……ああああ……!!」
　カメレオギルディの身体からだから雷が迸ほとばしり、それが舌を伝わって俺に叩たたきつけられているのだ。
「金髪属性ゴールドヘアーの力で我わが裡うちに現れた力だ……とくと味わえ、テイルレッド!!」
「ぐぅうううっ……!!」
　密着状態から電撃……こいつ、イエローの奥の手みたいな攻撃を！
　駄目だ、臆おくするな……！

俺は様々な戦いを乗り越えてきた。本来の力を出せない時にどう戦い抜いたか、思い出すんだ……!!
「□□□□□□!!」
追いつめられたことで天てん啓けいのように脳裏を疾はしる、戦闘経験の一端。
そうだ……この前の戦闘でツインテイルブレスを出せなかったことで、俺は全ての強化ができないと思い込んでしまっていた。けど──試す価値はある！
俺は突き出した手の平に、ツインテールへの思いを集中させた。
霧の彼方かなたに溶けていきそうな不確かなイメージを、手の平に幾重にも重ねる──!!
「プログレスッ！　バレッターーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
俺の叫びとともに手の平に光が収束し、菱ひし形がたのバレッタが発現した。
出せた……！　俺の最初の進化装備エヴォルブアームズ！
プログレスバレッターをブーメラン形態……スラッシュモードにして投とう擲てきする。
勢いを増して旋回してきたプログレスバレッターは、見事カメレオギルディの舌を跳ね飛ばし、俺は拘束を脱した。
受け止めたバレッターを即座に分割し、両のフォースリヴォンに合体させる。
肩から胸、背中──腕へ。
加積されていく装甲が青いのは──俺が、青のツインテールをこの手に掴つかんだ証あかし。
「……できたぞ……!!」
テイルレッド・ブルーライザーチェイン。
展開した肩の追加装甲から、放熱するように蒼あおの粒子が噴き散

る。
　舌を格納しながら、驚きよう愕がくに目を見開くカメレオギルディ。
「か、可能なのか、その姿で……強化が!!」
　しかし、すぐに冷静さを取り戻し──
「フッ……胸に装甲を重ねたのは、そのプリティーな貧乳を隠すためか！　何ともいじましい！　だがどれだけ虚飾の殻で守ろうとも、その本質はキュートな貧乳よ!!」
　冷静な作戦行動として俺に貧乳と口走るカメレオギルディ。
　エレメリアンへの破壊衝動が……地球上のあらゆる巨乳を滅ぼさんという憎悪が湧き立つ……。その衝動に逆らうことで、俺の全身を激しい倦けん怠たい感が襲おそう。
「お前は思い違いをしてるぜ、カメレオギルディ……。確かに俺たちは、ツインテールの色とともに心を変化されて自分のツインテールを見失い、愛が、力が激減してしまった……！」
「ツインテールを見失うのは当然……愛とは見えにくきもの。現し難きもの。人格が他者のものに塗り込められれば、真っ先に封殺されるが必定！　私の能力を破る術すべはない!!」
　自信満々に自らの成果を誇るカメレオギルディ。
「けど！　ツインテールへの愛が見えないなら──探して、掴つかめばいい!!」
　ライザーチェインの変身限界時間をツインテールで打刻カウントしながら、俺は叫ぶ。
「むう……何事か、そのミステリアスなツインテールは!?」
「確かに愛は見えない……けれど俺は知っている！　仲間たちのツインテールへの愛を！　エレメリアンを倒したがって、巨乳を憎んで……それ以上に、ブルーがツインテールを深く愛していることを、俺は知っている!!」

　ツインテールの色を交換されたことで、根付いたブルーの性格……破壊衝動や憎しみの他に、ツインテールへの愛も確かにあるはず……それを手た繰ぐり寄せればいい!!

「俺はこの数日、存在しないツインテールをこの手に掴む特訓をしてきた。まだ完成にはほど遠いが、そのおかげで見えないツインテールへの愛を僅わずかに掴むことができたんだ!!」

「存在しないツインテールを手に掴むだと!?　テイルレッドよ……お、お前はどこまで行くつもりなのだ!!」

「さあな――それは、この俺自身にもわからないぜ!!」

『愛あい香かさんが健在だったら、「いばって言うな」……とツッコミ入れるところでしょう……。可か哀わい想そうですから私が一応代弁しておいて……』

『ああっ……そーじが……ご主人様が、あたしの愛を知ってるって……何だったら愛してるって言ってるようなものよね、あれ……えへえへ……』

『ってやめ、発情しないでください愛香さんコンソールによだれがーーーーーーーーーっ!!』

　トゥアールの通信に激励を受け、俺は小声で感謝の言葉を送った。

「トゥアールは身体からだを張って俺に教えてくれたんだな。お前が掴むのは女の子の胸じゃない、ツインテールだろう、って！」

『えっ、おっぱい掴んでくれなきゃ困―』

　カメレオギルディが突進してくる。通信を一旦打ち切ると、俺は刀身のラインが青くなったブレイザーブレイドツインを手にした。

「だが、基もとが弱体化しているのは変わらん！　しかもその強化、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士を倒せるほどの力を持つ形態すがたではあるまい！　ならば恐るるに足らん……ここからが本当の勝負だ!!」

「俺たちがお前を一般兵だと侮あなどったように……お前もまた、俺のこの強化形態すがたを侮ってるみたいだな！」
　ティラノギルディに俺のツインテール属性を奪われ、補助電源的にブレスの属性力エレメーラを行使して戦った時も、ライザーチェインとフォーラーチェインは稼働してくれた。
　限られたツインテール属性の力を一極集中でテイルギアに流動させて強化を促うながす分、この二形態は現存する属性力エレメーラをフル活用し、先鋭化させることに極めて長けている。
　究極の形態アルティメットチェインに到達した今も、変わらず頼もしい戦力として俺を助けてくれるんだ!!
「何のおおおおっ！」
　カメレオギルディが咆ほう哮こうすると、突とつ如じよとして全身がその場からかき消えてしまう。
「……これは、透明化能力か……！」
　俺が理解した直後、肩部装甲から火花が上がった。
　不可視の攻撃を前に俺は再びの防戦を強しいられ、全身の装甲から夥おびただしい火花が乱れ重なる。
　ライザーチェインの最大の弱点は、攻撃力との引き替えによる防御力の著しい低下だ。これ以上ダメージを受けるわけにはいかない。
「だったら俺も、見えなくなるまでだ!!」
　プログレスバレッターを取り外し、ツインテールを素早く下結びにチェンジする。
　──テイルレッド・ブルーフォーラーチェイン!!
「むうっ……!?」
　カメレオギルディの焦りが、空間のいずこからか響きわたる。
　奴やつが透明化して俺に視認させないのなら、俺は超高速飛翔で奴に決して捕捉させない。

周囲をがむしゃらに飛び続ける俺は、二度、三度とカメレオギルディに斬撃を浴びせていく。さらに腰部の全方位斬撃装備サテライトソード、ブレイザーセイバーも駄目押しで射出した。

「飛べ、セイバーーーーーーッ!!」

無軌道に乱れ飛ぶ高速刃は、俺の斬撃に追随する。

フォーラーチェインでの超速機動時は本来、過剰放射されたツインテール属性が紅あかく煌きらめき、視界が朱に染まるのだが──今は、透き通った水面みなものように蒼あおく輝いている。

不思議な気分だ。漣さざなみ一つない湖面を映し鏡に、ツインテールを見ているような──。

「ぐはっ……さ、さすがだテイルレッド……！」

カメレオギルディの声だけが聞こえる。ブレイザーセイバーが幾度と直撃したことで、奴やつの周りが陽炎かげろうのように揺らめいていた。透明だが、周囲と同化できていない───捉えた!!

「それはこっちの台詞せりふだぜ……！　胸をそびやかしてやって来たエリートたちよりも、お前にはよほど難戦を強しいられた──そして、教えられた！」

最大加速の飛翔でカメレオギルディの周囲を旋回した軌跡が、蒼き炎のオーラピラーを出現させる。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

ブレイザーブレイドツインを空に放り、ブルーライザーチェインへと結び替えチエンジする。

再びブレイドを握り締めると、背負ったバックパックがスライドし、猛然と炎を噴き上げた。

最終噴射フアイナルブーストからの渾こん身しんの一斬を、大上段に振りかざす。

「ライジングブレイザーーーーーーーーーーーーーッ!!」

　蒼あおき斬撃を受けたカメレオギルディが、決着の火柱に包まれる。
　俺はブルーライザーチェインを解除し、青のツインテールをそっと手に掬すくい取った。
『お見事です！　青き炎の頂上斬撃、いわばライジングブレイザー・ブルーコロナ！』
　弾んだ声で通信してきたトゥアールは……直後、僅わずかに声を震ふるわせた。
『……ツインテールに変調をきたしても戦い抜く……やっぱり総そう二じ様はすごいです……』
　そういえばこのブルーは、トゥアールのテイルギアの色だったんだもんな……。

　カメレオギルディは全身から放電させながら、満足げに笑った。
「や、やはり最期は紅あかき炎で果てたかったが……まさしく自じ業ごう自じ得とくというものか……！」
　カメレオギルディの術技の崩壊と共に、全身の青がグラデーションのように変化を始めた。
　俺はカメレオギルディを真っ向から見据える。
「人格をどれだけ歪ゆがめようとも、魂たましいだけは変えることはできない！　初めて剣を取ったその日から、この魂のツインテールの色い彩ろは、ただ一つ！」
　テイルギアが、そしてツインテールが、灼しやく熱ねつの真紅を取り戻す。
「俺のツインテールは──真紅だ！」
　満足げに笑い、深く首しゆ肯こうするカメレオギルディ。
「……うむ、やはりお前には、その真い紅ろが似合う……!!」
　赤髪を最も愛しながら、ツインテイルズに勝ちたいという一心で愛を

欲張り──事実俺たちを苦しめた無銘の強敵、カメレオギルディ。
「ドラグギルディ様！　不肖の部下カメレオギルディ、胸を張ってそちらへ参りますぞ!!」
　その戦士は今、一片の悔いなく天に吠ほえ立てた。
「……不肖なもんか。目一杯あいつに自慢してやれ、カメレオギルディ。強かったぜ──」
　餞はなむけの言葉と共に、俺は踵きびすを返す。
　残心の一振り──一刀に還ったブレイザーブレイドの斬ざん閃せんは、鮮烈な真紅。
　背後の爆発での風圧を受けて舞うツインテールもまた、太陽の赤。
　晴れて〝テイルレッド〟に戻った俺は、久方ぶりに人ひと心地ごこちついた。

　気がつくと、目の前にカメレオギルディの属性玉エレメーラオーブが浮いている。中心に赤髪属性レツドヘアーの属性玉エレメーラオーブと……それを取り囲むように、青髪属性ブルーヘアー、金髪属性ゴールドヘアー、黒髪属性ブラツクヘアーの三つまでもが！
「……属性玉エレメーラオーブが…………複数!?」
　後付けされたはずの属性まで属性玉エレメーラオーブに変わっているのは何な故ぜだ……？
　フォクスギルディのような特殊な例を見ても、一体のエレメリアンが遺のこす属性玉エレメーラオーブは一つだけのはずなのだが……。
　明らかに身体からだに無理をきたしていたカメレオギルディの強化といい、アルティメギルに何か変化が起こっているのかもしれない。
　俺たちの想像も及ばないような、恐ろしい何かが。

　　◇

超次元の狭はざ間まにある、不可視の神域。
地平の果てまでプリズムのように輝く空間の僅わずか一角で、聖布ヴエールに包まれた玉座に坐す絶対の存在──アルティメギル首領。
その不可侵が今、来訪者の手で解き放たれる────。

「……お前か、マーメイドギルディ。代わり映えのない来客よ」

聖布ヴエールの奥で重厚に響く、首領の神こう々ごうしい声。
「あら、今日も代わり映えしませんでした？」
首領の間の不可侵を侵略したのは、お馴な染じみの報告者──マーメイドギルディだった。
最近また足繁くこの場所に訪れているのは、フェニックスギルディが首領と一戦やらかしてくれるのを楽しみにしているからだ。ところが、一向に現れる様子がない。
かなりの頻ひん度どで顔を出しているのだ、自分の知らぬ間にここを訪れ、そして敗北したなどということはないだろうが……。
今日もマーメイドギルディは、これまでの神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦果を報告した。
ただ一言、「連戦連敗」と。
自身が強化を施した混こん成せい残ざん存ぞん軍ぐんの兵士の顛てん末まつについては、一切触れていない。
薄衣の奥で揺らめく影は、確かな歓喜に彩いろどられていた。
「フフフ……。そうか、神の一剣ゴー・デイア・ソードをな……。人間のツインテールが刃やいばとなって、神の剣と斬きり結ぶ、か──」
自軍の戦士、それも最精鋭たちが連敗を喫しているというのに、首領の口調は全くもって余裕じみている。

むしろ自己陶酔の権化のような芝居がかった声こわ音ねで、天井を見上げていた。
「まあ、ティラノギルディを破った時点で、よほどの戦士ものでなければ太た刀ち打ちできるとは思っておらん。しばらくは好きにさせよう」
首領を包み隠す聖布ヴエールが、オーロラのように淡く揺れる。
「──ところでマーメイドギルディよ。他にも語り事はないか？　余は退屈しておる、よほどの瑣さ事じも聞く耳は持っておるぞ」
「うふふ、そうですね～、首領様お気に入りの究極のツインテールの幼な子が、マウントでエレメリアンをぽかぽか叩たたいてましたねえ」
要望どおりの凄すさまじい瑣さ事じを語って追及を躱かわすマーメイドギルディ。
「そうか……ならば、引き続き瑣事が報告されるのを待つとしよう」
悪戯はひた隠しているつもりだが、見透かされているらしい。首領の方が一枚上手だった。
踊らされているのは自分の方かもしれない。しかし、それはそれで面白い。マーメイドギルディは嬉うれしそうに微笑した。
「それにしても面白きは究極のツインテール……未いまだ底を見ぬそのツインテール力りよく、余の目で計りたいものよな」
ツインテール力、という聞き慣れない言葉に困惑するマーメイドギルディ。
油断しているとすぐ新しい単語を作り出す。アルティメギル首領との会話は、頂上戦士たちとて困難を極める。
「ツインテールは数値化できるものなのですか……」
「単純な戦闘力の数値化はできぬし、その意味もない……。しかし、ツインテールへの愛は大きさで表すに足る」
しまった、フェニックスギルディがまだ襲撃していないなら、報告だけしてとっとと帰ればよかった──。そんな後悔を微笑で塗り込める、

マーメイドギルディの処世術ならぬ処首領術が冴さえ渡る。
「雑多なツインテールの戦士を、ツインテール力一〇〇としよう……」
「するんですか」
　科学者らしく、効率的に最小の相あい槌づちで応ずるマーメイドギルディ。
「究極のツインテールを持つ戦士……かの者のツインテール力は一万とも一億とも、それ以上の無限大の数値ともなろう」
「なるんですか」
　聖布ヴエールの向こうで、不敵に微笑する首領。
「フッ……。余か？」
　別に聞いてないです、とうっかり言いかけたマーメイドギルディに先んじて、首領は驕きよう傲ごうを滲にじませた言葉を放った。

「──余はツインテール力〇ゼロである」

「……はあ」
「無限にも勝る〇が──ここにあるということだ」
「うっわあ……」
「何ぞ申したか」
「いえ、全く」
　とうとう心中を漏もらしてしまったマーメイドギルディだが、上う手まくやり過ごして首領の間を後にした。

　エレメリアンである限り、ツインテールへの愛が皆ゼ無ロはありえない。また首領お得意の大たい言げん壮そう語ごだろう。
　そもそもツインテール力という概念が、科学者であるマーメイドギルディにとっては理解の埒らち外がいであった。

「愛を数値化できたら苦労はないわよ……。それまで一だったコが突然一〇〇になったりするから、人間は侮あなどれないし……面白いのよ」
　その語り口は、あるいは人間すらも研究材料のよう。
「――ま、それは私たちも同じだけどね」
　首領の間から続く神秘的な回廊で歩みを進めながら、意味ありげにほくそ笑む。
「けれど、ゼロになってしまったツインテールから、一や一〇〇は……あり得るのかしらね？　ヴァルちゃん」
　そう問いかけながら、マーメイドギルディは小首を傾かしげる。
　回廊の只ただ中なかで、白いローブのエレメリアンが立っていた。
「今日は行きにいないと思ったら……帰りに道に通せんぼ？　生き真ま面じ目めな門番さん」
「呆あきれた不敬だ。首領様の御み言ことを何と心得る」
　凛りんとした女性の声が、マーメイドギルディの不敬を厳しく咎とがめる。
　その一方で、先ほどの質問にも律儀に返す。
「……答えてやろう。消滅したツインテールの再誕はあり得ん。天地が逆向いたとてな」
　まるでその再誕を待望されし消滅を見てきた……いや、してきたかのような絶大な自負心と共に返される言葉。
　マーメイドギルディは慇いん懃ぎんな態度で質問を重ねた。
「ところで、その首領様の御み心こころを尊とうとぶあなたは、どうするおつもり？」
「――無論。私が終わらせに征ゆく」
　首領は言っていた。
　よほどの戦も士のでなければそうそう究極のツインテールには太た刀ち打ちできまいと。

その上で、この白ローブのエレメリアンはこともなげに名乗り上げたのだ。
自分がそうだと。首領に認められる、よほどの戦士なのだと。
「確かに首領様は神の一剣ゴー・デイア・ソードに出撃許可を下された……そして今、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちは続々とこの世界を目指し、ツインテイルズと戦っている」
そして続々と敗北している……と、無言の微笑ほほえみだけで皮肉を重ねるマーメイドギルディ。
「しかし神の一剣ゴー・デイア・ソードとは本来、首領様を御お守まもりするアルティメギル最後の砦とりで……いたずらに数を減らしてよいものではない」
「いたずらにってわけじゃないわよ、ツインテイルズは強いもの」
ローブで隠された頭部の陰で、白ローブのエレメリアンの双そう眸ぼうが力強く輝きを灯ともす。
「ツインテイルズとやらがいくら強かろうとも、所しよ詮せんは人間……消耗戦の前にはいつか膝ひざを屈する。ぶつけるならば一個の強よりも無数の弱だ」
「……つまり、この前の私の提案を聞いてくれるわけね」
マーメイドギルディは手の平の上に光り輝く石を出現させた。
赤い菱ひし形がたの宝石。血を凝縮したような濃厚な朱色は、血塗られた属性玉エレメーラオーブを彷ほう彿ふつとさせる。
マーメイドギルディはその宝石を、白ローブのエレメリアン目掛けて放り投げた。彼女の胸元に当たると、宝石は体内へと吸い込まれていく。
「それはプレゼントよ。数日かけた私のとっておき。〝無数の弱〟に活いかすといいわ」
「よかろう。全ては首領様のために」

まとったローブのフードだけを下ろし、文字通りヴェールに包まれていた素顔を晒さらすヴァルキリアギルディ。
戴たい冠かんせしは神の御み心こころ。
気け高だかき神の冠を輝かせる頭部は、女性らしい繊細なシルエットの中に、超越者としての凄せい烈れつさを存分に漲みなぎらせている。
「……滅びるべきツインテールは、我わが神や槍りが裁定する」
戦いくさ女め神がみの神こう々ごうしさをまとった戦士は、瞭りよう然ぜんたる結末を宣言した。

「──このヴァルキリアギルディが直じき々じきに、ツインテイルズへ裁きを与えよう」

第四章　終しゆう焉えんの戦いくさ女め神がみ。

　夢を介して異世界の双子姫と繋つながる神秘、夢通信。
　それが作り上げる宇宙空間じみた不思議な世界に、俺は久しぶりに誘いざなわれた。
　今夜はロエルとリルナに何を話そうか。数日前に、ツインテイルズのツインテールの色が入れ換わってしまったことを話したら、驚いて面白がってくれるだろうか？　それとも心配されてしまうだろうか……。
　そんなことを考えながら歩いていると、視界の先にうっすらと輝く二つの光点を発見した。
　桃色のドレスを身にまとった双子姫──ロエルとリルナだ。
　二人も俺に気づいて駆け寄ってきたが……どうも様子がおかしい。
　妙に切羽詰まっているというか、いつも笑顔のロエルまでもが、表情を険しくしている。
　目の前まで近付いてわかったが、今日はいつもと違って二人の輪郭がぼやけて薄い。
　しかも──
「……！　…………!!」
「───っ、～～～～～！　…………！」
　ロエルもリルナも懸命に何かを話しているのだが、声が全く聞こえない。
　扉の閉まった電車内とホームとで、互いに話すような感覚だ。俺は今の状況を説明した。
「ごめん、何な故ぜかロエルとリルナの声が聞こえないんだ……」

　こっちの声は届いているようで、二人は困り顔で喋しやべるのをやめてしまった。
　声で伝えることを諦あきらめたらしく、今度はリルナがボディランゲージで何かを伝えようとしてきた。両手を広げ、上下にぱたぱたと動かして──
「えーっと……ツインテール！」
　早押しクイズで回答スイッチを押すような仕草をした俺に、チョップをしてくるリルナ。違うらしい。
　どう見ても、風になびくツインテールだったんだが。
　その後ロエルも加わり、二人で様々なジェスチャーをするものの、俺にはどれもツインテールを表現しているようにしか見えなかった。常に両腕を振っているからだろうか……。
　やがてリルナは手を止め、俯うつむいて肩を震ふるわせ始めた。
「ああっ、泣かないでくれ！」
　俺はこういう日もあるさ、と慰なぐさめようとしたのだが、どうも姉妹は今すぐ俺に伝えなければいけない大事なことがあるようだ。そういえば、最初からやけに焦っていたな……。
　いたたまれなくなった俺は、ロエルとリルナを引き寄せ、そっと頭を撫なでた。
「……ごめんな。でも焦らなくていいから」
　二人はこうすると落ち着いてくれる。やがて、どちらからともなく俺に抱きついてきた。
　俺からもロエルとリルナを抱き締めた瞬間──
「……めだよ……繋つなが……ても……眠りが浅……不安定……」
　ロエルの声が、微かすかに聞こえた。
「！　いや、もっと喋しやべってくれ、少し聞こえ始めた！」
　ノイズだらけのラジオ放送のような聞き取りづらさだが、確かに何か

聞こえる。
　俺の胸の中でぱあっと顔を明るくしたロエルとリルナは、再び何かを話し始めた。
「お兄……気をつけ……」
「っちに……行って……かも……」
　一際薄くなっていく二人の輪郭。タイムリミット……夢が終わる。
　最後に一言だけ、とばかり、姉妹は口を揃そろえて俺に伝えてきた。

「「—ノーブ……ラ……だ——!!」」

　瞬間、光に溶け込むように消えていく姉妹。
「……ロエル！　リルナ!!」
　俺の意識は夢空間を離れ、現実へと覚かく醒せいしていった—。

　うっすらと瞼まぶたを開く。ベッドから身体からだを起こすよりも先に、何とか記憶に留めようと姉妹の言葉を思い出す。
　俺の眠りが浅いからどうというのは聞こえた。それが、夢空間の接続が不確かだった原因なのだろうか。
　俺が朝、ツインテールを掴つかむ特訓をするために早起きを意識するようになったせいか？
　最後、ノーブラだ、と言っていたな。それが、姉妹が懸命に伝えたかったことだろうか。
「ノーパンの次は、ノーブラか……」
　とにかく、聞こえた断片的な言葉は入念に記憶しておこう。
　しかし……俺はよくよく、リルナの涙には弱いな。夢空間で不用意に二人を抱き締めるのは危険だと、過去の経験で散々思い知っているのに。

　夢空間での俺の行動は現実で眠っている身体にもシミュレートされてしまうので、何度か、現実で一緒に寝ていたイースナを抱き締めてしまったりしていたのだ。
　あらためて自省する俺の首元に、温かい風がかけられる。
　ほらやっぱり、今朝も現実世界で女の子を……抱き締めてしまって……い、た……？
「………………はぁ、はぁ、み、観み束つか君……」

　――慧え理り那なさん、なんで俺のベッドの中に？
　掛け布ぶ団とんを跳ね飛ばすようにして起き上がる。案の定俺は、夢の中でロエルやリルナにしていたように、慧理那を抱き締めてしまっていた。しかも、しっかりとツインテールを握って。
　この行動……一瞬、イースナの性格がまだ移ったままなのかと思ってしまった。
　そんなわけはない。カメレオギルディを倒した後、俺だけではなく、愛あい香かも、慧理那も、イースナも、全員の性格がしっかりと元に戻ったのだから。
「……はあぁ、すみません、観束君……身体からだ中の力が抜けてしまって……」
　慧理那は制服のブレザーをはだけ、くたっとして俺に身を預けてきた。制服越しにさえ感じるほど、身体は熱っぽい。
　当たり前のように首輪をつけていて、他にも枕元にアイマスクや手錠が転がっている。
　……何だろう、上う手まく言葉にできないけど、誰だれかに見られたらすごく誤解されそうな画だ。
　俺が謝ろうとした瞬間、タイミングを計っていたように部屋の窓とドアが同時に開いた。

「……毎朝毎朝エキサイティングね、そーじの部屋は……!!」
　完全復活した愛香は、ツインテールを逆立てて窓からベッドを飛び越え、床に着地。
「巨乳婦警トゥアールちゃんです。あなたを逮捕拘留ペロペロします、慧理那さん」



　トゥアールは胸の谷間から黒革の手帳を取り出し、慧え理り那なの前でスタイリッシュに開いて見せた。手帳にはちゃんと桜の代紋が刻まれている。
「……あたしが甘かったわ。そーじの部屋から会長の気配は感じてたけど、犬小屋にいるだけだと思ってた。まさかベッドの方だなんて……。もっと精度を上げないとね……」
　俺もツインテールの気配を探る精度は昔に比べて向上したと思うが……愛あい香かもまた、人の気配を正確に探知できるよう努力しているらしい。さすがの向上心だ。
「ち、違いますの津つ辺べさん、トゥアールさん！　わたくしちょっと早起きしたので、いつもより早めに観み束つか君のお部屋にお邪魔して、犬小屋に入っていたのですけれど──」
　導入がまずおかしいけど、その弁明は続けて大丈夫か……!?
「観束君が穏やかな寝顔でしたので、つい犬小屋を出て……見入ってしまいましたの」
　頬ほおを押さえて幸せそうにする慧理那を見て、愛香とトゥアールは「うっ」と息を呑のんだ。
「そ、それはまあ……わかるわ。あたしもつい見ちゃうし」
「私もつい見ちゃうんですよ……私だとその数秒後に蛮族の顔も見せられるんですけど……」
　いや、みんなに堂々と寝顔見てるって言われると、すっげー恥ずかしいんだけど……。
　トゥアールはベッドの上でちょこんと座る慧理那を見て、複雑そうな顔で唸うなった。
「それにしても、意図せずに次々と女を味わっていく総そう二じ様は、お義か母あ様の仰おつしやるとおりハーレム適性ＭＡＸですね。私は落ち込んだ時情熱的に抱き締められましたし、イースナも慧理那さんも

ベッドで……あ、すみません愛香さん！　あなたの前では嫌味になっちゃいますね!?」
「あ、あたしだって抱き合ったことぐらいあるわよ！　そーじがテイルレッドの時だけど!!」
「それスタッグギルディの能力であなたが暴走した時のことでしょう！　小ちっちゃくて可か愛わいいレッドたんの胴体が千ち切ぎれそうになるぐらいブルーが鯖さば折りした、歴史的非道です!!」
　小声で喧けん嘩かを始めかけた愛香とトゥアールを止めるように、慧理那は続きを話した。
「……そ、それでわたくし……しばらく観束君の寝顔を見ていたら、と、突然腕を掴つかまれて、ベッドの中に……ひ、引きずり込まれてしまって……ふぇ……」
　それ以上は言えない、と顔を真まっ赤かにして縮こまってしまう慧理那。
「そーじがそんなことするはずないでしょ、いくら会長だって嘘うそは駄目よ!!」
「そのとおりですっ！　総二様が自発的に女をベッドに引きずり込める殿方なら！　私は……私は今日この日まで処女のままじゃありませんよおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　俺が慧理那に詰め寄る二人を止めようとした瞬間、軋きしみ音を立ててクローゼットが開いた。
「……ま、待って……」
　こちらもストーカー特性が完全復活したジャージ姿のイースナが、のっそりと姿を現した。
「慧理那の、言ってること……多分……本当」
　窮地の親友に助け船を出すイースナ。
「…………私、うすうす、思ってたけど……今、確信した……。総二さ

ん、眠っている間……他の女の子と、会ってる……」

　驚くことにそれは、俺の夢の中の出来事を具体的に指摘していた。

　　◇

　まるで護送される囚人のように前後左右を愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナに固められ、俺は地下基地のコンソールルームへとやってきた。後ろにメガ・ネがのんびりと続く。
　入室するやいなや、愛香たちはてきぱきと準備を進めていった。
　コンソールルームの中央にあるテーブル。その二つの長辺に等配置された椅い子すは、一つを除いて全て一方に移動される。片側は俺一人分。もう片側は、愛香たち全員分だ。
　速やかに着座を促うながされ、俺は愛香たちの対面に腰を下ろした。
　既視感を感じると思ったら、ソーラになった時に面接じみた質問攻めを受けたのと同じ。
　今からお前は審問を受けるのだと、この椅子の配置が俺に告げている。
「ち、遅刻するぞ、みんな……？」
　俺はこの期ごに及んでなお、やんわりと説得を試みる。
「大丈夫。転送ゲート使えば、三〇秒もかかんないでしょ。つまりあと四〇分はこうしてお話しできるわ」
　愛香の目が据わっている。
　普段、自分の足で歩いて登校することにこだわっている愛香が、率先してショートカットを勧めるとは……。これはもう、おとなしく詰問を受けないと終わらないだろうな……。
「……イースナ。あなたの考えを詳しく説明してください」

顎あごの下で手を組んだトゥアールに促され、イースナが話し始めた。
「総そう二じさんは、平日いつも、〇時過ぎに就寝する……ベッドに入ってから、眠りにつくまで、平均一二分二〇秒……」
「ふむ、そこまでは私も把は握あくしています。それで？」
「何で二人とも俺のバイオリズムを把握してるんだよ⁉」
　俺はすかさずトゥアールにツッコむも、愛香にピシャリと制止された。
「待って、そーじ。発言は後でまとめてして。時間を作るから、数秒」
　最後に、公平な裁判を異端審問に変貌させる絶望的な補足が聞こえた気が……。
「け、けど、たまに……二時から五時ぐらいにかけて、妙に寝相が悪くなる……。わ、私が二度目に一緒に寝た時も、その時間に注目した」
　二度目というと……グリフォギルディに怯おびえるイースナに添い寝をお願いされた時か。
「その時間帯に、添い寝をしてもらったら……手を出してきやすくなる……と思ったから……くふふふふふふふ」
　よほど誇らしいのか声が引きつり、眼鏡めがねを光らせて思い出し笑いを浮かべるイースナ。
　何な故ぜ愛あい香かとトゥアールは、これを聞いて歯は噛がみしているんだ……⁉
「えっちなゲームで拾ってきた知識やろから、気にせんといてな」
　メガ・ネが向かいから、ぼそりとツッコんでくれる。弁明を完全封殺された俺にとっては、常識的な意見が何より心強い。
　俺が自分の常識を疑いかけるその時、彼女はいつも勇気をくれる。
　もはやメガ・ネというよりは、メガ・ミだ。
「実際、二回とも、その時間帯に……総そう二じさんが、強引に抱き締

めてきた……。とても力強くて、抵抗できなかった……。私、覚悟した……」
　…………覚悟？
「っ、と……!?」
　俺がテーブルに手をつこうとした瞬間、そのテーブルが中心から真っ二つに割れた。ぐらぐらと揺れて、不安定な状態だ。
「あ……肘ひじついたらテーブル割っちゃった……」
　愛香がテーブルの亀裂を見てぼそりと呟つぶやく。
「いいですよ、すぐ直しますから……」
「悪いわね、トゥアール……」
「それより……強引だったそうですよ、愛香さん」
「抵抗できなかったんだって、トゥアール」
　感情のない言葉で会話する愛香とトゥアール。
「そ、それで……今朝やっぱり、慧え理り那なのことも、抱き締めてた……。私、ようやくわかったん、です……」
　イースナはくっくっと含み笑いで肩を揺らした。

「そ、総二さん……夢の中で、他の女と会って……そして、だ、抱いてます……」

　まさに核心を突く確信の言葉に、俺は息を呑のんだ。いや、語ご弊へいはあるんだけど。
　愛香とトゥアールが、椅い子すを蹴け倒す勢いで立ち上がる。
「そ、そ、そ、それどういうこと、イースナ!?」
「寝ぼけて、じゃない……リアルな夢を……むしろ、夢の中で現実を、過ごしてる……だから、迷いなく、その時一緒に寝てる女を、だ、抱き寄せる……総二さん、技う巧まい……」

　たどたどしいのに熱情がこもっているから、イースナの言葉は誤解を招きやすい。
　彼女が趣味のエロゲーとか以外でこうして熱く語っていること自体は、喜ぶべきなんだけど……。
「その夢で、私や慧え理り那なを、抱きながら……他の女を、抱いています。私たちは……その女の代わりに抱かれただけ……」
　愛あい香かとトゥアールの周囲が、陽炎かげろうのように揺らめいて見える。慧理那はきょとんとしていた。
　…………数秒あるんだよな、俺の弁解時間……。
　ここで一、二秒使った方がいいよな、どう考えても。
「イースナちゃん。みんなとお話しできて楽しいのはわかるけど、あんま総そう二じ君を悪く言ったらあかんで。イースナちゃん時やって、怖くて眠れんから一緒に寝てくれたのに……なんや、聞いてたら総二君寝ぼけて、イースナちゃんぎゅってしちゃっただけやないの」
　メガ・ネが優しくイースナを窘たしなめる。イースナはすぐにはっとし、
「そ、そうだね、メガ・ネ……。わ、私が悪いの。ちゃ、ちゃんと覚悟して部屋に来てる、から……総二さんは、悪くない……」
　愛香たちも聖母メガ・ネの言葉を聞いて冷静になったようだ。
「まあ、そーじがいきなり何かしたりはしないって、わかりきってるけどさ……」
「わかりきってますがそれを認めちゃうと、私や愛香さんが困るんですがそれは……」
　トゥアールが唇くちびるを尖とがらせる。
　メガ・ネ……母は強し。彼女の言葉で、いつも場の殺さつ伐ばつとした空気が朗ほがらかになるのだ。
　ありがとう、おかん──。

「はっ……!?」
　視線を感じてコンソールルームの入り口を見ると、俺の母親が壁にもたれて不敵に微笑ほほえんでいた。完全に見物に徹しているようだ……。
「とにかく！　今気になるのは、会長やイースナを抱き締めたことじゃなくて！　イースナが言う、夢の中で会ってるって女よ。そーじ、あたしたちに何を隠してるの!?」
「そうです総二様、女の幼馴染おさななじみは関係の進展は日ひ和よるくせに嘘うそや隠し事は容た易やすく見破って恨んでくる死ぬほど面倒な生き物ですから、素直に告白した方がぎゃああああああああああ!!」
　軟体生物のように絡みついて関節を極きめるという、死ぬほど面めん妖ような技を受け悶もん絶ぜつするトゥアール。
　確かに、この世界で一番ツインテール属性が強いという俺しか夢通信ができないからみんなには黙っていたけど……徹底的に隠すことでもないんだよな。
　俺は観念し、二人のことを皆に話すことにした。
「実は俺……今でもロエルやリルナと会っているんだ」
「ロエルと」
「リルナちゃん!?」
　双子姫の名前が出た瞬間、愛香とトゥアールが同時にテーブルから身を乗り出す。
　俺は続けて、詳しく事の顚てん末まつを説明した。

「――――というわけで、夢通信をしている間の俺の行動が、現実にも反映されちゃうらしくて……。イースナも慧え理り那なも、迷惑かけてごめんな……」

俺以外のみんなは、姉妹とは数か月前の夏休みに異世界で会ったきりだ。困惑を共有するかのように互いの顔を見合わせていた。

ましてやイースナとメガ・ネ……それと母さんは、直接話したこともないのだから。

「じゃあ総そう二じ様、夢の中でロリちゃんたちを抱いてあげているいうことですか⁉　慰なぐさめで女を抱いているという解釈でよろしいですか⁉」

トゥアールは両手をぶんぶんと振りながら抗議してくる。

みんな、ちゃんと略さずに「抱きしめる」と言ってくれるとありがたいんだけど……。

「いつも……ずっと抱き締めているわけじゃないぞ？　リルナが意外に泣き虫でさ、たまにすごく寂しがるから……」

「もう！　何で今まであたしたちに教えてくれなかったのよ……」

愛あい香かに怒られるよりも残念そうにされ、かえって申し訳なさが募つのる。

「そりゃそうでしょう。私の夜よ這ばいもことごとく妨害する愛香さんにこんなこと教えたら、総二様を夢の世界に誘わせまいと睡眠妨害するに決まってます」

「あたしはそーじの睡眠を妨げたりしないわよ‼」

トゥアールなら、夢通信という不思議な〝システム〟の話を聞けば興味を持つと思ったのだが、いつもどおり愛香と口喧げん嘩かをしていた。

「素敵ですわね」

そんな中、慧理那が穏やかな微笑ほほえみを浮かべる。

「リルナさん、観み束つか君に会いたい一心でお姉さんのように夢を通じての通信ができるようになったのでしょう？　きっと、すごく努力されたのだと思いますわ」

俺も、リルナの頑張りを誉ほめられるのは、自分のことのように嬉うれしい。
「できればわたくしも、またお二人とお話したいですわ。特にリルナさんとは、一緒にお風呂に入った仲ですし」
のぼせて茹ゆで上がってお尻丸出しで浮かんでいた慧理那をリルナが目撃した、略して一緒にお風呂、ではあるが……。
「話か……そうだな。みんなともまた会えれば、二人も喜ぶと思う」
愛香とトゥアールは、一様に歯は噛がみして俺をじっと見ている。
「…………総二さん……」
そして何か考えていたらしいイースナが、俺に尋ねてくる。
「あの世界の姫が、そういう特殊能力を持っているのは、わかりました……。けどあの世界、アルティメギルの侵略リストから……あっさり外れるぐらい、戦士の力が弱い……です」
この辺の割り切った意見は、慧え理り那なと逆でイースナらしいと言うべきか……。
「いくら、得意な能力でも……頻ひん繁ぱんに、別世界と交信できるなんて……考えられません……。す、すごく、負担がかかるはずです……」
もちろんそれは俺も最初に聞いた。無理をしていないか、と。その時こう説明された。
「ああ、確かロエルが言ってたよ。この世界とロエルたちの世界、やけに繋つながりやすくなってるって……」
俺の何気ない言葉で、イースナが絶句した。眼鏡めがねのレンズに反射する光で、奥の瞳ひとみは窺うかがえない。しかしすぐに、取り繕つくろうような笑顔を浮かべた。
何か考え込んでいたらしい愛あい香かが、何な故ぜか機嫌を悪くしながら語調を強める。

「どうしてそーじは、ロエルやリルナだと抱き締めるの恥ずかしくないのよ、幼いから⁉」
「特にリルナの方が、強がってるけど繊細なところがあるから……俺が恥ずかしがったり照れたりしたら、頑かたくなになっちゃうかもしれないだろ？」
　トゥアールと愛香が猛然と詰め寄ってきて、思わず俺は後あと退ずさった。
「私たちが繊細ではないと⁉」
「生きとし生ける全ての女は繊細なのよ⁉」
「トゥアールたちが繊細じゃないって意味じゃなくて！　俺だって、愛香の心臓に毛が生えてるとは思ってないよ……」
　トゥアールは軽やかにバックステップし、いつの間にかテーブルについていた母さんと密談を始めた。
「未み春はる将軍、今の総そう二じ様の録音音声から『の心臓に』をトリミングして、愛香さんを辱はずかしめましょう」
「待って、多少不自然になるリスクを背負ってでも、わかりやすさを重視して『の心臓に』と『に下の』とを入れ替えで合成しておくべきじゃないかしら」
　いつの間にか席に着いていて、トゥアールの提案に乗っかる母さん。以前はアタリをつけて盗録していたのが、今では俺の一言一句余さず全てが録音されているように思える。
「まあ、相手がロエルとリルナなら、とりあえずほっとしたわ。さすがに……ねえ？　あの二人じゃそーじも変な気は……」
「そうやって敵の力に油断した挙げ句、術中に嵌はまってドＭになったのにまだ懲こりてないんですねプヘーーーーーホホホホ」
「ロエルたちはあんたにはストライクゾーンなのよね。危険は排除しておくわ」

「ーーーーーーーーーーーーーー人体の全てがストライクゾーンの破壊者!!」
　トゥアールを球にして切れ味抜群のピッチングを披露し、愛香はモニターのデジタル時計に視線を送った。時間は、いよいよ遅刻寸前だ。
「そろそろ時間ヤバいわね。それじゃ、ゲートから部室に行こっか」
「尊みことも来てくれましたし、急ぎましょう！」
「じゃ、じゃあ私とメガ・ネは……仕事に行きます……」
　コンソールルームの入り口から、慧え理り那なを迎えに桜さくら川がわ先生がやって来た。
　慧理那は桜川先生から鞄かばんを受け取り、イースナはメガ・ネと一緒にゲートへと向かう。
　ボロ雑ぞう巾きんのようになっていたトゥアールも、瞬まばたきの間に快復してルンルンで登校準備を始める。フレーム数の足りない映像のような不可思議さだった。
　しかし……コンソールルームを出ようとした瞬間、まさかのエレメリアン出現アラートが鳴り響いた。
　トゥアールが壁のメイン端末で素早く情報を確認する。
「まずいですよ、エレメリアン出現です！　……えーと、これは……多分、神の一剣ゴー・デイア・ソード？　……じゃない……？」
　自信なさげな報告。前回のカメレオギルディの一件以来、属性力エレメーラの反応だけでは断定できないようだ。
「登校時間にかよ……」
　俺は時間を確認する。始業時間まで一五分……これは間に合わないな。
　すでにイースナはコンソールルームを出てゲートへ向かってしまっているが、メガ・ネは戻ってきて申し訳なさそうに聞いてきた。
「ごめんなあ、イースナちゃんすぐに生番組やから……。その、ウチだ

けでもお手伝い……」
「いや、大丈夫。今回は俺と愛あい香かだけで行く。イースナとメガ・ネは仕事を頑張ってくれ。慧理那も、生徒会長が遅刻するわけにはいかないだろ？」
「そ、そうね！　あたしとそーじの二人っきりで!!」
　トゥアールが半笑いで愛香を睨ねめ付けている。何かを言いたげだ。
　そしてメガ・ネを見送っても、慧理那はまだコンソールルームに残っていた。
「……観み束つか君。何度も言っていますように──わたくしは生徒会長である前に、ツインテイルズのテイルイエロー、神しん堂どう慧理那です」
　そんな慧理那を誇らしげに見つめながら、桜川先生が提案した。
「お嬢様、こういう時こそ私にお任せください。もし始業に間に合わなかった時は、しっかりと学校に対してフォローしておきます」
　おお、頼もしい……桜川〝先生〟だもんな。
　そういうわけで今回は、俺と愛香、慧理那の三人で出撃することとになった。

◇

　エレメリアンの出現地点は、他県の住宅地。中学校の通学路だ。
　時間が時間なので、登校中の学生で溢あふれかえっている。
　メガ・ネがいないので、ブルーの一ひと睨にらみと俺のお願いで退避してもらったわけだが……。
「やはり通学路は最高の劇場だ……登校中という名の上映時間、俺は一人の観客となる」
　エレメリアンは懲こりずに女学生を見つめながら、ポエミィな独白を

空に馳はせていた。
　カンガルーのような下膨ぶくれの体型で、拳こぶしにはグローブじみた球形の手てつ甲こうを有している。
　俺たちに気づいたエメレリアンは、いつもの奴やつらと同じくしっかりと名乗り上げた。
「俺は絶対領域属性アブソルテイフイールドのカンガギルディ。絶対領域鑑賞を上映中止に追い込んだ責任は取ってもらうぞ!!」
　一見それほど強そうには見えないが、この前の戦いで苦戦した直後にそんな考えは御法度だ。また何か、特別な能力を有しているかもしれない。
　そう警戒する俺の太ふと股ももを、カンガギルディは残念そうに見つめてきた。
「その格好なあー……」
　俺たちのテイルギアのアンダースーツ……太股の部分を丸い手で指し示すカンガギルディ。
　そしてその丸い手で器用に持ったギンガムチェックのスカートを俺に突き出してきた。
「よし、せめてこのスカートを穿はいてくれ」
　スカートを眼前にかざされ困惑する俺を余よ所そに、カンガギルディは熱い主張を続けた。
「君らね、斜めじゃ駄目なんだよ……絶対領域はさあ、太股と垂直のラインだから美しいんだよ！　わっかんねーかなあ!?」
「わかるか」
「あふんっ!!」
　熱き主張を冷徹に一いつ蹴しゆうし、ブルーはカンガギルディを容赦無くウェイブランスで突いた。
　確かに、テイルギアの太股のアンダースーツは外側から内側にかけて

斜めになっている。それが俺やイエロー、ブラックで、ブルーはＶ字型だ。真まっ直すぐではないな。
　カンガギルディは絶対領域属性アブソルテイフイールドだが、〝絶対〟といえばイエローだ。主張の一つもあるだろうと視線を送ると、イエローは無言で立ち尽くしていた。ブルーも気づいて声をかける。
「イエロー、どうしたの？」
「もう一体エレメリアンがいるようですわ！　わたくしがそちらと戦いますので、ブルーはカンガギルディをお願いいたします！」
　フォースリヴォンに触れ、ヴォルティックブラスターを手にするイエロー。
　俺とブルーは顔を見合わせ、イエローが銃口を向ける先をまじまじと見つめた。
『──？　そこにいるエレメリアンは、そのカンガギルディ一体ですが……』
　トゥアールの通信に驚き、イエローは前に向き直ってさらに驚きよう愕がくした。
「今、確かにそこにいましたの！　牛のようなエレメリアンで……！」
　狼ろう狽ばいし、敵の情報をサーチする文学属性ブツクのスクリーンを眼前に展開してまで、必死にもう一体のエレメリアンを捜索するイエロー。
『慧え理り那なさん、こちらで探知している反応は間違いなく一体分だけですので……』
　トゥアールに念を押され、イエローは素直に自分の見間違いだったと認めた。
　牛のようなエレメリアン……そういえばこの通学路、どこかで見たことがあると思ったら、ずっと前に貧乳属性スモールバストのブルギルディと戦ったあたりだな。あいつは牛みたいだった。

　────いや、まさかな……。

「……イエロー、まだ疲れが残ってるみたいね。カメレオギルディはレッドに負担かけっぱなしだったし、こいつはあたし一人に任せて！」

　ブルーは、イエローが疲労のせいでいるはずのないエレメリアンを目撃したと判断したのだろう。イエローを気遣うように、一人前に歩み出る。

　どこか晴れやかな表情で、ブルーはカンガギルディと対たい峙じした。

　ボクサーよろしく顔の前で拳こぶしを構えるカンガギルディ。

「ち、近付くなよテイルブルー……俺はパンチには自信があるぜ！」

　連続で放つ左右のワンツーで鋭く風を切り、ブルーを威い嚇かくするカンガギルディ。

　威嚇というより、「僕強いんです本当ですだからお願いです近付かないでください」という言外の懇願が透けて見える。

「いくら蛮族とはいえ女性、顔に怪け我がをしたくないだろう!?　もっと俺から距離を取れ、そしてお前もスカートを穿はいて絶対領域を作れ!!」

「別に、戦うんだから殴なぐられるのだって覚悟してるわよ。あと、あたしの顔に一発入れた瞬間にきっちり拳はブチ砕くわよ」

　………………愛あい香かさん……。

　太古の拳闘士じみた覚悟を宿す女戦士を前に、カンガギルディは目に見えて戦意を萎なえさせていく。

「くそう、カメレオギルディがあんなに奮戦したのだ、俺だって──!!」

　それでもカンガギルディはありったけの勇気を振り絞り、これもボクサーのようにサイドステップで間合いを堅持しようとする。

　しかしその隙すきに──ブルーは、エターナルチェインへの進化を完了していた。

　胸パッドを人前で装着するという羞しゅう恥ちからか、ブルーの最強変身チエインエヴオルブがどんどんスピーディになっていく。
「強化したか……！　だが、捕まりさえしなければ……!!」
　残像すら見える高速のサイドステップで、ブルーを翻ほん弄ろうするカンガギルディ。
　ブルーはその動きを冷静に確認する。
　そしてエターナルチェインの特性──複数属性玉エレメーラオーブ同時発動を敢行した。
「属性玉エレメーラオーブ──体操服属性ブルマ！　涎属性スロバー！　濡れ透け属性クリアウエツト!!」
　重力を操る体操服属性ブルマを、限界まで強化するための重ね掛けだろう。
　ブルーが右手を突き出すと、極大化した重力波がカンガギルディの脳天に形成された。
「ぐ、ぉあああああああああ……!!」
　滝のように降り注ぐ超重力を浴びせかけられ、カンガギルディが悶もん絶ぜつする。
「待て！　俺の強化を見てくれ、絶対領域属性アブソルテイフイールドに長靴下属性ニーソツクスの加護を得て新たな能力を──」
　ブルーは聞く耳持たず、ウェイブランスエクシードを頭上で旋転させる。
「完全解放ブレイクレリーズ！」
　駄目押しにオーラピラーまで重ね掛けされ、自慢のフットワークを完全に封殺されたカンガギルディ。
　早朝の通学路で、ブルーの最強必殺技が爆発する。
「エクストリーム！
ウェーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイブ!!」

　不可避の槍そう撃げきを身に受け、カンガギルディは無念を滲にじませて天を見上げた。
「ぐわあああああああああああああ胸のラインが垂直だったああああああああああああああ!!」
　爆散するカンガギルディ。
　カメレオギルディ戦で不覚を取ったことをよほど悔いているのか、ブルーは本来の鬼神へと立ち戻っていた。
　敵が強化を受けている可能性があるのなら、本領を発揮する前に撃破する。
　現実の戦いはゲームのようなターン制ではない。相手が神髄を見せるまで待つ武士道など不要なのだ、と。
「もうあたしに油断はないわ。現れる敵は全て、倒すだけよ」
　充足感に胸を張るブルーを、俺とイエローは頼もしげに見つめるしかできなかった。
『そんなふうに粋がる女戦士ほどまんまと油断してエロい目に遭うのが世の常です。フフフこれからが楽しみですね』
　ほとんど通信する余地の無かったトゥアールが、ここぞとばかりに基地からツッコミを入れる。
「トゥアールは合流したらあたしに油断がないってことを身体からだに叩たたき込んであげるから」
『やめてくれませんか私がエロい目に遭うって言った直後にその恫どう喝かつ!?』
　遅刻は必至かと思ったが、今なら基地にトンボ帰りして部室への転送ゲートを使えば、まだ何とか間に合いそうだ。
　カンガギルディ……まだ本領を発揮していなかったみたいだが、あいつも死に物狂いで自分を高めただろうに、まさか登校前に急いで倒されることになろうとは……。

「先ほどはすみませんでした。ブルーの言うとおり、わたくし疲れていたようですわ……」
　すっかりしゅんとしてしまっているイエローを、ブルーは陽気に励ました。
「気にしない気にしない、あたしも未いまだにそーじのことご主人様って言いそうになるし!!」
「……うふふ。では、わたくしと二人でそうお呼びましょうか！」
　ツインご主人様呼びはちょっと困るが、ブルーのナイスフォローだ。

　しかし……俺とブルーが昔ブルギルディと戦った場所で、イエローが牛型のエレメリアンの幻影を見たというのは、少しできすぎているな……。何でもなければいいんだが。

◇

　早朝から魔女裁判にかけられ、登校前にエレメリアンと戦闘するという慌あわただしい始まりを迎えた一日だったが、放課後は実に穏やかだった。
　ＨＲの後、すぐ教室を出るクラスメイトは少ない。スマホでニュースサイトやテレビ番組を見せ合うなどして、ツインテイルズの話題に盛り上がっているようだ。
「青いレッドたんがもう元に戻っちゃったのは惜しいよな～」
「俺たちは赤だけを毎日栄養にしてきたからな……突然の青は斬新で可か愛わいかったぜ」
「まあ、青いテイルレッドフィギュアの発売が決まったのは嬉うれしいけどな！」
　幻のテイルレッドブルーを口々に惜しむクラスメイトたち。

斬新な見た目にはなるけど、残虐な闘争心がおまけでついてくるんだよ、あの色替え。
あと、フィギュア発売までのフットワークが軽すぎるだろ……。
しかしクラスメイト、ひいては世界中の人たちがテイルレッドの容姿のことなどで盛り上がり続けてくれるのは、ある意味ありがたい。
ツインテイルズが戦いに苦戦する。敵の強さ凶悪さに──侵略の不安に世界中の人たちが怯おびえるのが、俺が一番恐れていることだ。
戦いが激化しても、俺たちは初心を忘れずに。傍そばで見ていて馬ば鹿かだなあと思われるぐらいで丁ちよう度どいいんだ。
テレビに映ったりフィギュアにされたりするのは、事ここに至ってもまだ慣れないけどな。
「でもよお、急に髪が青くなって、レッドちゃんのツインテールは大丈夫だったのかな？」
愛あい香かやトゥアールと部室に向かおう──と席を立った俺は、クラスの男子の気になる発言に反応してしまった。
「大丈夫って、ツインテールがか？」
その男子たちの席に歩み寄り、質問する俺。男子は一冊の雑誌を見せてきた。
「おう。今週号に『やってはいけないツインテール』特集があってな。過剰な色染めがＮＧになってたんだ」
『週刊ツインテール』、二か月前に創刊された雑誌だ。今日は最新号の発売日だな。
今やテイルレッド関係の出版物は山ほどあるが、これは一般的なツインテールに焦点を当てて独自色を追究している。
俺も最初は時流に乗っただけの薄い誌面を危き惧ぐしたものの、いざ読んでみると充実したツインテールグラビアに読みやすいコラム、企画記事などバランスのよい構成だった。

　それ以来、しっかり購読している。末永い発刊を願うぜ。
「レッドは……染髪はしてないんじゃないかな」
　毛染めが髪にダメージを与えるぐらい、お洒しゃ落れに興味がない俺でもわかる。
　俺がお茶を濁すと、他の男子が意外にも「そうだそうだ」と賛同してくれた。
「あと、ツインテールにしすぎると頭皮が傷むって書いてるな」
　雑誌の持ち主の男子が続けてページを捲めくりながら、衝撃の事実を告げる。
「────何⁉　ツインテールにすると頭皮がダメージを受けるだと⁉」
　俺は目を見開き、雑誌を引き裂さかんばかりに力を込めた。
「観み束つか落ち着けー！　それ俺の本だぞ‼」
「あ、す、すまん」
　持ち主の男子に謝って雑誌を返す。
「お前は本当に、ツインテールのことになると熱くなるよなあ」
「そうそう、入学式の日からツインテール部に入るとか言ってたんだもんな。レッドたんが世界に現れる前からツインテール好きだったんだから、筋金入りだよ」
「つーか俺なんて、お前が言うまでツインテールって知らなかったからな。そしたらその日にテイルレッドが初めて世界に現れたんだぜ、類は友を呼ぶっていうか……」
　談笑していた数名の男子が、俺へと不思議そうに視線を向けてくる。
　俺は苦笑して曖あい昧まいに返し、自分の席に戻った。
　類は……ツインテールは友を呼ぶ、か。
　中学からの知り合いはあまりこのクラスにはいないけど、テイルレッドを通じてツインテールを好きになってくれたこの級友たちも、紛まぎれもなく俺の友達なんだよな。

「……それにしても……ツインテールが頭皮に……」
　小さく嘆息し、俺は自分の前髪の毛先を摘つまむ。
　女の身体からだから戻れなくなった時、俺は愛あい香かたちに色々なことを教わった。
　髪をタオルで擦こすって拭いたら駄目だとか、ドライヤーの熱風でガンガン乾かしたら駄目だとか。
　髪の毛のデリケートさは十分承知していたつもりだ。
　それでもツインテールが頭皮に……ひいては身体に悪いと聞くと、ショックも大きい。
　様子を見にか、愛香とトゥアールが俺の席へとやって来た。
「またあんたは、すぐ深刻に考えて落ち込むんだから」
　やれやれと肩を竦すくめる愛あい香か。トゥアールは、俺の机の上に胸を載せていた。
「あのねぇ、髪を結ぶと毛根によくないなんて、大昔から言われてることよ？　ツインテールに限らずね。今はツインテールが流は行やってるから、大きく話題に挙がっただけよ」
　どうやらさっきの俺たちの会話を聞いていたようで、愛香は自信満々に補足する。
「え、大昔から？」
「そもそも長い髪は、それだけで……結ばなくても自重だけで、根元に負担がかかるとも言われてますからね……」
　眩まばゆく輝く銀髪を誇るトゥアールも、達観したような口調で続ける。
「じゃあ、やっぱり身体からだにはよくないのか……ツインテールは……」
　俺のショックはさらに加重した。
　愛香は髪を下ろせば足首に届くほどの長髪だ。重さも相当だろう。

それをずっと結んでいるのだから、頭皮への負担は俺の想像を絶するもののはずだ。

しかし、そんな俺ごときの憂事など笑い飛ばすかのように、かつてのツインテールの大先輩であるトゥアールが教えてくれた。

「極端な話、人間が生きるということは、身体によくないことを日々重ねていくということですよ、総そう二じ様」

白衣の少女が……この世界で最高の叡えい智ちを持つ科学者が、科学でさえままならない人の生についてしみじみと呟つぶやく。

「だから女の子は、髪を、身体をケアするんです。一日でも長く、綺き麗れいな姿を見て欲しいですから」

トゥアールの言葉に同意するように頷うなずき、手の平で自分のツインテールを掬すくい上げる愛香。

「そうよ、そーじ。知ってるでしょ？　あたしは子供の頃から

ずーーーーっと、髪の毛には人一倍気を遣ってきたんだから！」

愛香は一呼吸置くと、囁ささやきかけるように言った。

「……そ、そーじが、ツインテールを好きになってから……ずっ

と……」

「総二様！　当然胸も大きければ大きいほど負担はかかります。私は幼女の頃からずっと胸のケアに人一倍気を遣ってきたんですけど──あ、何か言いました愛香さん？　ケアを怠おこたって胸が全滅してるように見えますよ」

愛香の言葉を遮さえぎるように、トゥアールも胸のケアの大切さを説いてきた。愛香は白目でこめかみをひくつかせている。

そろそろトゥアールと一戦やらかすかと思ったが、愛香は気を取り直して続けた。

「あたしは自分の髪を大事にケアしてるんだから。長時間ツインテールに結んでようが……それをそーじに触られようが、ビクともしないの」

「……ありがとう、愛香」
　マッサージ機に背中のツボを押されるような強烈な視線を背後に感じて振り返ると──
「……何よこれ永と遠わに見てたい……」
「愛あい香か、最近会長に押されてて心配してたけど、これはイケるわ……！」
　クラスの女子たちが、コンパスで描いたようにまん丸な目で俺たちを凝視していた。
　男子は男子で雑誌やスマホで顔を隠しつつもこちらをチラチラと見てくるし……みんな、愛香のツインテール講義に興味を持ったのだろうか？
「～～～～～～～～～～」
　愛香は何な故ぜか顔を真まっ赤かにしてツインテールを振ると、俺の鼻先に指を突きつけた。
「と……とにかく！　男のあんたの方が、ヘアケアは無む頓とん着ちゃくなんだから。髪の毛は大事にしなさいよ！」
「ああ、もちろんさ」
　そのアドバイス、しっかりとこの胸に刻むよ。
　世界のツインテールを守る前に、自分のツインテールを守っていかないとな。

　俺も愛香も、ツインテールのことで遠慮をすると、それを察したトゥアールがかえって気を遣うのは知っている。自分の前でも遠慮せずにツインテールの話題をして欲しいと、トゥアール自身も願っていた。
　そんなトゥアールでも、ツインテールの在り方にまで話が及ぶと、色々なことを思い出すのだろう。寂しさもあるはずだ。
　それでもトゥアールは、できるだけそんな顔は見せまいと振る舞って

いる。
　こんなことを言ったら、また怒られるだろうか。
　究極のツインテールを自分のものにできた、今の俺なら……。
　全ての戦いが終わったあと、この力をトゥアールのために使いたいんだ。
「……総そう二じ様」
　トゥアールの向ける気丈な表情に、俺は自分のささやかな夢を見透かされたのではないかと思った。
　──その気丈な表情を五秒で原子崩壊させ、目を血走らせると、トゥアールは自分の胸を掴つかんで俺にアピールしてきた。
「私の全身の全ての毛穴をケアしてください……!!」
「数百万はあるって話だけど⁉」
　愛香はトゥアールをむんずと掴むと、教室の壁へ向かって投とう擲てきした。
　無機物たる教室の壁に、あるはずのない毛穴が腕力によって生成される脅威。
　コンクリートの地肌から、トゥアールという名の毛が見事に一本植毛された。
　今日も陽よう月げつ学園高等部の修理班、ＤＩＹ研究会が活躍してくれそうだ。

◇

　俺と愛あい香かにトゥアール、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生。下校時も五人揃そろっているのは意外に珍しい。
　トゥアールは首をポキポキと鳴らしながら歩いていた。
「っは～、最近愛香さん、技のバリエーションがしょぼくないです

かぁ？」
「何やっても効かなくなってきてんのよあんたに!!」
　トゥアール、これ以上愛香を追いつめるな……他流派武術の奥義とか体得してきそうだ。
「もう一二月ですよ、じゅうにがつ！　四月から蛮族アーツをこの身に受け続ければ、誰だれだって慣れっこになっちゃいますよ！」
　簡単に言っているが、常人なら初回フアースト蛮族アーツだけで息絶え、ここまで健在ではいられなかったはずなのだが……。
「そっか。確かに、もう冬なんだなあ」
　しかし、それにしても今日は空が暗いな。天気予報では一日快晴だったんだけど。
　最初はうっすら曇り空だったのが、今はいつ本降りになってもおかしくない分厚い雲だ。
　一二月と聞いて、桜川先生はおお、と嘆声を上げる。
「お前たち、忘れていないだろうな。今月はお嬢様の聖誕祭があるんだぞ！」
　自分の聖誕祭では三〇歳に近付いた悲しみでこの世を呪のろっていた桜川先生だが、慧理那の誕生日を語る時は本当に嬉うれしそうだ。
「もう、尊みことったら……」
　慧理那のツインテールも、心なしかわくわくしているな。
「奥様も、一七歳とは女性にとって特別な年だと常々仰おつしやっています。お嬢様が一七歳を迎えられる今年は、盛大な催しになることでしょう。会場も最大規模のものとなるはずです」
「盛大でなくても……わたくし、家族と、友達がささやかにお祝いしてくださるだけで、本当に嬉しいですわ。会場だって、犬小屋一棟あればそれで十分ですのよ」
　まあ、一八歳までに結婚するっていうしきたりのある神しん堂どう家

では、特別にもなるよな。
　あと慧理那、お嬢様が慎ましさを尊とうとぶのは素晴らしいことだけど、誕生会の会場が犬小屋ではミニマムに過ぎる。

　通学路の途中で、慧理那たちと別れる。
　俺と愛香、トゥアールは慧理那の誕生日について話し合いながら歩いた。
　特に愛香は、夏に自分の誕生日を盛大に祝ってもらった分、慧理那の誕生日も楽しみで仕方がないようだ。
　しかし程なく愛香は、俺の心を窺うかがうように控え目に覗のぞき込んできた。
「……ねえそーじ。あたしのこと……幻滅してない？」
「え、何だよ突然」
　さらにそこで周囲を確認し、愛あい香かは意を決したように説明する。
「そーじ……この前、あたしの性格になっちゃったでしょ！　いっつもイライラして……エレメリアン殴なぐって……巨乳に嫉しつ妬として……最低なのバレちゃったし……」
　何だ、まだそんなこと気にしてたたのか。
「あれは普段俺が見ていた愛香の模倣なんだから、今さら幻滅も何もないだろ？」
「そうかもしれないけど！　同じ視点になったら……やばさを痛感しちゃうじゃん……」
　珍しく弱気に俯うつむいて、両手の指を突き合わせる愛香。
「愛香さん？」
　トゥアールが呼びかけるが、愛香は気づいていないようだ。
「あたし、偉そうなこと言ってるけど、自分のツインテールには臆病で

さ」
　あの日、手錠でそうしたように、後ろ手に組んで曇り空を見上げる愛香。
「知ってるでしょ？　あたし、ずーーーーーーーっと同じ位置でツインテール結んでる」
「ああ、もちろん知ってるさ。愛香のツインテールは、毎日全て記憶してる」
「……！」
　ツインテールに嬉うれしさを浮かべ、愛香は続けた。
「ちょっとだけ気分転換で変えてみようにも、勇気が出ないんだよね、似合わなかったらどうしようかなあって思って……」
「愛香さーん」
　今度はトゥアールが手の平を振って真横から呼びかけるが、やはり愛香は気づかない。
「だから……そーじがツインテールを結び直してくれて、嬉しかった」
　そうか。愛香は、俺がツインテールを下結びにしたことを喜んでくれたのか。
　あんな不器用な結び方、愛香にとっては子供の遊びみたいなもんだろうけど……俺も一生懸命やったから、認められたようで嬉しい。
「これからあたし、ちょっとだけ髪を短くしてみたりするかも」
　そして俺の行動が愛香の背中を押すことができたなら、本望だ。
「でも、絶対にツインテールにするわ。長さが変わっても、結び位置が変わっても、あたしはずっとツインテールにする」
　ツインテール以外にしている愛香なんて想像がつかないけど、それを聞いて俺も安心した。
　むしろ、自分で気分転換をした愛香を見てみたいような。

「だから――あたしのツインテールをずっと見ててね、そーじ」

　ツインテールを翻ひるがえして向き直る愛香。
　その真正面には、トゥアールの顔が。
「貧乳グオラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「わあああああああああああああああああ何よ近いわねーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　トゥアールは咆哮とともに胸を突き出して愛あい香かを威い嚇かくし、歩道の塀まで追いつめていく。
「すぐ隣で私が呼びかけてるのに何な故ぜ平然としょぼいラブコメを続行できるんですか!?　プログラムどおりにしか動けないゲームキャラですかあなたは!!」
「わかったわよ！　じゃああんたもそーじと話せばいいでしょ!!」
　何で俺と話すのが交代制になってるんだ、普通にみんなで話せばいいじゃないか……？
　トゥアールは咳せき払いをし、後ろ手に組むと、愛香と同じように空を見上げた。
「もうすぐ雪……降るんでしょうか……」
　しかし妙に不自然に小刻みなジャンプをし、胸を揺らして俺に見せてくる。
「私、自分の世界で本物の雪を見たことないので……この世界で見るのが楽しみです」
　そうか、トゥアールのいた世界には雪は降らないのか……。
　まだ雪が降るには早いから、今日の曇り空だと、どっちかっていうと雨かなあ。
「白い雪……手の平に載せたら柔らかく溶けていくんでしょうね……。

ところで白くて柔らかいといえば、私のおっぱいですね……手の平に載せてみませんか……？」
　穏やかな雰囲気が粉雪のように溶け、口くち端はによだれを滲にじませて俺に迫ってくるトゥアール。
「会話が超展開過ぎて成立してないのよこのお馬ば鹿か!!」
　すかさず愛香にインターセプトされた。
「あなたみたいなまどろっこしい会話してられますか！　こちとら性格変化の時におっぱい揉もまれるだけでお預けくって、今日までで体内のムラムラが積載量オーバーしてるんですよ!!」
「積載量オーバーの車は道路に出るんじゃないわよ!!」
「やっかましぁああああああああああ私と互角以上に性欲を持て余しているくせにいつまでいい子ぶる気ですか！　ブレス無しでも新戦士テイル性欲に変身できるぐらいいつでもどこでもムラムラしているあなたが!!」
「出会った時からすでにテイル性欲だったあんたには言われたくないっての!!」
　……まだ通学路でも学生の多い場所だから、それはそれは目立つ二人のじゃれ合い。
　俺は、唐突に背後から肩を組まれた。

「よっ！　総そう～二じっ!!」

　横を向くと、危うく唇くちびるが触れてしまいそうな間近に、女の子の顔。
　血相を変えて飛び退のいた俺が見たのは──結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。
　以前デートをした時のように、フレアスカートの印象的な私服だ。

　唯ゆ乃のと向かい合う俺に、四方八方から視線が向けられる。
　それまで愛あい香かとトゥアールのじゃれ合いを微笑ほほえましく見届けてすれ違っていた生徒たちが、愕がく然ぜんと立ち尽くしてしまっていた。
「…………マジか、あのとんでもない美少女……」
「嘘うそだろ……さすがに嘘だろ……!!」
「またあの観み束つかって奴やつの関係者なのか……またなのか!!」
「チクショーーーーーー！　世の中不公平って言葉にあと二段階ぐらい上の言葉作れよ、不公平って言葉じゃ今の気持ちを表しきれねーーーーーーっ!!」
　何だか知らないが、男子は悲しそうに走り去っていってしまった。
「だからどうして学校の皆さんは、私以外の女にはそういう学園ラブコメっぽいリアクションをしてくれるんですか!?」
　トゥアールが、顔を手で覆おおって嘆きをもらす。
「まさか……まさか私は本当は幽霊で、普通の人には見えないとか……自分でそれに気づいてないとか!?　どこですか、どこに伏線がありましたかーっ!!」
　……どんな凄すさまじい攻撃を受けても瞬時に回復するトゥアールの超人ぶり……それが幽霊の伏線だったのか……。
　涙涙のエンドロールを迎えるトゥアールを余よ所そに、唯乃はマイペースで俺に身体からだを寄せてくる。そこへ強引に身体を差し入れて俺たちを引き剥はがしたのは、愛香だった。
「前はそーじがお世話になったわね。今度はあたしが相手になるわよ？」
「俺様もたいがい喧けん嘩かは好きだけど、あんたほどじゃあねえかもなあ！」
　開口一番ファイトを申し込んでいくスタイルの愛香の頼もしさに、唯

乃がけらけらと八重歯を光らせる。……が、お節介を焼くように付け加える。
「いい加減〝お姉ちゃん〟ぶって過保護にすんのはやめときな。あんたの横にいる男は、しっかり成長してるぜ!!」
「ッ……そんなの、あんたに言われなくったって……!!」
　いよいよ唯乃に愛香が詰め寄ろうとした時、トゥアールが周囲を気にしながら俺たちにささめいてきた。
「……エレメリアンの反応です……。朝に続いて、今日二度目ですよ……」
　俺と愛香、トゥアールは揃そろって唯乃に視線を向ける。
「俺様が連れてきたわけじゃねえぞ!?」
「……ったく。とにかく行こ、そーじ！」
　今度は唯乃が、愛香を阻む番だった。
「悪わりィけど青の姉ちゃんで行ってくれや。俺様は総そう二じと話がある!!」
　一度我を通すとてこでも動かない唯乃の気質は、愛香も十二分に承知している。
　問答をしている余裕はないと判断したのか、唯ゆ乃のを睨にらみながらも踵きびすを返した。
「私は基地から結いわ翼ばね唯乃を重点的に見張っています。愛あい香かさん……」
「……わかったわ」
　トゥアールが上う手まくフォローし、愛香も幾分か落ち着きを取り戻した。

　愛香には負担をかけるが──俺は、こいつの真意を問わなければならない。

◇

「久しぶりじゃないか、唯乃。随分と心配したんだぞ」
　俺は通学路を外れ、慣れない道を唯乃と二人で歩いていた。
「総そう二じ……不思議な奴やつだな、お前は。会う度たびにいいツインテールになってってやがる！」
　男の姿の俺に言うのだ、当然心のツインテール──属性力エレメーラのことだろう。
「もちろん、俺様のポニーテールも常に進化してっけどな‼」
　子供のような負けず嫌いに、俺は思わず笑みがこぼれる。
　揺れるポニーテール。強い意志を秘めた、紅こう玉ぎよくのような瞳ひとみ。弾けるような笑顔。
　お前こそ、会う度に人間らしさが増していっているんだけどな……。
「まさか、究極のツインテールを超えて自分のものにしちまうなんて……さすがにそればっかりは予想できなかった！」
　全異世界に災いをもたらす存在、究極のツインテール。俺がその伝説どおりの悪魔になるのを食い止めようと、唯乃は俺に戦いを挑んできた。
　その後、俺は真の究極のツインテールへと到達したのだが──ようやくそのことを唯乃に伝え聞かせることができる。
　生身でエレメリアンと戦ったこと。ツインテールを得たティラノギルディとの戦い。
　唯乃が知らないことを、俺は全て話した。
　自分のことのように喜び、大空に諸手を挙げる唯乃。
「すげえよ！　俺様の完敗だ！　……ま、限界までお前を追いつめた、俺様のナイスアシストってとこじゃねえのか⁉」

　冗談めかして言っているが、確かに、俺が強くなれたのはこいつが全力で俺にぶつかってきてくれたおかげだと思う。
　だから──俺は、こいつに借りがある。
　今度は、俺が質問する番だ。
「……それで、今日はどうして俺に会いに？　まさか、今話したことを確認だけしに来たわけじゃないだろ？」
　俺もイースナも、ずっと唯ゆ乃のとは連絡が取れなかった。こいつがしばらく会わない間何をしていたのか、聞いておきたかったのだ。
「ああ。あれから色々やったおかげでな、首領のとこに行けるゲートを手に入れたんだ」
「ふうん………………って、何だって!?　首領って、アルティメギル首領だろ!?」
　コンビニで新商品でも買った報告程度の気軽さでとんでもない事実を聞かされ、俺は仰天する。ところが、唯乃の表情は次第次第に自じ嘲ちようめいた陰を帯び始めた。
「笑けることによ、待ち望んだモンを手に入れながら、俺様はこうして今も未練がましく人間世界を歩いてやがる。昔の俺様なら、その足で首領のとこに殴なぐり込んでただろうにな……!!」
　気恥ずかしそうに頭の後ろで手を組む唯乃。
「───多分、お前に会いたかったんだろうな」
　照れることなく真まっ直すぐに俺に向けられる視線に、思わず動どう悸きが早まってしまう。
「それに……もう一度飲みてえもんがあるんだよなあ」
「飲む？　何をだよ」
「オトナの飲み物さ！　学生のお前には早いかもしんねえぞ？　ま、本当は飲み物よりその店の粋なマスターの方を気に入ってんのかもな！」
　大人の飲み物……酒のことか？　だけど、こいつも見た目はどう見て

も十代だよな……。
「お前に気に入られる店主なんて、どんな人なんだか」
　筋肉質でダンディなヒゲの壮年男性……そんな店主像を思い描き、俺は苦笑する。
　けれど、今まで多くの異世界をわたり歩いてきたこいつが……この世界で、自分にとっての多くの心残りを作った。それは、俺にとっても喜ぶべきことなんだ。
「とにかく、首領とのリベンジマッチは俺様史上最大のバトルになるのは間違いねえからな。やり残しのねえようにしとかねえと！」
　俺は、唯乃の前に進み出ると、歩みを止めるように相対した。
「唯乃……首領と戦うのなら、俺たちと目的は同じはずだよな」
「おいおい、またそんな話かよ！　くどいな、お前も！」
　話の途中で俺の意図を察したのか、唯乃は面倒くさそうに頭を掻かいた。
「ああ。くどかろうがウザかろうが、何度でも言うぜ。俺たちの仲間になってくれ、結いわ翼ばね唯乃──フェニックスギルディ」
　こんなことを言ったらきっと反発するだろうが──唯乃は、俺たちを頼ってくれたんじゃないだろうか。むざむざ一人で帰すわけにはいかない。
「お前みたいな甘ちゃんじゃあ、首領との戦いで俺様の足手まといになるぜ。何だったらお前、首領ともまずは話し合いするつもりだろう‼」
　見透かされている──が、さすがに俺も今回ばかりは引かない。
「俺が戦いの役に立つかどうか気がかりなら、相手になってやる。今度こそ、俺のツインテールは負けないぜ」
　どうせ借りを返すと言っても、素直に受け取るような奴やつじゃない。
　だったら、こいつの好きな方法で押しつけてやるさ。

　案の定、唯ゆ乃のはわかりやすい喜色を浮かべた。
「ほおう、いつも煮え切らねえお前さんの方から喧けん嘩かふっかけてくるなんて、天変地異の前触れか？　今日は空からエレメリアンでも降ってくるかねえ？」
　俺だって、自分で自分の言動に驚いてるさ。でも、こういうのが一番いいって痛感してしまっているほど、お前とは通じ合ってしまうんだよ。
「それでお前がわかってくれるなら……俺はもう、戦いを逃げない！」
「……強くなったな……総そう二じ!!」
　すっかり人通りのない寂しい道に差しかかった時。
「それとも、俺様が弱っちくなっちまったのかな──」
　センチメンタルに絆ほだされるように、唯乃は言った。
　俺の目の前で、意思を持つように柔らかく舞う唯乃のポニーテール。
　唯乃は──不意に俺に抱きついてきていた。
　柔らかな二つの膨ふくらみが、華きや奢しやな腕が、きめ細かい肌の頬ほおが。
　炎の戦士とは思えない穏やかな体温とともに、俺に預けられる。



「唯ゆ乃の……？」
　戸惑い、身をよじる俺を、さらに強く抱き締める唯乃。
「黙ってされてろ。おめーら人間が悪いんだからな！　好きなヤツを見るとこうしたくなっちまうのは、人間のシクミなんだろ⁉」
　唯乃は、いつもこうだ。俺にストレートに好意をぶつけてくる。
「ああ……やっぱお前とこうすると、すげー気持ちいいぜ……。ずっとこうしていてぇよ」
　俺の肩に頭を預けながら、人間っておかしな生き物だな、と囁ささやく唯乃。
　この前、性格が変化してしまった時……別の心に自身を侵食されていく怖さと、俺たちは向かい合った。
　まして、全てが別のものに変わっていく恐怖など、想像するに余りある。
　身体からだが、心がどんどん人間に近付いていく。別の生き物になっていく。本当なら、唯乃は途方もない恐怖と戦っているはずなんだ。
　けれどこいつは、それさえも好奇心で楽しんでいる。受け容いれている。
　そんな唯乃が立ち止まってしまうほどに、アルティメギル首領は恐ろしい存在なんだ──。
　俺が無意識に、そのか細い背中に手を回そうとした瞬間。
　それは無用だとでも言わんばかりに、唯乃は突然自分の背中から炎の翼を噴き上げた。
「おーし、何かパワーチャージできたっぽいからよ、お言葉に甘えて喧けん嘩か買うぜ、総そう二じ！　またちょっくらデートすっか──っ‼」
　ロケット噴射のように空高く飛び上がる唯乃。いつかデートをした時と同じように、俺を空の果てへと連れ去ってしまった。

「っ……お前～～～～～～～……」
「喧嘩は広いトコに限るぜ！　いい場所にエスコートしてやらあ‼」
　凄すさまじい速さで飛翔を続ける唯乃。
　雲の上を飛んでいるため景色の変化は見て取れないが、すぐに当たりをつけていた場所に到着したのだろう。速度を弱めたかと思うと──
「おおっとぉーポニーテールが滑ったぁ～！　ハハッ‼」
　わざとらしく、無邪気に──唯乃は、抱き締めていた俺をあっさりと離してしまった。俺は、生身でのスカイダイビングを余儀なくされる。
「ったく……ちゃんとケアしてんのか、お前のポニーテール‼」
　俺は独りごちながら、眼下に視線を送る。ずっと気になっていた今日の曇り空──薄暗い雲が目前に迫っていた。
　数秒先に確実な死が待つほどの高空に身を委ゆだねながら、不思議と恐れはなかった。
　俺には、ツインテールという名の翼があるのだから。
　俺は大の字に身体を拡ひろげ、鬱うつ屈くつとした黒雲を突き抜けながら、右手に真紅のテイルブレスを可視化させる。
「────テイルオンッ‼」
　俺がテイルレッドに変身すると同時。目の前を落下する唯ゆ乃のは、エレメリアン・フェニックスギルディの姿へと変化した。
　ツインテールとポニーテール。二つの炎は流星となり、地上へと降り注いだ──。

　　◇

　先行したブルーは、現場の殺風景さに首を傾かしげる。
　背後に切り立った崖がけを臨のぞむ、広大な採石場跡だ。少し離れたところにまばらに木が立っているぐらいで、後は岩と石が散見されるだ

け。
　強力なエレメリアンが、ツインテイルズとの戦闘だけを目的に現れたのだろうか……？
　帰宅していた慧え理り那な、ちょうど仕事が終わったイースナも、連絡を受けて出撃した。
　本人の申告ではあまり得意ではない髪紐属性リボンでの飛行でイエローが、そして戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネに搭乗したブラックが、それぞれ別方向から飛翔してくる。
「お待たせちゃん！　レッドが別行動らしいが……何があったのじゃ？」
「また唯乃についてったのよ！　……トゥアール、ちゃんとそっちもモニターしてる!?」
　ブラックに答えるや否や、憤りを滲にじませた通信を基地のトゥアールに送るブルー。
『悔しいですけど、結いわ翼ばね唯乃に感化されて熱血が爆発してる総そう二じ様、超かっこいいです……』
　とろけるようなトゥアールの声を聞き、焦しよう燥そうをツインテールに宿すブルー。
「なっ……あとでその映像見せなさいよ!?」
『そしてあの淫いん乱らん焼き鳥、総二様に抱きついてます！　急がないと「総二、お前の串で俺様の鳥肉を刺して焼き鳥にしてくれ」とか言い出しかねませんよ!?』
「んのあああああああああああ、みんな、一秒でエレメリアンブッ倒すわよ!!」
　ブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネは足並みを揃そろえ、採石場を進む。
　やがて視線の先に、この広大な地に気合い負けするような、おろおろ

としながらぽつりと立っているエレメリアンの姿があった。
　そのエレメリアンを目にした途端、一同はぎょっとする。
「…………カンガギルディ……⁉」
　ブラックは相対すること自体は初見だが、その存在は知っている。まして一度戦ったブルーやイエローは、困惑して固まるのも無理はなかった。
『ちょっと何やってるんですか愛あい香かさん！　「あたしはもう油断しない（ｷﾘｯ）」とか言っといて、普通に逃げられてたみたいじゃないですか‼』
　前回カンガギルディを撃破したブルーへ、トゥアールの辛しん辣らつなツッコミが送られる。
「確かに倒したわよ！　あんただって見てたでしょ⁉」
『……はあ、まあ……。実は前回出現時と微妙に反応が違っていて、それで最初から同一個体だと認識できなかったのですが……』
　先ほどのツッコミは冗談だとばかりに、真面目に答えるトゥアール。
　一旦探知したエレメリアンのデータは、地下基地のコンピュータにデータベースとして保存される。そのアーカイブを参照しても、前回倒したカンガギルディのデータと一致していなかったのだ。
「では目の前のカンガギルディは、見た目が似ているだけで別のエレメリアンですの？」
　なおも当惑するイエロー。
「ははぁん、あの有袋動物カンガルーめ、貧乳に倒される前に隠された能力を見せるだのと言っていたが……つまりは復活能力を持っていたのじゃ。初めての能力に不慣れで、しかも前準備をする前に倒されたので、ここまで復活に時間がかかったというところじゃろう」
　そこでブラックは、前回のカンガギルディの最期の言葉を思い出したようだ。これから本領を発揮する、と。

『なるほど……複数属性の弊害で、再生時に別の属性が核になると考えれば、反応が変わってしまうのも納得できます。イースナにしてはいい読みですね』
「うむ、何せわらわが戦った焼き鳥はもっと瞬時に、もっとしつこく復活して襲おそいかかってきたからな！」
「何度も生き返ってくるなら、諦あきらめて消えるまで何度でも片付ければいいわね」
　むしろ絡から繰くりが明らかになって安あん堵どするブルー。文脈は滅茶苦茶だが、これほど恐ろしい脅し文句もない。
「……あ……え……？　うむ……？」
　要領を得ない戸惑い声とともに首を傾かしげるカンガギルディ。
　ブルーたちが納得している間にも、カンガギルディは一向に戦おうとする素そ振ぶりも見せない。状況を理解できないのだろうか。ただ混乱し、自分の手や身体からだに視線を送り続ける。
「……はあ、はあ……」
　ご主人様不在のこの状況で、イエローが唐突にはあはあし出した。
「アブソリュートリングッ！」
「イエロー!?」
　背中に火が点いたかのように狼ろう狽ばいして進化装備エヴオルブアームズを取り出すイエロー。疾走しながら武装を脱衣パージし、自身の背後に超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンを組み上げる。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　この広大な採石場ならば、地上でも存分に火力を集中できる。
　超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンの砲撃でオーラピラーを形成、エレメリアンを拘束バインド。
　普段の上空からの急降下や、逆に天空への飛翔を伴うキックとは違い、ほぼ水平方向への蹴しゆう撃げきを繰り出すイエロー。

「コズミックゥゥゥゥゥ！　ジャッジメントオオーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　当然、カンガギルディは何一つ反撃できずに爆散した。
　最後まで、自分の状況に戸惑っていたように見える。
　ブルーのお株を奪うかのような電撃的速攻に、ブルーも、ブラックとメガ・ネも呆あつ気けに取られた。
　着地ざまにアブソリュートチェインを解除し、反転してブルーたちに駆け寄るイエロー。
「す、すみません、一秒ではできませんでしたが……すぐに倒しましたわ……」
「そうだったそうだった！　今度こそバッチリ倒したわね！　急いでそーじのとこに行こ！」
　すぐにフォローするブルー。カンガギルディに呆気に取られて失念していたが、今は総そう二じの元へ一秒でも早く駆けつけなければならないのだ。イエローの判断は正しい。
　しかし、ブルーの宣言を遵じゆん守しゆしたというよりも、イエローは言い知れぬ焦しよう燥そうに駆られて攻撃を仕掛けてしまったようでもあった。
　ブラックは、消えゆく爆炎に右手を差し向け、決め顔で宣言した。
「アルティメギルよ、覚えておけ。再生なぞ、決して折れぬ心の前では無力なのじゃ！」
　それは再生能力を持つフェニックスギルディとの戦いに、最後まで諦あきらめなかったゆえの自負心なのだろう。
「今度はしっかりと属性玉エレメーラオーブを回収するのじゃぞ、貧乳。そうすればたとえ再生能力があろうと復活はできないはずじゃ」

「え……？　絶対領域属性アブソルテイフイールドの属性玉エレメーラ

オーブは、この前戦った時にちゃんと回収してるわよ」

「………………何じゃと？」
　瞬間。
　周囲の地面が崩れ落ちると錯覚するような、強烈な激震に襲おそわれた。
「ッ――!!」
　たたらを踏む四人。ところが、離れた場所に樹立している木々に視線を向けると、木の葉の一枚も揺らめいていない。
　感じた激震それ自体が――錯覚だったのだ。
　その理由はすぐに、背後から響く声によって知れる。
「再生は、決して折れない心の前では無意味……か」
　白いローブの戦士が、緩やかに歩みを進めてきていた。
　天上を歩み、人間世界に降り立つ神を見上げるかのような厳げん粛しゅくさに、ブルーたちは思わず後あと退ずさりしてしまう。このプレッシャーが塊かたまりとなって、先ほどブルーたちを叩たたいたのだろう。
「――――興味深い意見だ。後学に活いかすとしよう」
「神の一剣ゴー・デイア・ソード……!!」
　戦せん慄りつするブルー。
　グリフォギルディやワイバギルディと同じ白きローブをまとった、最強軍の戦士。
　しかし彼らとは、威圧感の桁けたが違う。質が違う。次元が違う。
　ローブを捨て去ったエレメリアンは――輝光を全身にまとい、粛しゅく々しゅくと名乗り上げた。
「我わが名はヴァルキリアギルディ。諸君ら罪つみ人びとに裁きを与えにやって来た」

　ブルーたちその場の戦士は全員、思考を凌りよう駕がする本能でその脅威を悟った。

　この戦士こそが真の──神の使徒なのだと。

キャラクター名鑑 036

ヴァルキリアギルディ



DATA

身長：218㎝

体重：255㎏

属性力：????

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）の女性エレメリアン。イースナが恐れていた破滅伝説そのものを使命と帯びた審判者。まさにアンチツインテール属性というべき恐怖の属性を持つ。その圧倒的な戦闘力だけでも十分にあらゆるツインテールの戦士を正面撃破できるが、彼女がもたらす裁きとは、長く戦い続けてきた戦士ほど完全に心を抹殺される凄絶なものだった。自分でも気づかずに、首領へ敬愛を超えた深い愛を懐いているようだが……？

第五章　蘇よみがえるツインテール。

　響く轟ごう音おん、噴き散る灼しやく熱ねつ──激突する信念。
「ポニーテールは世界を繋ぐ架け橋！」
　俺の炎えん刃ばブレイザーブレイドと奴やつの焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターが、炎の斬閃を空に重ね描く。
「太陽の！　戦士!!」
　律儀に名乗り口上を吠え猛たけりながら、剣速をさらに加速させる不死鳥。
「フェニックスギルディ！　剣斬!!」
　咆哮と共に振り下ろされる、炎剣の斬撃。俺はブレイザーブレイドの刃やいばの腹に手を添え、脳天へ閃ひらめく一撃を凌しのぎきった。
　口上の最後はアクセントが少し違ったので、おそらくは洒しや落れた言い回しにでもしたつもりなのだろう。
「ホンット強くなったなぁ、テイルレッド！　強化してねえ基本の姿でも、前とは全然違うぜ。おめーの魂たましいをアツアツに感じやがる!!」
　至高の一撃を止められながらも、快然とフェニックスラッシューターを肩に担かつぎ、俺を賞賛するフェニックスギルディ。
「俺自身は何も変わっていない……進化かわったのは、俺の魂ツインテールだ!!」
　迷いを抱かかえていたからなんて言い訳はしない、あの時俺は全力でフェニックスギルディに挑み、そして完全敗北した。
　だが、今はツインテールの在り方が違う。

「そしてあの時俺は、お前から自分を守るために戦っていた……。けど今は、お前を守るためにお前と戦っている！　その二つの差こそが、俺のツインテールの神髄だ!!」
　フェニックスギルディは納得したのかくっくっと笑い、フェニックスラッシューターの刃を深々と大地に突き刺した。
「てめえは誰だれかを守る時の方が強いってわけかよ……俺様はポニーテールなんだ、欲張りがすぎるってもんだぜ!!」
「大切なものを守ることに、欲張りすぎなんてあるものか!!」
　俺もそれに倣ならい、ブレイザーブレイドを地面に突き立てる。
　黒雲で唸うなっていた稲光が轟とどろいた瞬間――俺たちは、同時に天高く跳躍した。
「フェニックス！　キ
ィィーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッック!!」
　翼にまとった炎をロケットのように猛然と噴射させ、フェニックスギルディは必殺の蹴しゆう撃げきを繰り出す。
「プログレスバレッター!!」
　対する俺は、プログレスバレッターをフォースリヴォンへと装着した。
　フォーラーチェインに形態変化チエインカスタムし、蹴けりの体勢のまま最大加速。
　加速の頂点をツインテールに感じた瞬間、ライザーチェインへとチェンジ。背負ったバックパックの噴射口を逆向け、さらなる加速を総身へ送り込む。
　ツインテールの矢となった五体が、フェニックスギルディへと突とつ貫かんした。
　突破した音の壁すら焼き尽くし―二つの蹴撃が、双方の右足が邂かい逅こうする。

激突点から螺ら旋せん状に炎が渦巻き、やがてそれは巨大な火柱となった。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
「おらああああああああああああああっ!!」
俺もフェニックスギルディも、拮きつ抗こうを破るべく空中でさらに蹴り足へ力を込める。それでもなお、互いを蹴り抜けない。
ついに行き場を失った二人分の炎が、宙空で大爆発を巻き起こした。
互いの炎に満身を灼やかれながら、俺とフェニックスギルディは大地へと急墜する。
基本中結形態ノーマルチエインに戻った俺は、落下ざまに身体からだを反転させ、地面に突き立っていたブレイザーブレイドに手を伸ばす。見据えた真ま表おもてで、不死鳥もまた炎剣へと掌てのひらを突き出していた。
武器を手にした刹せつ那な、互いに着地と同時に地を蹴る。
身を包む炎を後方へと吹き散らしながら、俺たちは疾しつ駆くした。
一瞬早く、俺の肩口目掛け袈け裟さ懸がけに下ろされる焔えん銃じゅう剣けん。そこへ俺は、ブレイザーブレイドを真っ向から突き込む。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
ブレイザーブレイドの刀身が二つに割れて展開。その刃やいばと刃の只ただ中なかに、フェニックスラッシューターを挟み込むようにして誘いざなう。噴き上がる真紅の光波剣に猛烈な勢いで跳ね飛ばされ、フェニックスラッシューターはフェニックスギルディの手から弾かれた。
強引な戦法が祟たたり、ブレイザーブレイドから甲かん高だかい金属音が爆はぜる。二つに分割した刀身の片刃が割れてしまい、弧を描いて飛んでいった。
俺は構わず、弾かれて眼前を舞うフェニックスラッシューターを左手で掴つかみ寄せた。

　フェニックスギルディ目掛け、右手の破損したブレイザーブレイドを一気に振り下ろす。
「グランド！　クロスブレイザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　間かん髪はつ容いれず、逆手に持った左のフェニックスラッシューターで回転ざまに横切りを重ねる。
「ッ……お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ⁉」
　炎の大十字グランドクロスをその身に刻まれ、フェニックスギルディは大爆発を起こした。
　もちろん、こいつはたった一回倒した程度で決着する奴やつじゃない。
『──なかなか痛快なモンだな、俺様てめえの武器でしてやられるってのはよ……！』
　炎の中から響きわたる声は、喜き悦えつに弾んでいた。
　爆圧が内側に収束するように激しく燃え上がる。
　フェニックスギルディは不死鳥の面めん目もく躍やく如じよとばかり、即座に完全再生を果たし、変わらぬ姿で俺の前に立ちはだかった。
　互いに後方へ飛び、健闘を讃たたえ合うように視線を交わす。
「剣けん閃せんを先読みされちまった……俺様の癖くせなりなんなり、わかってきた感じだな？　レッド」
「それだけお前とは、何度も戦ったってことさ……再生能力は未いまだに慣れないけどな」
　フェニックスラッシューターを放り返しながら、俺は素直に打ち明けた。
「ああ、俺様だけにしとけ……。他に再生復活ができる奴がいても、魂こころまで元通りなんてなあ、そうはいねえだろうからな。本当の亡者と戦うってのは、気が滅め入いるぜ!!」

　含みありげに返すと、フェニックスギルディは奴の変身アイテム──ポニーテール属性のエンブレムが刻まれたレリーフを取り出した。
「よっしゃあ、そろそろ俺様も全力で行くぜ！　お前もアルティメットチェインってのを見せてくれよ!!」
　来る──奴の、テイルギア・ＴＹＰＥ□Ｐ！
　受けて立つぞ。今の俺には、お前の信念を受け止めるだけのツインテールがある！
　左腕を真横に突き出し、俺の進化装備──ツインテイルブレスを出現させようとした瞬間。
　言い知れぬ予感に衝つき動かされ、俺は思わず空を見上げた。
　稲妻……？　違う！　黒雲を突き抜け──光が落ちてくる!!
「────ッ！」
　光の正体は、天より降り注ぐ斬撃。
　完全に意識の慮りよ外がいで閃ひらめいたその一斬を、俺は何とか破損したブレイザーブレイドで受け止めていた。
　俺に弾かれた黒い塊かたまりは、地面を爆裂させて着地した。
「ぐっ……な、何……だ────」
　俺は、土煙の中に浮かぶシルエットを凝視する。
「新手のエレメリアンか!?」
　フェニックスギルディもまた、突然の襲撃者を警戒する。
　雄お々おしく閃く黒いローブに、見上げるほどの巨体が包まれていた。
「そのローブ……お前、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンか!?」
　しかし叫んですぐ、俺は違和感に気づいた。そう──黒いのだ。
　神の使いであることを誇示するかのように純白に染め抜かれていた神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンのローブと違い、この剣士

のまとっているのは不吉なまでに黒いローブだ。

　まるで……深く暗い地獄よりの使者だとでも言わんばかりに。

「□□□□□□」

　ローブのフードの中で、紅あかい双そう眸ぼうが力強く光を灯ともした。

　俺は思わず、乱入者の攻撃を受け止めたブレイザーブレイドを見つめる。

　……何だ、今の感覚は。

　正々堂々を旨としながら、実力を試そうとあえて奇襲を仕掛けてくる剛胆さ──。

　俺の身体からだの全細胞が……全ツインテールが、今の一撃を覚えている……!!

「どこの誰だれだか知らねえが、俺様とテイルレッドの宿命の勝負を邪魔すんじゃねえ!!」

　フェニックスギルディが、謎なぞの剣士へと不服をぶつける。

　返答だとでも言わんばかりに、剣士は得物を地面に突き立てた。

　まるで、宿命は我われにもあり──と豪語するかのように。

　その武器を目にした瞬間。俺とフェニックスギルディは、同時に稲妻に打たれた。

「っな……」

「……何……!?」

　剣士が手にしていた、自身の身体ほどもある巨大な武器の正体。

　それは……竜の牙きばの如き、乱れ刃の大剣だった。

　嘘うそだ、見間違いに決まってる……その武器は───!!

　黒ローブの戦士は俺の驚きよう愕がくを一いつ顧こだにせず、豪快に地面を蹴けり抜いて迫撃してきた。

　襲おそい来るは、フェニックスギルディのがむしゃらな剣けん閃せん

を上回る、洗練された神剣。
「く……う……!!」
　すんでのところで我に返り、俺は片刃となった炎の剣で応戦した。
　斬きり結んだ剣と剣から迸ほとばしる光が、宙に銀河を創造する。
　ツインテールの星座を目に焼き付けながら、俺は一心不乱に剣を振るい続けた。
　破損したブレイザーブレイドでは、いつまでもこの猛攻を受け止めきれない。
　しかし。
　俺はこの太た刀ち筋を知っている。
　俺の身体が、こいつを覚えている。
　俺のツインテールが、こいつを感じている――――!!
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
　俺は渾こん身しんの力でブレイザーブレイドを打ちつける。
　間断無く襲い来る斬撃を弾き返した代償に、残っていた片刃も衝撃で砕け折れて宙を舞う。
　そして迸った剣閃は、黒のローブを斬り散らしていた。
　ついに、今まで斬り結んでいた黒ローブの剣士の全容が明らかとなる。
　仁王立ちしているだけで周囲を制圧するかのような存在感。
　軽々と手にする大剣。ローブから解放され、存分にたなびくマント――。
　現れしは、歴戦の傷を身体からだに刻みし龍神。

　俺をもっとも苦しめた強敵の一人――ドラグギルディだった。

「ド、ドラ…………」

「――ドラグギルディ⁉」
　俺とフェニックスギルディは、どちらからともなくその名を叫んだ。
　両者とも、思い描いていたとおりだが……当たるはずのない、当たってはいけない予見だからこその衝撃なのだろう。
「お前は……本物なのか⁉」
　俺の質問に答えず、ドラグギルディは勇然と立ち尽くしている。
　これまでただの一体として同一個体のエレメリアンは出現したことはなかったが、見た目がそれなりに似ている戦士は幾度も遭遇した。瓜うり二ふたつの別戦士の可能性はないだろうか。
　あるいは――。
　俺は、真横で戦慄わなないているフェニックスギルディに問いかけた。



「確かお前、エレメリアンを亡霊みたいにして操る能力を持ってるんだろ!?」
「ああ、ミラージュリヴァイブ……俺様の能力だ。黒の嬢ちゃんたちから聞いたのか……？　だが俺様の力で復活させる戦士は、オバケみてーにフラフラしてるんだぜ。あんな意い気き軒けん昂こうとした亡霊なんかいっかよ!!」
　フェニックスギルディは、自身が無限復活できるだけでなく、倒されたエレメリアンをも復活させて使役する能力も持つという。異世界でこいつがイースナと戦った時にその能力を使い、俺たちが倒した貴の三葉ノー・ブル・クラブを次々と復活させたらしいが……。
「……貴の三葉ノー・ブル・クラブ……」
　俺は思わずそう呟つぶやいていた。不意に、夢の中で俺に必死に訴える双子姫の言葉を思い出す。
『『──ノーブ……ラ……だ───!!』』
　ノーブ、ラ……。
　ノーブル、クラブ───ロエルたちは、貴の三葉ノー・ブル・クラブと伝えたかったのか!?
「……ま、まさか……いや……」
　ロエルたちの世界はもう侵略を受けることはない……それなのにあれほど切羽詰まって伝えようとした何かとは、俺たちの世界に迫る危機じゃないのか。
　じゃあ、ロエルたちが貴の三葉ノー・ブル・クラブと口にしたのは──
「おい、ぼさっとすんなレッド!!」
　フェニックスギルディに檄げきを飛ばされ、俺は視線をドラグギルディに戻す。
　目を合わせているだけで、正面から槌つちで打たれるかのような強烈なプレッシャーを感じる。

正体が杳ようとして知れない相手を前に、俺とフェニックスギルディは肩を並べ身み震ぶるいした。
「お前の仕し業わざじゃないなら、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンの企たくらみか!?」
「それしか考えられねえ……。けど神の一剣ゴー・デイア・ソードだろうと、ドラグギルディほどの戦士を蘇よみがえらせるなんて絶対にあり得ねえ。精巧な模倣品コピーって言われた方が、まだ可能性があるぜ!!」
模倣品……確かに目の前のドラグギルディは、かつて俺の心を熱くした、胸のすくような豪快な言葉を一言も発しようとはしない。
「じゃああいつは、魂たましいがない模造の戦士なのか……？」
今し方フェニックスギルディが言ったばかりだ。心もろとも完全再生を果たすのは、容易なことではないのだと。
ドラグギルディは、そんな俺たちの疑心など一いつ顧こだにせず。
割れて地面に突き立ったままの、俺のブレイザーブレイドの刀身を凝望していた。
──まるで、遥はるか前世の記憶を手た繰ぐるかのように。
「□□□□□!!」
そうだ……ドラグギルディとの戦いの終局……俺は絶体絶命の危機に追い込まれた。
その時弾き飛ばされ、地面に突き立ったブレイザーブレイドが……あの日の幻影が、そこに突き立つ刀身の破片にはっきりと重なった。
魂たましいがない……？　違う、目の前のこいつは──あの日そのままに今ここに立ち、あの日の戦いを見ている!!
恐怖ではなく郷愁が、俺の身体からだを金縛りにかける。
戦意を見せない俺に焦じれたかのように、ドラグギルディは踵きびすを返し、背を晒さらした。

「！　待て……お前は誰だれだ！　俺の知っているドラグギルディじゃないのか!?」
　背中に声をかけたその時、一陣の風がドラグギルディのマントを翻ひるがえした。そして、その逞たくましい背中が露あらわになる。
「っ……その、背中は──!!」
　俺のツインテールが、確信に揺らめく。
　女の子にお風呂で背中を流してもらうために、傷を受けるならば正面のみと己に課し。
　綺き麗れいな背中を守り抜いてきたという豪傑がいた。
　そして目の前の戦士の背中には―たった一つの背中傷が、真新しく袈け裟さ懸がけに奔はしっていた。
　俺が―テイルレッドがつけたものだ。
「□□□□」
　もう一度だけ僅わずかに振り返ったドラグギルディと、視線が交錯する。
　漢おとこは背中でツインテールを語る。これを見たならば、言葉は不要と。
　ここへ現れた時と同じように、天高く飛翔して去って行くドラグギルディ。
「……あ……」
　俺も、そしてフェニックスギルディも……足を地面に縫ぬい止められたように、ただその場に立ち尽くすことしかできなかった。
　俺にとってドラグギルディが特別な敵だったことは元より、フェニックスギルディも事あるごとにドラグギルディを認めていた。俺よりも付き合いは長いのだろう。
　しかし、俺と違って今のあいつとまだ直接剣を合わせていないフェニックスギルディは、存在の真しん偽ぎが偽に傾いたままのようだっ

た。
「ッ……ここまでおちょくっといてトンズラか!?　やっぱ模倣品コピーにはあいつの熱い魂たましいは再現できなかったようだな……当然だが……!!」
　違う。あのドラグギルディは──模倣品なんかじゃない。
　コピーで技量は同等にできても、魂の記憶までは再現できないはずだ。
　皮肉にも、目の前の生き証人──フェニックスギルディという、心と身体の全てを完全再生させて挑んでくる相手と何度も戦った経験が、俺の憶測を後押ししていた。
　俺との勝負に水を差されたフェニックスギルディは、憤ふん懣まんやるかたないと地じ団だん駄だを踏む。
「くそお、全然燃え足りねえ！　あんの偽者野郎、見事に冷や水ブッかけやがって！　ただじゃおかねえぞ!!」
　ともかく、ドラグギルディは転送ゲートを通って消えなかった。基地かどこかに帰還したのではなく、単に俺たちの傍そばから離れただけなのだとしたら……追わなければまずいぞ。
　その時、トゥアールから火急の通信が入る。
『総そう二じ様、大変です！　愛あい香かさんたちが再生したカンガギルディを倒したんですが……そこに神の一剣ゴー・デイア・ソードの増援が到着しました！　恐ろしい程の属性力エレメーラの強さを探知しています……』
「……ちょっと待て、神の一剣ゴー・デイア・ソードもやばいけど、その前……再生!?　カンガギルディが!?」
　このタイミングで、別のエレメリアンも再生を……穏やかじゃない情報だ。
　トゥアールに詳しく話を聞くより、急いで愛香たちに合流すべきだ

な。
「フェニックスギルディ、勝負はお預けだ。ブルーたちのところに、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンが現れたらしい。それも、とんでもない強さの奴やつが」
　俺は事情を説明して休戦を呼びかける。念のため、カンガギルディのことも加えて。
「何ィ⁉　他のエレメリアンも再生しただぁ⁉　……ぬう……もしかしてあいつが……」
「何か知ってるのか？」
　フェニックスギルディには何か心当たりがあるようなので、確かめておく。
「……件くだんの首領のとこに行くゲートな、あるエレメリアンに協力する条件でもらったもんなんだよ。その協力ってのがまあ……俺様の能力を一つ、分析させてやることだったんだが……」
　子供が悪戯いたずらを告白するように、悪びれず白状するフェニックスギルディ。
「お前、自分の能力を他のエレメリアンに提供わたしたのかよっ⁉」
「ミラージュリヴァイブは元々性に合わねえ能力だったから、頓とん着ちやくしてなかったんだよ！　それにさっきのドラグギルディは、明らかに技量だけは完かん璧ぺきだったように見えた！　俺様の能力じゃあ、他のエレメリアンの完全複製なんてことはできねえぜ⁉」
「お前の力と別のエレメリアンの力が合体して、もっと強力になる可能性はあるか」
「……ゼロじゃねえな……いずれにしろ、俺様の能力がもう利用されてるのかもしれねえ」
　最近アルティメギルは、属性を複数重ね合わせて強化する方法を取っている。

　フェニックスギルディの能力が他のエレメリアンの強化に用いられたのだとしたら、とんでもない脅威になるぞ……！
「色々めんどくせえことになってきたみてえだな……しゃあねえ！　テイルレッド、お前は青の姉ちゃんたちのとこに行け！　ドラグギルディもどきは、俺様が追う!!」
　正直、その申し出はありがたい。ドラグギルディも絶対に放っておけないからな。
　そしてフェニックスギルディは、苦虫を噛かみ潰すような表情で語った。
「一つ教えておくぜ。神の一剣ゴー・デイア・ソードで本当にヤバいのは、前線に出てくる戦士じゃねえ。一体ひとり、混こん成せい残ざん存ぞん軍ぐんに出張ってきて、滅茶苦茶やってるヤツがいやがるんだ……。そいつは、エレメリアンを実験材料としか見ていねえ危険な奴だ!!」
　！　やっぱり……混成残存軍の戦士の強化が我わが身省かえりみぬデタラメなものだったから、よからぬ入れ知恵をする奴やつが現れたんじゃないかとは思ってたが……！
「──最高科学者マーメイドギルディ……この名前を覚えときな、テイルレッド!!」
「わかった、ありがとう！　ドラグギルディの方は頼んだぞ!!」
　すぐに駆け出した俺だったが──言い知れぬ不安に足を止めた。
　このまま別れたら、二度とこいつと会えなくなってしまうような気がして──。
「このゴタゴタが終わったら、必ず決着を着けるぞ、フェニックスギルディ！　約束だ!!」
　釘くぎを刺しておかないと。こいつはすぐどっかに行く、気紛れな渡り鳳凰どりだからな……。

　不安の正体を、そう結論づけることにした。
「へっ……ホント言うようになったな！　もちろんだ！　次こそ心置きなく戦やろうぜ!!」
　戦友に向かって力強く頷うなずくと、俺は右手にプログレスバレッターを出現させた。
　分割して下結びしたツインテールに合体させ、空高く飛び上がる。
「───チェンジ……フォーラー!!」
　空中で形態変化チエインカスタムした俺は、高速飛翔で一気にブルーたちの元に向かう。

　この先に待つ嫌な予感に、俺のツインテールが鳴動する。
　かつてない絶望的な予感に───。

◇

　空の彼方かなたに消えていくテイルレッドを、フェニックスギルディは頼もしげに見送った。
「……ったく、本当に逞たくましくなりやがって……」
　気合いを入れ、ドラグギルディの消えた方角へ飛び立とうとするフェニックスギルディ。
「あいつめ……許さねえぞ。ドラグギルディを中途半端に複製してまで、俺たちの勝負を邪魔しやがって!!」
「────中途半端でも、複製でもないかもよ？」
　その背に、今し方怒りを燃やしたばかりの女性の声がかけられた。
「っの……マーメイドギルディッッ!!」
「はぁい、何日かぶりー」
　憎にく々にくしげに振り返るも、フェニックスギルディは沸ふつ騰と

うしかけた怒りを押し込める。
　考えようによっては丁ちよう度どいい。ドラグギルディを追跡する手間が省けたというものだ。
「やっぱりてめえの仕し業わざか……！　おい、俺様のミラージュリヴァイブを妙な悪ふざけに使いやがったな！　単に研究に使うだけで、実戦では使わねえって契約だろうが!!」
「もちろん、研究に使ったわよ。その成果を、他の誰だれかが勝手に使っちゃったのかな？」
　マーメイドギルディは、悪びれもせずに言葉遊びで契約を反ほ故ごにする。
「すっとぼけんじゃねえ！　中途半端でも複製でもねえなら、俺様の能力ミラージユリヴアイブの範はん疇ちゆうを完全に超えてやがるだろうが!!」
「あ～、一つだけ謝っておくわね。私があなたの能力で本当に欲しかったのは、完全再生能力の方なの。正直に言ったら断られるでしょうから、そっちはこっそり研究しちゃった♪」
　──何という、救いがたき卑劣。
　自分はかつて総そう二じに言った。心の生命体エレメリアンは、強者であるほど心も尊とうとく在るのだと。その願いにも似た信念が、このマーメイドギルディによってはっきりと裏切られた。
「てんめえ……！」
　堪忍袋の緒が切れ、詰め寄ろうとするフェニックスギルディ。
　ドラグギルディの追跡は後回しだ。この女狐めぎつねはここで打倒する。
　その時──マーメイドギルディの背後から、謎なぞの影が躍り出た。
「！　そ、そいつは────!!」
　驚きよう愕がくに足を止めてしまうフェニックスギルディは、その戦

士の放った攻撃に──巨大な光の中に呑のみ込まれていった。

◇

　戦いを終えたばかりのブルーたちの前に、恐るべき威圧感を伴って現れた神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士。
　白いローブを捨て去り、露あらわになったその身体からだは──これまでのエレメリアンとは一線を画する威光を放っていた。
　神話の世界で聖戦を繰り広げる戦いくさ女め神がみそのままの神こう々ごうしさ。
　光り輝く神の鎧よろいを身にまとったかのような全身が、レッドなきツインテイルズを竦すくませる。
　アルティメギルの戦女神・ヴァルキリアギルディは、立ちはだかるテイルブルーを興味深そうに睥へい睨げいした。
「……ほう、珍しいな。そのツインテールでそれほどの力を得られるとは」
「何よ、あたしに言ってんの……⁉」
　ヴァルキリアギルディは女性エレメリアンの多くの例に漏もれない、豊かな胸を誇らしげに張っている。
　それを見て、ブルーは戦意を鼓舞させた。
　総二は幻滅などしていないと言ってくれたのだ。自分でも厄介だと感じているこの怒りだが、敵にぶつけてやるのならば存分に役に立つ。
「ツインテールの研けん鑽さんを、よく積んでいる。二流どもでは力及ばぬわけだ」
「あんたも今、その力及ばなかった二流の仲間入りよ‼」
　ブルーは啖たん呵かと同時にフォースリヴォンに触れ、ウェイブランスを手にする。そのまま人間でいう心臓位置めがけ、一直線に刺突しと

つを放つ。
　さながら流水のように鮮やかな槍そう撃げきは、ヴァルキリアギルディが無造作に胸の前にかざした掌てのひらによって阻まれる。
　苦もなくウェイブランスの穂先を掴つかんで握り込むと、氷細工のようにあっさり粉々に砕いてしまった。
「……!!」
　穂先が完全に消えたウェイブランスを目まの当たりにし、絶句するブルー。
「これが君の得物か、何と脆もろい……。髪の毛一本で突かれた方が、まだ痛むわ」
　掌に残った破片を払い撒まくヴァルキリアギルディ。
『あーーーーーーーーーっまた考え無しに振り回して壊すー!!』
　メンテナンス担当のトゥアールの悲痛な叫びが響く。
「仕方ないでしょ、こいつ──」
　強い、と言いかけ、ブルーは言葉を呑のんだ。
　仲間と共有するには、この脅威は大きすぎる。
　トゥアールにはこの威圧感は伝わっていないかもしれないが、これまでの武器破損とはわけが違う。手抜きで繰り出した攻撃ではない、全力の刺突がああも容た易やすくあしらわれたのだ。
　イエローがヴォルティックブラスターを構え、ブラックがダークネスグレイブを手にし。遅れてメガ・ネも指の機銃を構える。
　臨戦態勢を強行するツインテイルズの元へ、待ち望んだリーダーが駆けつけた。

　　◇

　俺が現場の採石場に駆けつけた時、すでに戦闘は口火が切られてい

た。
「みんな、大丈夫かっ!!」
　ブルーの足元に散らばる砕けたウェイブランスを見て、俺は敵の戦力を即座に思い知る。
「君が究極のツインテール……最強最悪の厄やく災さいか。神に刈り取られる覚悟はできているのか」
　しかし、その口をついて出る神の一剣ゴー・デイア・ソードお得意の傲ごう慢まんな文句に、俺はかえって冷静になっていくのを感じた。
「その手の口上で脅したいなら、もう少し早くこの世界に来るんだったな。俺はとっくに開き直っちまってるぜ」
「……見た目の幼さと裏腹、強き少女だ……。だが脅しで揺さぶって優位に立とうとしていると思われるのは、実に心外だ。君の精神こころがどれほど強かろうと……私の存在そのものもまた、君たちにとっては災厄なのだよ」
　ヴァルキリアギルディは責務とばかりに、高らかと名乗りを上げた。
「我わが属性は無毛属性アトリキア――ツインテールの断だん髪ぱつ者だ」
　俺は驚きよう愕がくに身を竦すくませ、独白のように聞き返していた。
「アトリキア……無毛ってお前、もしかしてその属性……！」

「―――ハゲだ」

　戦いくさ女め神がみは、氷のような怜れい悧りの相そう貌ぼうに、自負心を迸ほとばしらせる。
「ハ……ハゲ…………」
　動揺し、無意識に後あと退ずさる俺に、ヴァルキリアギルディは追い

打ちをかける。
「そう、ハゲだ。スキンヘッド──潔くつるんつるんにした、聖なる髪型だ────!!」
　俺は歯は噛がみし、明かされた属性に震しん撼かんした。
「馬ば鹿かな……確かに髪型といえるけど、髪が……髪が無いじゃないか!!」
「そう、馬鹿なこと……ふざけた生命だ。それはこの私が誰だれよりも自覚している」
　ブルーたちはそれまでの武者震ぶるいが止まり、ぽかんと口を開けて立ち尽くしている。
「……だがこの愛に戯たわむれはない。無毛は何よりも美しい。君たち人間は清せい廉れんを尊とうとぶ生命でありながら、何なに故ゆえに無毛という名の無垢な新雪を拒こばむのか」
　本気の目だ。こいつは、本気でつるつるてんにした頭を愛している──!!
「やはり……私の掲げる愛が恐ろしいか、ツインテイルズよ」
「アホすぎて怖──」
　ブルーの言葉を遮さえぎり、ヴァルキリアギルディはなお嘲あざけりを続ける。
「恐ろしかろうな……ツインテールを愛する君たちにとって、髪を剃そり落とすのは死も同然。無論、本能の根幹にツインテールへの愛を刻まれた全てのエレメリアンにとってもな……」
「お前はどうなんだ。ツインテールが好きなのにスキンヘッドが好き……その大いなる矛む盾じゆんをどう抱かかえている!!」
　俺は断罪するように言葉をぶつける。
「苦しんだとも。組織アルテイメギルにとって、自分は生まれてきてはならない存在だったのだからな。いっそすぐに、この命そのものが無と

剃り落ちてしまえば──幾度そう絶望したことか」
　ヴァルキリアギルディは小揺るぎもせず、乗り越えた罪を吐と露ろした。
「だが、首領様はこんな私に生をお許しくださった……そして、アルティメギルに牙きば剥むくツインテールを剃り滅ぼすという、私にしかできない大いなる使命を──審判者として生きる意味を与えてくださった‼」
　アルティメギル首領。これまで幾度とその名を聞いたアルティメギルの絶対存在だが、今までのエレメリアンは、敬愛すべき上司のように語る程度がせいぜいだった。
　しかし、このヴァルキリアギルディは違う。
「大恩ある首領様を御お守まもりすることこそ我わが存在意義！　そのためならば、どれだけ人類に恨まれようとも私は無毛を振りまく‼」
　こいつは、自身の存在を肯定してくれた首領を──神以上の存在と崇拝している。
「全人類のツインテール属性を……スキンヘッドにするつもりなのか⁉」
「アルティメギルにツインテール属性を献上できぬ世界など、つるつるに消滅するが道理。それが神の意志なのだ……‼」
　ワイバギルディとの戦いで俺が感じていた無への不安──ノーツインテールとは、まさしくこいつの属性、無毛のことだったんだ。
　他者の愛を否定する権利は俺にはない。
　けれどツインテールを愛する者として、無毛を肯定することもできない。
　心通わせたくとも決して交わらない……人間とエレメリアンのすれ違いは、ここにひとつの極点を迎えたように感じる。
　来るべくして来た戦い──これが大一番。俺たちツインテイルズの戦い

の正念場だ!!
　俺は自身と仲間の、そして全てのツインテールを愛する人たちの心を叫ぶ。
「たとえ神だろうと──俺たちのツインテールを滅ぼせはしない!!」
　そして俺たち五人は、決然と並び立った。
　ヴァルキリアギルディよ、お前は知っているのか。
　ツインテールを愛する女の子が、髪の毛の一本一本にどれだけ愛を込めているのか。
　どれほどの丹精を込めて磨き上げ、ツインテールを育はぐくんでいるのか。
　自分たちの意にそぐわぬからと容た易やすく無毛をもたらす貴様を、俺は絶対に許さない!!
「いいや───今、滅ぶのだ」
　ヴァルキリアギルディが緩やかに右手を振りかざす。微細な光の粒子が収束し、長大な得物を形作っていった。
「テイルブルーとやら。君に本物の槍やりというものを見せてやろう」
　その手に、白銀に輝く長大な槍が握られる。
　まさに神しん槍そう──。過剰な装飾など一切ない、艶やかなる純銀の柄えと刃やいば。それは、一本残らず髪の毛を剃そり去った、荘厳なる頭頂を思わせた。
「この神槍〝頭頂照らす神光ラグナロク〟が、生きとし生ける生物全ての心の毛髪を剃り滅ぼす!!」
　白銀の神槍が、ヴァルキリアギルディの手で天に戴たい冠かんされる。
　神に唾つばする地上の生命全てを剃り落とさんと、聖なる光が地上へ降り注がれる──。
『皆さん！　その姿では防ぎきれません、最強変身チエインエヴオルブ

で対抗してください!!』
　トゥアールの通信が聞こえた瞬間、俺も全員に向けて叫んだ。
「みんな、いくぞ！」
　視界が聖光で白滅してく中、ツインテイルズ最強戦力が解き放たれる。
「エターナルパッド！」
「アブソリュートリング！」
「「インフィニットコンバイン!!」」
　ブルーが、イエローが、ブラックが、メガ・ネが──神への反逆を唱となえる。
「ツインテイルブレス──!!」
　そして俺の左腕に、ツインテイルブレスが輝く。
　お前がアルティメギルの戦いくさ女め神がみなら──俺の左腕には、ツインテールの女神が宿っている!!
　光の中で両腕を交差させ、己おのれが持つツインテールの全力を確言した。
「────ツインテイルオン!!」
　大爆発が巻き起こった。採石場の広大な地面を連鎖爆裂させながらも、ヴァルキリアギルディの放った白光は未いまだ勢いを衰えさせない。
　その光を、内側から押し返す四色の光。

　テイルブルー・エターナルチェイン。
　テイルイエロー・アブソリュートチェイン。
　テイルブラック・インフィニティチェイン。
　そして俺──テイルレッド・アルティメットチェイン。



　全員で最強変身チエインエヴオルブした俺たちは、結集した属性力エレメーラを迸ほとばしらせ、神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟の光を破壊した。全ての光が崩壊し、地面が瀑ばく布ふの逆落としとなって土砂を噴き上げる。
　神槍を突きつけながら、ヴァルキリアギルディは僅わずかに嘆じた。
「ほう……さすがだな、ツインテイルズ。生なま半なかなツインテールの戦士では、我わが一ひと睨にらみで心のツインテールがつるつるになるのだが──諸君らのツインテールへの愛は、本物と見た」
　背後から次々と影の塊かたまりが飛び出し、彼女を守る壁のように立ちはだかった。
「ゆけ」
　俺たちを見据え、厳おごそかに命を下すヴァルキリアギルディ。
「モッケケケケケケーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　雪崩なだれのように突っ込んできた黒の壁は、いつもより甲かん高だかい声の戦闘員アルテイロイドだった。
「この局面で戦闘員モケー……!?　ううん、何か違う……!?」
　その突進を押し止めたブルーは、奇妙なほどの膂りょ力りょくに動揺する。
「それは強戦闘員メガアルテイロイド……死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが最終侵攻で使役した、強化された戦闘員アルテイロイドじゃ!!」
　すでに対戦経験があるというブラックは、強戦闘員メガアルテイロイドを見て憎にく々にくしげに歯は噛がみした。
「うすうす読めてきたぞ……この世界に侵攻する部隊の戦士全てに、ある時期から同じエレメリアンが入れ知恵をしておるな！　答えい、つるんつるん女よ!!」
　ブラックの追及を黙殺し、ヴァルキリアギルディは自身も神槍を構え直す。

「モッケーーーーーーーッ!!」
「っ……この、モケーのくせに！」
　狼ろう狽ばいするブルー、そしてイエロー、ブラックは、強戦闘員メガアルテイロイドに次々と分断されていく。
　戦闘員アルテイロイドを使って俺たちを消耗させようとする……プライドの高いの神の一剣ゴー・デイア・ソードには見られなかった戦法だ。俺の焦しよう燥そうを看破したのか、ヴァルキリアギルディは堂々と言い放つ。
「武ぶ勲くんだ、誉ほまれだと……理想に生きられるのは責任無き一兵のみ。私は首領様を御お守まもりする者……いかなる手段を用いてでも任務を完かん遂すいし、生きて帰還することこそが栄光なのだ!!」
　ティラノギルディと同じ、誇りより責務を重んじる精神性……手強いぞ……!!
　孤立した俺を標的に、戦いくさ女め神がみが迫撃する。
「ハァァァ……ゲッ!!」
　神ならざる身である俺には、理解の埒らち外がいを迸る裂れつ帛ぱくの咆ほう哮こう。
　烈れつ風ぷうを伴った刺し突とつをギリギリで回避し、俺は左のフォースリヴォンに触れる。
　抜き放ったブレイザーブレイドを奴やつのさらなる刺突に合わせようとして、俺は砕けて地面に散らばったウェイブランスの破片を思い出した。
　右の一刀は、フェニックスギルディたちとの戦いで砕けてしまった。残る左のブレイザーブレイドまで破壊されるわけにはいかない！
「テイルレガリアーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　俺の身体からだから飛び出した光が、天空でツインテールの形に実体

化する。

　双房戦闘支援機ツインテールアーマー・テイルレガリアが俺の心のままに機動し、空から光弾を乱れ撃つ。

「むむう、ツインテールを召喚するとは……ほとほと人間離れした少女だ……!!」

　圧倒的なツインテール弾幕から身を躱かわし、ヴァルキリアギルディが後退した隙すきに──

「テイルレガリア、来いッ!!」

　俺はテイルレガリアを天空より喚よび寄せ、予備ひだりのブレイザーブレイドに合体させる。

　完成した究極双房剣テイルカリバーを手にし、暴虐を続ける神の徒へと疾しつ駆くした。

　究極剣テイルカリバーと神槍ラグナロクの激突が、大気に巨大な波紋を爆裂させる。

「□□□□□□!?」

　押し合いを続ける中、不意に意識が遠くなりかけた。連戦が響いているのかもしれない。

　力任せに神しん槍そうを跳ね上げて距離を取ると、その僅わずかな間かん隙げきを縫ぬって強戦闘員メガアルテイロイドが俺の目前に押し寄せてきた。加速に備えて柄つかを変形させるテイルカリバー。

「テイルカリバー！　無限装填アンリミテツドモード!!」

　一斬が百斬へ。紅あかい尾を引いて飛翔する無数の剣けん閃せんが、強戦闘員メガアルテイロイドを鎧がい袖しゆう一いつ触しよくしていく。

「──ご主人様！　首輪紐リードをお受け取りください!!」

「よし！　テイルカリバー……生命装填ライフモード!!」

　俺はテイルカリバーを変形させてジョイントパーツを出現させる。イ

エローが首輪アブソリユートリングから伸ばした黄金のリードをドッキングさせた。

　俺からのチャージを受け取り、身体をびくびくと震ふるわせるイエロー。ヴォルティックブラスターフォートレスの銃口に、巨大な雷球が形成されていく。

『愛あい香かさん、イースナ！　強戦闘員メガアルテイロイドを一ひと塊かたまりにまとめてください!!』

「オッケー！」

　トゥアールの通信を受け、ブルーは手足に加積されたブレードで空に蒼あおき斬線を描きながら、鮮やかな体術で強戦闘員メガアルテイロイドを次々と打ち転がしていく。

「メガ・ネ！　メビウスクラッシャーじゃ!!」

　そしてブラックは、合体させたタイヤ型パーツにダークネスウィップを連結させた超重武器──メビウスクラッシャーで、一撃の下に強戦闘員メガアルテイロイドを叩たたき散らしていく。

　柔と剛のコンビネーションで一箇所にまとめられた強戦闘員メガアルテイロイドへ、イエローが限界までチャージしたヴォルティックブラスターフォートレスを撃ち放つ。

　隕石が地表に直撃したかのような大爆発の後、巨大なクレーターが地面に穿うがたれる。

　電光石火の速攻。奴やつのお株を奪って言うなら、護まもりの壁を完かん膚ぷ無きまでに無毛とした。

「よく舞う……皆、長い髪だ。一度は頭を過よぎったことがあろう……手入れが面倒だと。いっそつるつるすっきりすれば、どれだけ楽かと──」

　孤こ立りつ無む援えんとなりながらも、妙に余裕でそんな問いかけをしてくるヴァルキリアギルディ。

「――ないわね」
　ブルーは、石を打ち鳴らすような壮そう快かいさで切って捨てる。
「大変と思ったことはあっても、この髪を……ツインテールを煩わずらわしいと思ったことなんて一度もない。人間はね、手入れの手て間ま暇ひまを楽しむのも幸せなのよ!!」
「矛む盾じゆんだな……。髪以外は無毛を尊とうとび、手入れに勤いそしむのが、その人間とやらであろう。固定観念に囚われず髪もつるっとしてしまえば、新たな世界の扉が開けるものを」
　その発言にぎょっとし、やけに俺の方を気にしてくるブルー。
「い、いくら女のエレメリアンだからって、レッドの前で変な話題振るんじゃないわよ!!」
『言っておやりなさい愛あい香かさん！　ちゃんとあると！　〝あたしは髪以外を自分から見せる度胸はないけど、その日に備えてお手入れは――〟』
「それ以上喋しやべったら、一旦基地に戻ってあんたから先に処刑するわ」
　トゥアールの通信でこめかみをひくつかせるブルー。
「わらわとレッドは同じじゃが！　……イエローは、変身後はどうかのう……？」
「ふぇ……!?　わ、わかりませんわっ」
　まじまじとイエローを見つめてそう言うブラックの意図はよくわからないが、こいつの前で軽々しく変身前後とか言わない方がいいぞ……！
「フ……レッドたちはお手入れ要いらずか。そうだ、それでいい――」
　やけに頼もしげに俺を見てくるヴァルキリアギルディ。何な故ぜ視線を下に落とす……!?
「ったく……無毛属性アトリキアって、頭以外も守備範囲ってわけ……！」

　気を取り直すように勢いよく跳躍し、ブルーは槍やりを加速させた。
「あんたみたいな神様級の変態が出てきたってことは、あたしたちの戦いもいよいよ大詰めってことでしょ!?　むしろゴールが見えてやる気が出るってもんよ!!」
　神しん槍そうに対抗せしは、ブルーのウェイブランスエクシード。
　その槍の冴さえは、神槍の輝きに決してひけを取らない。
　イエローのヴォルティックブラスターフォートレスが、ブラックのダークネスグレイブメビウスが、ブルーの発奮に追随する。
　結集したツインテールが──伸びて靡なびくと、つるつる何するものぞと、乱舞する。
「メガ・ネ！　ガンガン飛ばせ、壊れるまでぶつけてやれ!!」
〈りょーかい！　うちかて、自分のツインテール取られるのいややもんな!!〉
　ブラックはタイヤ型の独立飛行防御盾シールドフライヤーを射出、振り下ろされた神槍を防ぐと、そのまま無軌道に飛翔させて攻撃へと転じた。
「後ろにご主人様が控えています、わたくしも後先考えないで撃ちまくりますわ!!」
　絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードとなったイエローは、射線を正面に集中して全火力を解放する。
「──なら、あたしは槍を見せないわよ……!!」
　属性玉変換機構エレメリーションを同時発動するブルー。
　邪険属性クルールで不可視と化したウェイブランスエクシードを、体操服属性ブルマと頬属性パフの加護で射出──天空で無限跳弾するブルーの槍そう撃げきは、本物の槍やりを見せてやると断じたヴァルキリアギルディへの返答アンサーのようでもあった。
「飛べ、セイバーーーーーーーーーーーーッ!!」

　そして俺は、背中に背負う強化されたブレイザーセイバー……いわばアルティメットセイバーを全射出、炎の斬光を天狭しと描き上げる。
　機甲の弾丸が。天引き裂さく重爆が。不可視の流星が。そして、天てん翔かけるツインテールが。
　ツインテイルズの全火力が──戦いくさ女め神がみに殺到する。
「なるほど、凄すさまじい──」
　回避に徹していたヴァルキリアギルディは、次第に逃げ場を失っていく。
　しかし、決して自分から攻撃には転じず、その神しん槍そうで攻撃を捌さばくのみに終始する。
（何だあいつ、まるで何かを待っているような──!?）
　直後──ヴァルキリアギルディは唐突に空中で静止。俺たちを傲ごう然ぜんと見下ろしてきた。
「君たち自身が恐怖を超克したのはよくわかった……だが、その鎧よろいはどうかな？」
「ッ!?」
　最初に足を止めたのはブルーだった。イエロー、ブラックが続き、俺もまた自身を襲おそう耐え難い倦けん怠たい感に困惑する。
「ぐっ……何じゃこれは、メガ・ネ……！」
〈あ、あかん、何や無理矢理引っぺがされるみたいや……!!〉
「何じゃと!?」
　ブラックの苦悶を皮切りに、最強変身チエインエヴオルブしたブルー、イエロー、ブラックのギアが、輪郭がぶれるかのように鳴動し始める。
「……テ……テイルギアそのものが……震ふるえているようですわ……!!」
　手の平を見つめて歯を食いしばるイエロー。

「言ったはずだ。我わが神槍は、全てを剃そり落とすと。君たちは私と戦えば戦うほど、この威光をそのツインテールに浴び続ける。身にまとった鎧が、無毛に怯おびえているのだ──!!」
　こいつの槍と打ち合うと急激に力を消耗したのは、そういう絡から繰くりか!!
　つるつるになろうよという邪悪な誘惑が、ツインテール属性を蝕むしばんでいく……！
　俺たちのツインテールが……剃り落とされることに怯えている!!
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士を侮あなどったな……。私たちは四し頂ちよう軍ぐんの最頂……すなわち属性力エレメーラの頂点を極めし戦士。攻撃せしは肉体ではなく魂たましい。私は戦士の心をこそ轢れき滅めつする」
　最強の自負を堂々と謳い上げるヴァルキリアギルディ。
「ッ……任せて、みんな……こいつの能力が敵を弱体化させるなら、あたしもそれを使って同じ土俵に引きずり下ろしてやるわ……!!」
　ブルーは全員を庇かばうようにして進み出ると、エターナルチェインの装甲に搭載された全身七箇所の属性玉変換機構エレメリーシヨンを分離。左腕に全合体させた。
「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」
　現在進行で対戦している相手の能力さえ取り込むエターナルチェインの極意。
『！　駄目です愛あい香かさん、そいつの能力を取り込んだら!!』
　属性玉完全解放ブレイクエレメリーズを発動したブルーを、トゥアールが泡を食って止めようとした。
「あっ……!?　ああああああああああああああああああああああああああっ!!」
　しかし──時すでに遅く、ヴァルキリアギルディの力を取り込もうとし

たブルーは、エターナルチェインの装甲を放電させて大地に膝ひざをついた。
「ブルー、しっかりしろ!!」
　ブルーのダメージも深刻だが、視線を送ったイエロー、ブラックもどんどん弱っていく。
「私の神通力ちからを他の戦士と同列に考えるな。我わが愛はツインテールの戦士にとって猛毒そのもの……毒を自ら食らうとは、愚かな戦士だ」
『ツインテールの完全なる敵対属性の力を投影しようとしたことで、ただでさえ消耗していたテイルギアが拒絶反応を……！　属性力エレメーラのアナフィラキシーショックです!!』
　悲鳴のように通信で叫ぶトゥアール。
「ッ……あ、ああああああああ……!!」
　頭を押さえて屈み込むブルー。頭痛に耐えているというよりは、ツインテールを離すまいとしている、本当にそこにあるか懸命に確かめているような、悲痛な仕草だった。
「我が神光を自身に直接取り込んだテイルブルーは、君たちよりもはっきりと心に映ったはずだ。ツインテールが滅び、完かん膚ぷ無きまでにつるつるとなった、自らの頭部あたまを──!!」
　愛香が──つるつるに!?
「そしてまとった鎧よろいの護まもりが薄れれば……晒さらされた君たちの心も剃そり落ちてゆくのだ!!」
　槍やりの穂先で俺たちを指し示すヴァルキリアギルディ。
　瞬間、仲間たちのテイルギアが激しい放電を始めた。
「「「ッ……あ、あああああああああああああああああ!!」」」
「ブルー！　イエロー！　ブラック!!」
　ついに解除されてしまう最強変身チエインエヴオルブ。

ブルーとイエローはノーマルチェインに戻って地面に倒れ込み、ブラックは強制的に合体解除。メガ・ネは、ダメージの影響で待機状態セーブモードにまでパワーダウンしてしまった。
「テイルブルー、君のツインテールを見て特別な何かを感じたのだが……どうやら私の思い違いであったようだ」
「ッく、あ、あああ……!!」
ヴァルキリアギルディの失望めいた言葉も聞こえない様子で、激しく苦しむブルー。
このままでは最強変身チエインエヴオルブどころか、変身そのものが解除されてしまう……!!
「しっかりしろ、ブルー……お前のツインテールは、ちゃんとそこにある!!」
俺はブルーを勇気づけながらも自身のツインテールに意識を集中し、アルティメットチェインの強制解除に抗あらがう。
「やはりテイルレッドがもっとも強く無毛へと刃向かうか……む？」
よろめきながら立ち上がるブラックを見て、ヴァルキリアギルディは小さく嘆息を零した。
「ほう、そうか……君は確か眼鏡めがねの戦士……他のツインテイルズと違い鎧よろいの核に眼鏡属性グラスが大きく作用している分、私のもたらす無毛へ反抗できるということか」
「そ、それも……あるがな……。大事な友達に、髪の毛のことで失言をしてしまった負い目がある……このぐらいは踏ん張らねば！　わらわも、無毛属性アトリキアなぞには負けんぞ!!」
──トゥアールへの失言から自責に涙し、髪の大切さを心に刻んだブラック……彼女もまた、無毛と戦っている。
心奮わされ、決然とヴァルキリアギルディを見据える俺の脳裏に、声が響きわたった。

（レッド……わらわが何とか無事なのは、精神攻撃を得意とするゆえ、耐性があることも大きい。まずはブルーを救わねばならぬ、わらわの力を基にテイルカリバーを展開せよ!!）
　ブラックの声だ。ヴァルキリアギルディに悟られないよう、精神干渉能力で直接俺の精神に語りかけている。俺は心の中で応答した。
「──テイルカリバー！　無力装填エクスティンクモード……!!」
　ブラックに託された精神攻撃波の斬裂イメージを新たな装填モードへ重ねると、テイルカリバーの刀身がハサミ状に展開変形する。
　一度ツインテール属性を失い、極限の無力を自身のツインテールに味わったからこそこの身に宿った装填ちから……敵の呪じゆ縛ばくを一瞬だけ無力化する機能。
　ブラックのおかげで、自身の闇ともいえるその真理とも向き合うことができた。
　ブラックの首しゆ肯こうを受け──俺は、ブルー目掛けてテイルカリバーを一いつ閃せんした！
「ブルーのツインテールを……消えさせてたまるかああああああああああああああ!!」
　瞬間、ブルーを一際強く取り巻いていた波動が霧散。
「……何!?」
　さしものヴァルキリアギルディも、驚嘆に息を呑のむ。
「ッ……は、あ……!!」
　呪縛から解放され、ブルーは荒い息を整え始める。
「幾つもの真理を、そのツインテールに刻んできたか。なるほど、無毛を拒こばむわけだ」
　俺が手にするテイルカリバーを、まじろぎもせず見つめるヴァルキリアギルディ。
　ヴァルキリアギルディの神しん槍そうから間断無く送り込まれる無毛

のイメージそのものは裂断できない。だがブルーが取り込み、二重に背負った呪じゆ縛ばくは確かに断ち斬きった……チャンスだ!!

「完全解放ブレイクレリーズ──テイルカリバー！　究極装填アルテイメットモード!!」

　テイルカリバーに宿る超越の極炎。ツインテール在るからこそ灯ともる、黄金の波光。

　完全解放ブレイクレリーズしたテイルカリバーの光に照らされ、幽かすかにひるむヴァルキリアギルディ。

　無毛を強制するお前に──髪の毛の！　ツインテールの熱き輝きを見せてやる!!

「ファイナル……ブレイ

ザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」

　天空を貫く次元斬撃が、戦いくさ女め神がみを呑のみ込んでいく。

「……手て応ごたえあった……！」

　息を乱しながら見る爆煙の中、艶やかに光る頭部のような光が強まっていく。

〈……私の愛する無毛に、手応えはない……。ただ、磨き抜かれた頭頂あるのみ!!〉

　煙が全て噴き消える頃には、ヴァルキリアギルディが健在な五体を誇り示した。

　馬ば鹿かな、奴やつの信念はどうあれ、確かに俺の剣けん閃せんは手応えを感じていた！

「もっとも、君が弱っていなければ危なかった。これが究極のツインテールの力か……」

　いや、ヴァルキリアギルディもかなり弱っているのは確実だ。あと一押しのはず……！

「よくわかった。君は元より、他のツインテイルズの心を断だん髪ぱつ

するのは容易ではないようだ。やはり──君たちの相手は、この私ではない」
　唐突に撤退を示し唆さするような物言いに、俺は言い知れぬ焦しよう燥そうに駆られた。
　テイルカリバーを構え、ヴァルキリアギルディと対たい峙じする。
「神の使いが逃げるのか!?　俺と戦え、ヴァルキリアギルディ!!」
「……私は首領様を御お守まもりするが至上任務。そのためには、究極のツインテールとて拘こう泥でいするには能あたわない」
　俺の拙つたない挑発にも、優雅なまでの余裕を持って応じるヴァルキリアギルディ。
　この戦女神は、自身の責務である首領の守護を全てにおいて優先させることができる。
　人間に背を向けることさえ、恥と思わない強さがあるのだ。
『総そう二じ様……確かにヴァルキリアギルディは脅威ですが、ここは一旦体勢を立て直しましょう……。愛あい香かさんのダメージが甚大です……!!』
　トゥアールの通信で、俺は熱くなりすぎたツインテールを冷やす。
　アルティメットチェインを解除し、仲間へと振り返った。
　冷静になるんだ。一旦撤退して仲間たちの傷を癒いやせるのならば、それが一番いい。
　──しかし……ヴァルキリアギルディは、自身は撤退こそすれ、俺たちとの戦いを放棄するつもりはないようだった。
「後は、この者が引き継ぐ」
　その言葉を引き金とするように、戦場に疾風が吹き荒れる。
　巻き起こる土煙の只ただ中なかで光る紅あかい双そう眸ぼうが、過あやまたず俺を射てくる。
「ッ……やっぱり、お前は……!!」

晴れゆく土煙の中、勇ましく地面を震ふるわせて歩を進めてくる剛剣士。
戦いくさ女め神がみと同等の存在感をまとい、戦場に降臨したのは――先刻剣を交えたばかりの龍神。
――――ドラグギルディだった。
今度は黒いローブをまとっていない。とてつもないオーラを総身に発散させている。
ドラグギルディが響かせる足音と、俺の胸を打つ鼓動が重なっていく――。
「ド……ドラグ、ギルディ……!?　何で、あいつが……!?」
何とか我われに返ったブルーだが、突とつ如じょとして出現したドラグギルディを前に、再び取り乱す。
かつて、たった二人で決戦を乗り越えたのだ。ブルーもその強さは肌で知っている。
「どういうことじゃ、あやつは一体……」
ブラックも、組織でその勇名は幾度と耳にしただろう。
「あれ、が……」
本能的に自身の右腕を見つめるイエロー。
そう……ドラグギルディの魂たましいは――ツインテール属性は、テイルブレスとなって今なおイエローの右腕に宿っている。
テイルイエローとドラグギルディ。
同時に存在するはずのない二人が同じ大地に立つこの矛む盾じゅんに直面し――大いなるツインテールの斬きり結びを経て得た真実が……あいつは本物だという思いが、揺らいでいく。
心に残っていた郷愁を戦意に変え、目の前の〝敵〟に向かい合おうとした、その時。

「──ツインテールは変わらず壮健なようだな……テイルレッド」

　その勇ましい声が、幾久方ぶりに俺の耳じ朶だを叩たたく。
「ッ……な……お前……!!」
　揺らぎ、定まり、また流る転てんする確信。僅わずかに生まれた偽への念を砕くその声は、俺のツインテールで音おん叉さのように反響し続けた。
「相対せし彼かの戦士……よもや、魂無き抜け殻だと思い違えておるまいな？」
　俺の心を見抜いたかのように警告し、ヴァルキリアギルディは天高く浮遊する。
　まるで現れたドラグギルディを祝福するかのように、背に光の翼を拡ひろげる。
　その翼は──フェニックスギルディのものと酷似していた。
「……やっぱり、フェニックスギルディのミラージュリヴァイブを手にしたエレメリアンってのは、お前のことだったんだな!!」
「いかにも……しかし、ミラージュリヴァイブ？　亡者を操る些さ末まつな力など、元より魂を使徒とする私には不要。私が受け容いれたのは……かの反逆者の持つ、完全再生能力だ」
　こいつは元々、ミラージュリヴァイブと同等以上の能力は持っていた……手に入れたのはフェニックスギルディの再生能力。最悪の予感が、俺のツインテールを横ばいから殴なぐりつける。
「そして結晶した我わが能力、〝死して尚変態ヴアルハラ〟……散りし勇者は、神の御み心こころによって再誕する」
「再誕だと……それじゃあこいつは、俺と戦ったドラグギルディそのものなのか!!」
　死した戦士に、さらなる生を強要する──。

まさしく戦いくさ女め神がみの傲ごう慢まん……ヴァルキリーハラスメント！

─ヴァルハラということか……!!

「ここでヴァルキリアギルディを逃がしたらおしまいだ……次々にエレメリアンを復活させられてしまうかもしれない!!」

フェニックスギルディがあり得ないと言い切った、記憶や魂たましいまで余さず完全再生させるという奇跡を、この戦女神は実現している。

ドラグギルディを気にしている場合じゃない、先にこいつを倒さなければ!!

「───少し、遅かったな」

「何……!?」

終しゅう焉えんを告げるかのような冷徹なヴァルキリアギルディの言葉。

俺たちの頭上で、黒雲から雷鳴が轟とどろいた。

「裁きは下された。アルティメギルを護まもり囲む城壁を……四頂の三壁を瓦が解かいさせた罪、今こそ贖あがなってもらうぞ、ツインテイルズよ」

不死鳥の力の証あかしである光の翼を背に、ヴァルキリアギルディが神しん槍そうを一いつ閃せんした瞬間。

全ての音が消え、恐ろしい程の静寂が辺りを支配した。

どれくらい長い時が過ぎただろう……いや、あるいは一瞬だったのかもしれない。

静寂を斬きり裂さいたのは、小さな音だった。

何かが何かにぶつかり、転がるような、日常では聞き逃すほどのささやかな音。

それがやけに大きく聞こえたのは─何かの前触れだったのだろうか。

その音は、崖がけから転がり落ちた小さな石の発したものだった。

俺は一人、言い知れぬ予感に襲おそわれ、背後の崖を振り返る。
「……な……」
立ち尽くし、驚きよう愕がくする。言葉を失う。
俺の視界の先に立っていたのは、エレメリアンだった。
この世界の人類が初めて遭遇し、俺が初めて立ち向かったエレメリアン。
──リザドギルディだった。
そしてその横には……倒して間もないカメレオギルディがいる。
その横には──
「────嘘うそ、だ……」
タトルギルディがいる。
フォクスギルディがいる。ラビットギルディがいる。タイガギルディがいる。
クラブギルディがいる。バッファローギルディがいる。ブルギルディがいる。リヴァイアギルディがいる。クラーケギルディがいる。
パピヨンギルディがいる。ケルベロスギルディがいる。オウルギルディがいる。シーラカンスギルディがいる。ワームギルディがいる。スネイルギルディがいる。フリイギルディがいる。アラクネギルディがいる。チェリーブロギルディがいる。ラフレシアギルディがいる。マンドラゴラギルディがいる。カクタスギルディがいる。ユグドラシルギルディがいる。ホッパーギルディがいる。マンティスギルディがいる。アントギルディがいる。シケーダギルディがいる。モスキートギルディがいる。アメーバギルディがいる。フラミンゴギルディがいる。モウラギルディがいる。ビートルギルディがいる。スタッグギルディがいる。トリケラトップギルディがいる。プテラギルディがいる。メガネウラギルディがいるアンモナギルディがトリロバギルディがコックロチギルディがブラキオギルディがマンモギルディがロンギスギルディがハルキゲギ

ルディがケントロギルディがアンフィコギルディがいる。ティラノギルディがいる。

　数えきれない。視認しきれない。他にもまだまだいる。

　空じゃない、大地でもない。エレメリアンだ。

　眼に映る全てが、エレメリアンだった────。

「こんな……ことが……」

　最後に崖がけへと飛び立ったドラグギルディが、戦士たちの中心に仁王立ちした。

　俺たちがこの世界で倒したエレメリアン……いや、やはりロエルたちの危き惧ぐどおりなのだろう、異世界で倒したはずの貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンまで。

　ツインテイルズが戦ってきた全てのエレメリアンが今、目の前に結集している──。

　俺がドラグギルディを見据えているのと同時。

　ブルーが、イエローが、ブラックが。

　それぞれ魂たましいをぶつけ合った強敵と、導かれ合うように視線が交錯していくのがわかる。

　ブルーと喧けん嘩か仲間さながらの清せい澄ちょうなタイマンを繰り広げたという女戦士・ラフレシアギルディ。彼女は鉄パイプ状の武器を肩に担かつぎ、血気盛んな声を張り上げた。

「あん？　何だよ何だよ、あたいらがせっかくあの世から隊総出で痛臨苦ツーリングしてきたってえのによ、随分しけた目ェしてやがんなあ、テイルブルー‼」

「───っ、は、あんた……何よ、ほ、本物……じゃない……」

　僅わずかな喜色を押さえ込むように、頰ほおを強こわ張ばらせるブルー。その気持ちは痛いほどわかる。

　一期一会の戦いの中で束つかの間まの友情を結んだ、戦友にも似た者

も数多くいるとはいえ……ここに居並ぶエレメリアンたちは、全て俺たちが打倒してきた存在。

どんな顔をして再会すればいいというのだ。

続いて口を開いたのは──美の四心ビー・テイフル・ハート隊長。イエローとの壮絶な戦いの末に宇宙に散った勇士、ビートルギルディだった。

「今いま際わの際きわの告白を餞はなむけに散った私が、こうして再び貴女あなたと相対するとは……」

「……この状況では、なんと返していいか……困りますわね……」

照れくさそうなビートルギルディの声に、イエローが複雑な表情を浮かべる。

それに続き、母性に彷ほう徨こうした空の勇者、プテラギルディが短く嘆じた。

「……お母さん……！」

「お前、一度死んでもマザコンが直らなんだか!!」

プテラギルディに渋い声で呼びかけられ、ブラックが母親じみた厳しい叱責を返す。

みんな……僅わずかに言葉を交わしただけで肺はい腑ふに染みてしまったのだろう。

この戦士たちは、自分たちが戦った強敵に相違ないのだと。

雄おゝおしく居並ぶ戦士たちの中にあって、ブルーに対して騎士のように恭うやうやしく礼を尽くすのは、貧乳属性スモールバストのクラーケギルディ。

「フッ……。また一段と貧乳になられましたな、姫──」

「なってたまるかああああああああああああああああ……っ……ぐ……!!」

甚大なダメージが響き、信念のツッコミさえ満足に完かん遂すいでき

ないブルー。
　全てに因縁がある。全てが信念をぶつけた戦いだった。
　全てが──好敵手だった。
　止まった時が動き出した今、あいつらはその誰だれもが俺たちに語る言葉を持つのだろう。
　満を持したように一歩進み出たのは、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス隊長ティラノギルディ。
「テイルレ──」
　しかしその言葉もまた、あと一歩で遮さえぎられる。
「壮観だな───」
　この光景を作り出した張本人であるヴァルキリアギルディが、感慨深く嘆じたのだ。
「本来、ここまでの地獄が顕けん現げんするなどありえん……。私の力は所しよ詮せん、ツインテールの戦士に罪を自覚させるための余興でしかない」
　神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟を空に旋転させ、その刃やいばを地面に突き立てるヴァルキリアギルディ。
「しかし、君たちはエレメリアンを倒しすぎた。目の前に広がる阿あ鼻び叫きよう喚かんは、君たちの重ねた罪の具現だと知りたまえ」
　そのとおりだ。戸惑いが先行しているが、目の前に広がるのは間違いなく地獄だ。
「人間とは不思議なものだ。より強い……より高い相手ハードルを前にすれば、奮起し飛び越えようとする……。しかし、見えていたゴールを遠ざけてやれば、あっさりと心が折れるのだよ」
　それが……その邪悪な理念が、アルティメギルの審判者・ヴァルキリアギルディの裁きだというのか。
　そして俺は、神の一剣ゴー・デイア・ソードの脅威に怯おびえて降伏

することを嘆願した、かつてのイースナの言葉を思い出す。
『神の一剣ゴー・デイア・ソードが出撃する理由は、たった一つ……その世界を──アルティメギルの故郷へと塗り替えるための征服じゃ……!!』
　エレメリアンで埋め尽くされた世界。
　目の前に広がるのは──まさに、彼女が語った伝説そのものではないか。
『この世界は、エレメリアン生誕の地へと造り変えられてしまう！　未み来らい永えい劫ごう、幾いく星せい霜そうの果てまで、この星は怪人がはびこる地獄と化す!!』
　こいつは……ヴァルキリアギルディは、すでにミラージュリヴァイブと同等の能力を……死者を操る能力を持っていた。
　フェニックスギルディと違い、任務のためと遠慮なくその能力を振るい続けてきたのだとしたら──。
「……そういうことだったのか……。神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士が出撃すれば、エレメリアンの支配する世界になってしまうっていうのは……」
　俺は、気づいた真実を震ふるえる声で口にする。
「───いかにも。その伝説を作ったのは……この私だ」
　崖がけの端から端まで視線を走らせ、満足したように俺たちに向き直るヴァルキリアギルディ。
　その能力を持っていた本人は……ドラグギルディを追うと言ってくれたフェニックスギルディは、いったいどうしてしまったんだ。
　別れ際に懐いた不安を俺が思い出したその時──集結したエレメリアンたちの放つ闘気が、周囲を激しく震わせ始めた。

　仲間と語り合い、笑い合った日々。多くの出会いと同じぐらい、多く

の戦いがあった。
　積み重ねられてきた戦いの終着点が、ようやく見え始めてきた。
　しかし、目に見えていた終着点は、神の気紛れによって新たなる出発点と化す。

「これまでの全ての戦いが無に帰した気分はどうだ？　罪つみ人びとたちよ」
　戦いくさ女め神がみの賜たまわす神託プロヴィデンスが、無力な人間へと審判をもたらした。

「ここまで奮戦ご苦労──ツインテイルズ。それでは、もう一度初めからやり直すがいい」

エピローグ　あの日交わした約束。

　世界全てを覆おおい尽くすかのような黒雲に、雷鳴が轟とどろく。稲光に照らされるエレメリアンたち──その全ての目が、俺たちツインテイルズへと向けられている。
　予兆は幾つもあった。
　ロエルとリルナが、懸命に危機を伝えようとしてくれた。
　イエローが、その場に存在しないエレメリアンの姿を幻視した。
　倒したはずのカンガギルディが、再び出現していた。
　他にも、小さな違和感、ふとした既視感が、数多くあった……。
　強引に納得せず、楽観せず、それらと向き合ってさえいれば。
　果たしてこの審判の日は、食い止められただろうか。
「これほどの揃そろい踏みを前にして、君たちにあるのは恐怖ではない……郷愁だ。よほどよき戦いをしてきたのだろう……しかし、だからこそ、その思いは必ず絶望へと転じる」
　宇宙に散った勇士ビートルギルディ。
　勢揃いした戦士たちの背後に立つ、雲まで届くほどの巨大な神樹ユグドラシルギルディ。
　そして……俺と最大の死闘を繰り広げた帝王、ティラノギルディ。
　四し頂ちよう軍ぐんの三隊長が揃って並ぶ姿に、俺たちは完全に気け圧おされてしまっていた。
　それと同時、どうしようもない郷愁……安あん堵どさえ、俺は浮かべちまってる……!!
　ドラグギルディは居並んだのエレメリアンたちの反応を窺うかがうよ

うに頷うなずいていたが、視線を馳はせた眼下の俺達の中に、自身が戦った時にはいなかった戦士の存在を認めた。
「黄色と、黒のツインテイルズ……？　む、お主は……」
　健けな気げに睨にらみ返すブラックを見て、全てを悟ったように微笑ほほえむドラグギルディ。
「そうか、君がツインテイルズに……私が斃たおされてから先、凄すさまじい激闘があったのだな」
　しかし、その微笑みも一瞬。ヴァルキリアギルディが、まるで一団の長に命を下すようにドラグギルディへと話しかける。
「我わが使徒、〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちよ……この世界は君たちに任せよう」
　その言葉を受け、ドラグギルディはその豪腕で空を薙ないだ。
「聞けい！　ツインテイルズよ!!」
　空に響き渡る大音声おんじよう。マントを翻ひるがえし、高々と腕を掲げるドラグギルディ。
「生まれ変わりし我われらは軍団の垣根を越え、ツインテイルズに立ち向かう同志!!」
　龍神の挙げしその腕こそが、軍団を繫つなぐ旗印となった。
「今ここに、ネオアルティメギルの結成を宣言する!!」

　崖がけを揺るがす歓声。
　自分よりも立場が上のはずの四し頂ちよう軍ぐんまでもを率いる、ドラグギルディのカリスマ性。
　復活しただけでは満足せず、更なる高みへと飛翔はばたく。
　人智勇を兼ね備えたエレメリアンは、驕ることなく全力でツインテイルズに宣戦布告してきたのだ。
「おのれ、テイルレッドは明らかにドラグギルディを一番意識してい

る……！　この帝王とはあれほどの凄絶な死闘を繰り広げたというのに、何な故ぜだ！　……おおーうい!!」
　ティラノギルディだけが何か文句を言っているようだが……俺に向けて手を振っているような気もするが、ドラグギルディの言葉の衝撃に全てがかき消えた。
　ネオアルティメギル──初めからツインテイルズ打倒のみを心に誓った究極の部隊が、今誕生してしまったのだ。
「大恩ある組織に新生の名を冠するとは、傲ごう慢まんな……。だがしょせん死人の愚連隊、名付け程度は見逃してやろう」
　ヴァルキリアギルディはその宣言を見届け、そして認めるように首しゅ肯こうする。
　ドラグギルディはただただ動揺に立ち尽くすばかりの俺に喝を入れるように、雄お々おしく語りかけてきた。
「運命とは数奇なものだ。彼かの約束──こうしてしかと果たすこととなろうとは」
「□□□□□□!!」
　約束──その言葉に、俺のツインテールが過去へと立ち戻っていく。
　あの日打ち合わせた剣撃の音が。
　まるでつい先刻の出来事のように、色鮮やかに蘇よみがえる。

『来世いつか────』
　あの日ドラグギルディは、最期の言葉を託した。

『お前がツインテールを愛する限り────』
　俺は、それに応じた。
　今幾戦いを経て──あの日交わした約束が果たされたのだ。

「――――また、逢えたな。テイルレッド―」

　穏やかな再会の言葉が、俺たちの最大の戦いの幕を開けた――――。

あとツインテールがき

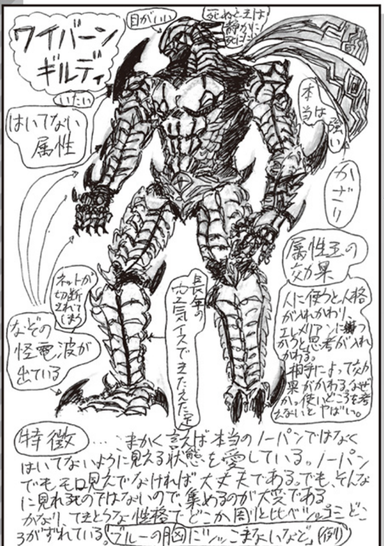
　お久しぶりです、水みず沢さわ夢ゆめです。
　春に始まった物語。初々しいブレザーに身を包み入学した高校生が、半袖そでになり、またブレザーを着て、そして今はコートを着る……季節の移ろいは、物語の歴史を感じます。
　その歴史をあらためて振り返ると、こんなにも多くの強敵たちと総そう二じたちは戦ってきたのだなあとしみじみ感じます。
　大好きな某ヒーロー作品を例に『俺ツイ』の話をすると、五巻は物語が少し進んだ時点で遭遇する大がかりなスケールの事件……冬の劇場版なら、次の一三巻は、クライマックス直前に繰り広げられる作品総決算のバトル、夏の劇場版というイメージでしょうか。（平成二期準拠）
　俺ツイ作中の時間では四巻が夏、一三巻が冬ですけどね！
　というわけで、次回を楽しみにお待ちください！
　謝辞です。イラストの春日かすがさん、壮観な怪人イラスト、感無量です！　ヒーロー作品を書いてきて本当に良かったと思いました！
　担当の濱はま田ださん、黒髪派なようですね、僕はけっこう赤髪派です！
　今回も、完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.009

ワイバギルディ
(応募時：ワイバーンギルディ)

属性：非穿属性
(応募時：はいてない属性)



愛知県／A・Hさん(15歳)の作品

水沢夢の選んだポイント

神の一剣が登場したら必ず出そうと決めていたエレメリアンです。作中に無理なく取り込める設定が数多く盛り込まれており、個人的にノーパンを見るために空気イスで足を鍛えていたという設定が大好きでした。そういう体育会系な背景にはさすがの愛香さんも「おっ」と反応してしまうんですね。エレメリアンも色々な修行をしているのです!

水沢夢よりごあいさつ

今回でこのコーナーは一区切りとなります。その締めに相応しい一体だったと思います。そしてここまでにご応募いただいたエレメリアンたちは、本編には登場しなくても話と話の間のどこかで総二たちツインテイルズと激闘を繰り広げたはずです! 本当は外伝とか番外編とか出せればもっともっといっぱい応募エレメリアンを出せるのですが……(ボソッ) さあ、ガガガ文庫に「俺ツイの番外編が見たい」とお便りだ! 皆様、これまで本当にたくさんの力作・怪作の応募ありがとうございました!

『俺、ツインテールになります。』の物語も終盤戦に突入したということで、長らくご愛顧いただいたこの「ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー」も今回で一区切りとさせていただきます。また何かの機会に復活するかもしれませんが……。その時は再び、皆さんのみなぎる属性力を当コーナーにぶつけてください!

これまで多くの作品のご応募、誠にありがとうございました!

ガガガ文庫編集部

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。主人公の総二はもちろん、ヒロインたちもみんな心を込めて書いている大切な子供たちです。心を込めて書いているのは敵キャラ・エレメリアンも同じ。色とりどりの変態たち全てに思い出があります。……つまりエレメリアンも子供なのか……。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。12

２０１６年10月28日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１６年10月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451635-7